



始





886

客客 俠俠 小小 天天 狗狗 小小 次次 郎郎

神田神田 伯伯 龍龍 謙謙 演演
九山九山 平平 次次 郎郎 速速 記記

小 天 狗 小 次 郎

客 俠 小 天 狗 小 次 郎

第 一 回

神 田 伯 龍 講 演
丸 山 平 次 郎 速 記

エ、本日より御披露に及びまする講談は、昨冬十二月發行いたしま
 したる観音丹次の後編にございまして、今回は『小天狗小次郎』と
 表題を下して伺ひまするが、豫て前編に御披露いたし置きましたる
 通り、観音丹次は、上州高崎九藏町荒浪清六の忤分となりまして、
 非常に彼の地で賣り出して居りました、とところが圖らず近江屋伊兵
 衛家の者が殺害せられました事件に就きまして、其の身は無實の
 罪人となり、壓制の奉行柏木半左衛門の白洲に於て、種々様々の責



4手2月
325

小 天 狗 小 次 郎

苦に遣ひ、遂には其の人殺しの罪人と取極りまして、愈々お仕置と
いふことに相成りました。どころが荒浪清六を首り重立つたる子分
の輩が、今日しも丹次がお仕置に上らんとする其の當日に、上方見
物より立歸つて参りまして、是れ等の願ぎを聞きませると、開は容
易ならざることを心得ました。何分今仕置といふ切迫詰つたる場
合でございませうから、遂に非常手段を用ひまして、清六は子分を引
伴れ暴亂にも仕置場へ乗り込んでは、檢使の役人を打ち飛ばし、其
礮柱を引抜いて、自家の宅へ持ち歸らせ、其の上其の身は高崎の城
内へ駆けつけて、御家老原兵衛といへる仁に就て、命を捨て、再吟
味を歎願に及ばんとする、一方の子分の輩は、奉行柏木半左衛門が
是れ等の願動を取らんと、馬の上にて乗り出して来た奴を、亂暴に
も馬から引摺り下して袋叩きに及び、愈々丹次を助けること能はざ
れば、この高崎の城主を相手に斬り死をせんぞ決心の上、斯う兩派
に別つて亂暴といふことに相成り、實に上州高崎建て始まつて以來

小 天 狗 小 次 郎

の大騒動を惹起したのでございませう。どころが遂に大悪無道の曲者
なる、彼の近江屋伊兵衛の番頭彦七、又是れに同意を致しましたる
倉賀野驛の惣の重吉、是等の者の悪事が些細なるところから露顯に
及び、遂に丹次は無實なること判明して、晴天白日の身と相成らう
といふ、眼目のどころに至りまして、何分紙數の限りに依りまして
前編は是れにてお預かりと致し置きまして、此の界隈の河川で小魚を漁りま
れば、今日より其の續話を伺ふことに仕ります。この河川で小魚を漁りま
町端に微かな住居をいたしまして、この界隈の河川で小魚を漁りま
して、之れを町に賣り歩きませう。漁師といふではございませんが
傳兵衛といふ老翁がございませう。今日しも觀音丹次のお處刑に處
るといふことを耳にして居りませう。その身は諸川へ出まして、難魚
を漁るのが生業です。居りませう。支度をして、網
を掲げ、今宅を出やうとして居りませう。どころへ色若醒めて這入つ
て参りましたのは、住吉町の若松屋といふ刀屋に奉公いたして居り

まする手代の傳吉でございませう。傳吉「お父さん、これから支度をしてお出掛けかい。傳兵「オ、傳吉か、何處へ行つた。傳吉「大變なことが出来た。マアお前さんに相談があつて来たんだが、傳兵「何だ。傳吉「マア一寸内へ這入つてお呉れ。漸う内方へ這入つて参りました。傳兵「汝は大變な顔色が悪いが、また何か主人の宅で過失つたんぢやないか。傳吉「さうぢやアありません。私は豫てお前に話をして居る。觀音の親方に生命を助けて貰ひ、刀を取返して貰つてから、モウこれ殆ど三年はどになる、何うぞマアあの親方には何か恩報じを仕たいと思つて居たことだが、その丹次さんが今日お處刑になるんだと傳兵「マア、乃公も其のことは近所の人から聞いたが、實にお氣の毒なことだと思つて居るんだ、全何ういふことで其様になつたんだ。傳吉「それは近江屋といふ呉服屋の主人親子の者を殺したとやらで、お召捕りになつて、長らくの間調べられて居らつしやつたが、到頭白状なすつたとか云ふので、今日お處刑だ。私「マア今日は氣持が悪くつて

仕方がない、御主人にお暇を願つて歸つて来たんだがね、何うぞしてお前一つ力を貸して呉れないか、成るべくならば彼のお方に代つて、私が近江屋の主人親子の者を殺したと云つて訴へやうと思ふんだがね。傳兵「これ傳吉「馬鹿なことを云へ、汝はそれで宜いか知らぬが、乃父は年を老つて汝一人を便りにして居るんだ、その汝が其様な馬鹿なことをして何うするんだ。傳吉「それだからさ、お前に相談に来たんだ、何うぞ致して助ける工夫はあるまいか。傳兵「そんな詰らぬことを云ふな、幾ら手前が焦つたつて何うしたつて、お上はお上の法で遣りなされる、夫れよりは汝が生命を助けて貰つたと思へば、マア今日お處刑となつたら、極楽往生でもなさる様に念佛でも唱へて切つて跡後の吊祭をするのが何よりのことだ、悪いことは云はないから、乃公も其んなら漁業に出掛けやつを止さう。マア香華でも手向けて、お父さん助けるといふ譯には能きませうまいかね。傳兵「それは迎も

吾々 手に及ぶことでないから 傳吉「そんならお父さん、今日は私も
お暇を頂いて歸つたのだから、何うぞ御回向をして下さい 傳兵「よ
それが何よりである」と老爺も實に氣の毒と思ひましたか、早速押
入を閉けますと、ほんの印ばかりの佛壇の様な物が拵へてございま
す、それをへ燈明を献げまして、俗名觀音丹次菩提のためとて、父子
は銚子カノノ、叩き始めますと、丁度唐紙一重向ふの方は三疊ばか
りの納戸になつて居ります、その内方でカノノ、叩く聲が聞えます
る、親爺は只一人暮して居るのでありますから、傳吉は不思議に思
ひまして、傳吉「オイお爺さん、誰れか来て居らつしやるのか 傳兵「よ
あの呻き聲か、ありやアお前には未だ委しく云ふのを遂ひ放心して
居たが、あの人は誠にお氣の毒なものだ、丁度こゝ三月ばかり前だ
つたが、乃公が利根川の下流で網を張つて魚を漁つて居ると、それ
へ流れ來つた土左衛門だ、網に懸つたものだから引揚げて見るとい
ふと、年の頃は二十四五、何だか寝衣の様な物を着て、細帯を締め

た儘で、何も持つて居ない、咽喉の處を手拭で括つてあつたが、齒
を咬緊つて居るから、そんなに水も飲んで居ない様子、で能く
胸の邊へ手を遣つて見ると、まだ少々動悸が搏つて居るから、それ
から乃父は船で宅へ伴れて歸つて色々介抱すると、何うやら斯うや
ら息を呼還したのだ、が何ういふものか口が利けない、只目ばかり
パチ／＼さしてアノノ、云つて居るんだが、餘り甚く咽喉を締めら
れたところから物も云へぬ様になつたのであらうと思ひ、それから
マア粥の馳なさを飲ませ、介抱して遣つてゐるうちに、口でも利ける
様になつたから何處の者かといふことが分り、また何處かより打棄つて了
でも來るであらうと思つて、宅に彼アやつて置いてあるんだが、未
だに物が云へぬ、何うも一旦乃公も助けられたから、打棄つて了
ふといふ譯にもならず、啞かと思へば啞でもない様子、一けれども取
がハツハリ開えす、物も云へず、たゞ彼様して寝てばかり居るんだ
がね、何處の人も分らないんだ 傳吉「よ、それは何うも氣の毒な

ことだ、一逼私に見せてお呉んなさい傳兵「ア、行つて見るが宜し」
間の唐紙を開けて夫れへ来て見ますと、瘦せ衰へまして、涎をマ
く垂らして、ア「云つて居ります傳吉、オヤ」お氣の毒なこ
とだ、なアもしお前さんは全体何處のお方でございます、私は此の
宅の作でありまして傳吉といふ者ですが、何がために其様な目にお
遣ひなすつたんです傳兵「ヤ、それが分つて堪るか、何
を云つたつて些とも分りやアしない、たゞ斯う手を動かすたけだ
ら傳吉はんに然うだねえ、色々形をいたしますが、何うも向ふへは
聞えせんものど見えて、一分にも耳は少しも聞えず、口で物を云
へぬとして見れば、隠しか思はれません、併し「アこんな者を何
時までも置いていたらお前さんも困るだらう傳兵「けれども死ぬるは
このこともないから、ア私も日に粥を少々炊へて喫べさすだけ
のこと、そのうちに癒るだらうと居つて居るんだが傳吉「ねえもし
お前さん字をお書きなさいますか」と取の傍に寄りまして頻りに云

ひますと、この聲が耳に通じましたか、ホ「涙に昏れまして、顔
いて居ります傳吉「ねえお父さん、少しは取が聞える様です傳兵「さう
か、乃父の云ふことは少しも通じない様に思ふんだが傳吉「字が書け
ますかと云ふと領いて居なされる、何か紙はありますか」そこで親
爺は硯箱と硯面の記刺しの白紙を取り出して持つて参りました、親
子いたして抱き起しますと、漸う蒲團の上に坐りました、墨を摺り
筆を充がひますと、涙に昏れながらも何うやら斯うやら筆を持ち、
そろ／＼夫れへ書き始めました、ヤツと其の書くのを見て居りま
すと何か考へながら漸うのことを書き了りまして、その紙を傳吉
の前へ差出ししました、見ると「私事高崎本町近江屋伊兵衛の伴伊太
郎と申す者にて、店の番頭彦七といふ者のために、利根川堤にて手
拭を以て絞殺され、その流れへ投込まれ、實に残念に候、この事お
上様へお訴へ下さる様」とある、讀了つたるとき顔色變へて傳吉は
ハツと驚いた傳吉「アお父さん大變だ、一全体このお方の行衛も知れ

す、また此の人の父さんなり御家内なりを殺したといふのは、昔
 観音の親方の仕業だと云ふので、その嫌疑が掛つて、それで今日の
 お處刑だ傳吉、エ、ッ……そりやア傳吉大變だ、そんなことならモッ
 と早く此の人が紙を貸せ字を書くと云ひたつたら、捨て置くのでは
 無かつたに傳吉未だ處刑にはおなりなさるまい、早くこれをば荒浪
 の親分様のお宅へ持つて行きやア、子分衆も澤山に居らつしやるこ
 とであるから、兎も角もお報せ申さう、何うをお父さん、この伊太
 郎さんといふのをお前さん大切にして置いて下さい、私は一走りに
 往つて来やう、何より結構な證據だ」と喜び勇んで其のまま書付を
 懐中に捻ぢ込み、跳足のまゝで戸外へ飛び出して、
 九藏町の方へ遣つて参りました、聽て荒浪の方へ来て見ると、或
 は竹槍六尺棒薪雜棒でございますの、色々な得物々々を持つて子分
 が二三十人、向願巻にて清六の表を取圍いて、近寄つて来る者があ
 れば拵り殺して遣らうといふ勢ひでございます傳吉御免なさいまし

何うぞ荒浪の親分様にお目に懸りたうございます、
 近寄りやアがつたら拵り拵すぞ、そんなことを吐して定めて奉行の
 方から手を廻して来やアがつたんだらう、モウ斯うなりやア吾々生
 命やアねえと覺悟をして居るんだ傳吉さうではございませぬ、大變
 なことが出来ました、今日お處刑に相成りまする観音の親分様の無
 實の罪を免れるどころの證據を持つて参りました、
 分の無實の罪が免れるどころの證據だ、そいつア大變だ、汝は何だ
 傳吉、エ、私は若松屋の手代の傳吉と申す者でございます、
 もあれ今辨慶の大哥に知らせる」と奥へ参つて之れを知らせました
 ところ、此方は朝比奈、小勇を首め頻りに丹次の身体を勦つて居り
 ます、蒲團の上へ寝かしまして、手足を撫でるやら摩るやら大騒
 ぎをいたして居ります、とこへ案内に伴れ飛び込んで参りました
 たる傳吉は「オ、観音の親分様でございますか、私は嘗どや貴殿に
 刀を取還して頂きました者でございます、此度はお氣の毒なことで

ございしました今辨「ヤイ」今聞きやア若親分が無實といふことの證
 據が分つたとは、何うしたんだ傳吉實は今日まで氣が付きませんで
 ございしました、これく新様々々の譯合でございしました」と搦搦
 んで話をいたし、かの伊太郎の認めました書付をば今辨慶の金太に
 觀せませすと、アツと互に顔を合せまして今辨「こいつア何より結構
 な物が手に入つた、ヤイ小勇、汝も乃公と一緒に來て呉れ小勇何う
 する今辨何うの新うのはねへや、太る奴は本町の近江屋の番頭の彦
 七といふ奴だ、自身が其様なことを仕て置きやアがつて、よくも若
 親分に其の罪を塗りやアがつた、さア行かう」といふところから、
 やがて戸外へ飛び出しました、すると「オイ大哥、何處かへ破し
 に行くのか今辨「マア」待て、汝達やア來るにやア及ばねえ、鬼
 も角も宅に張番をして居る」と二人はドン／＼氣相を變へて飛び出
 しました「何うも大哥が飛び出したのは氣懸りだ、跡より五六人隨
 いて行け」と得物を携へた奴が五六人背後から隨いて参ります、

丁度近江屋の門口まで遣つて來ますと今辨「へエお頼み申します、エ
 ・御免下さいませし、〇「ハイ何でございませ今辨番頭の彦七さんはお
 宅でございませすか」結界の内にて今日しも眞面目に叩へて帳合をし
 て居りましたる彦七は、腹のうちでは大悦び、マア／＼何でも彼の
 丹次さへ仕置に相成つて了へば、いよ／＼乃公の思惑通りに行くど
 虫も殺さぬ様な顔をいたして居ります、なか／＼の悪黨でござ
 います彦七「ハイ貴客は何方で今辨一寸お手紙を事託かつて参りまし
 たが、貴郎に直々にお手渡しを申せこのこととございませ彦七ア、
 左様か」何心なく店の頭へ出掛けて参りました奴を、利腕を掴んで
 「此の野郎」と云ひさま庭へ引摺倒しました、不意を吃つて彦七は
 其所へハツタリ倒れる奴を、頭を摺り倒して高手小手に踏縛りまし
 た彦七「お前さん方は全体何だつて此様なことを爲さいませ今辨、莖を
 吃へ、汝は能くも宅の若親分に罪を塗りやアがつた、大泥棒の彦七
 奴、到底免れぬところだ、さア愈上汝、當家の主人親子なり或は息

小 天 狗 小 次 郎

子の録を殺しやアがつた、其の次第を白状しろ彦七、滅相な、なかく私に左様な……今辨、糞でも吃へ此畜生、云はにやア斯うだ」と腕力あるところの今辨、度が、ボカリく、と擲り出しましたから、目の眩ふばかりの有様でございます、ロイ、云つて居りますと、小勇は傍に見て居たが小勇、オイ大哥、そんなに無暗に打擲つて若し此奴を殺したら玉なした今辨、ヤイ番頭、殺ら許つても仕方がある、當家の悴伊太郎さんから何も彼も聞いて来たんだ彦七、エ、何と仰しやる、あの若旦那が今辨、コリーや、汝ア手拭を以て絞殺しやアがつて、利根川の堤から投げ込んで、死んだと思つて居るか、儘に當家の伊太郎は生存て居るんだ、この通り口こそ利けねえが書付を取つて来たんだ、これでも汝は尙だ詐るか、流石の彦七も見ろ、うち顔色が真蒼に相成りました彦七、ヤア何うも大變なことが出来た、何うぞ其様に酷く打たないで下さい、ア、天命といふものは恐ろしいものだ、けれども主人を殺したのは私ぢやアない、倉賀野の驛に居ります

小 天 狗 小 次 郎

する志の重吉といふ奴が宅へ潜び込んで殺したのでございまして、今辨、なに重吉の野郎が殺した、ムウ愈よ夫れに遠るねえか彦七、そりやア全く相違ございません今辨、ムウ、兄弟何うしやう小勇、何うの斯うのはねえ、此奴を兎も角も引致つて行くが宜からう、そこで今彦七を戸外の方へ引致つて行かうとしますと、何うも事の露顯をするときどいふものは致し方ないもので、こゝに彼の倉賀野の志の重吉でございしますが、薄々様子を聞いて見ると、観音丹次が今日はか處刑に掛るといふこと、薄々様子を聞いて見ると、マア、彼奴が處刑になりやア、近江屋の身代は番頭と乃公の物だ、先程から高崎へ来て居りました、流石は何うも自己の氣に咎めるところがありませうから、仕置場へ行くといふ譯にもなりません、密かに目に立たぬ様に軒の料理屋の奥まりたる座敷へ這入つて一酌傾けて居りましたがいよ、彼れが處刑になつて了つたら、乃公は近江屋の番頭を呼び出して、彼家の身上が一万兩あらずが二万兩あらずが、そいつを半

分取らんだ、ア、旨く行つたど、午刻前でございましてが、先繰り
 肴を取寄せまして飲んで居るところが、何だか戸外がバツ／＼騒が
 しくございますから重吉、姐さん何だい下女、ア何うも親分大變で
 さいますよ重吉、大變とは何だ、下女、今日ね此の處の親分觀音の丹次さ
 んといふのがお處刑になるのでございます重吉、ムウ、さうかい、モ
 ウお處刑が済んだのか下女、それがア大變でございます、何でも仕
 置場へ荒浪の親分さんの子分衆が大勢集れ込んだとやらで、その貴
 客罪人を磔刑柱に揚つたまゝ引担いで宅へ歸つたとやら、そこで
 役人を片端から酷い目に遣はして、中にもお奉行様などは袋叩きに
 なつたさうでございます重吉、エ、ッ……これを開いたる重吉は
 顔色を變へました、こりやア大變だ、事によつたら露顯をしたので
 はなからうかと思つて見るといふでヤッとして居られませぬ重吉、オ
 イ姐さん、一寸勘定を速くして呉んな、そこで勘定を済ましまして
 こりやア事、そのこと今から近江屋へ行つて彦七に會つて、身上半分

も何も云つて居られねえ、後らか金を貰つて當地を逃げるより仕方
 がないと、この野郎止せば宜いのに、氣相變へてノコ／＼と本町近
 江屋の方へ還つて来ました、此奴が這入つて来やうとするのだ、内
 方から彦七を踏縛つて戸外へ伴れ出すのだ、丁度出會頭にヒツマリ
 會つた彦七、オ、重吉さん、いゝ所へ来て呉れた、聲を慄はせて喉鳴
 つた番頭は高手小手、流石の處の重吉も、こいつア大變とそれなり
 ドン／＼と逃げ出し、これを聞いたる今辨慶は「小勇、あの
 野郎が處の重吉だ、小勇、オッど合点だ、この野郎何處へ逃げやがる」
 とドン／＼と追駆けました、到頭背後から近寄つて參つて横面を
 カリと指倒した、不意を吃つた處の重吉、平倒つた奴を踏縛り、ボ
 カリ／＼と袋叩きでございます小勇、ヤ、そんなに打つな、ア此
 奴さへ引提まへたら大丈夫だ、それ宅へ伴れて行け、と早速重吉彦
 七を縛付にいたしたまゝ九藏町へ立歸つて參りますと、さて此方は
 清六を首め松蔵にかきましても、御城内へ願ひを上げ、皆か目附の

屋敷へ引立てられましたのでありますから、そこで到頭この二人を引伴れましてお目附の上田主水殿のお屋敷へ遣つて参りました。「此の度の近江屋伊兵衛を殺した罪人を召捕りましてございますから、早速お調べを願ふ」とある、容易ならざることでありますから、早速お目附に此のことを申し上げますと、「早々其の者を引入れよ」とあります、まづ他にガヤ／＼云つて居る子分は決して屋敷へ入れません、かの跡から随いて参りました刀屋の手代の傳吉、續いて繩付になつたる彦七、重吉、今辨慶の金太、小勇の五名、これだけを内方へ引入れまして、そこで直々に上田主水殿がお調べになつて見ると、これまでの成行を委しく申し入れました、誠に何うも容易ならざることでございまして、まづ此の者共は兎も角も留め置くといふことになりまして、素より重吉彦七の兩人は白状いたしましたのであります、から、それゆへ直と馬上にて御家老原兵庫殿の許へ参つて、一伍一仕事を申し入れましたることでございす、御家老お目附お揃ひの上

出仕をいたしまして、殿へ此の段を申し上げました、それによつて表向き殿より御汰汰になりまして、奉行柏木半左衛門は閉門仰せ付けられることに相成りました、さて城内にて色々御評定相済みました上、かねて奉行付の奥力池田又助を首めとして、何れもお召捕りの上牢内に繋ぐといふことに相成りました、そこで奉行後任は清水勘左衛門といふ人に仰せ付けられたることでございまして、いよく此の度の係役一同の者を、清水の手を以て御調べになりまして、何しろ證據人もあることで、死んだと思ふ伊太郎も存命いたして居ります、かねて自分の厄介になつて居る傳兵衛の宅で、少し斯う歩行も出来る様になりましたが、なか／＼道を歩くことは出来ないと云ふので、殊に暫くの間取道させて居りまして口も利くことが出来ませんから、そこで駕籠に載せまして参りましたところから、段々一いたし、稍や物も云へる様になつて参りましたところから、段々一伍一仕事を取調べましたることでございす、で此の度の罪人として

悲の重吉、近江屋の番頭彦七の兩名は、いよく磯の刑に處せられ
 るといふことに相定まり、近江屋の宅は其のまゝ伊太郎に下し置か
 れることに相成りまして、これは親の家を相續いたしました、観音
 丹次は身体自由に相成らぬのですが、か呼出しと相成りまして「誠
 に其の方俠氣を以て、彼れの宅の禍を除いて遣らうといたしたのが
 却て其の方の身に及ぼし、非道の責苦を受け、定めて迷惑を致した
 であらう、今日よりお構ひなし」といふ申渡しを受け、青緞鏡五貫
 文を養生料として下し置かれました、五貫やそこいらは何にもなり
 ませんが、それでも上から褒美といたして頂くといふのは結構なも
 のでございまして、なほ彼の漁師傳兵衛父子の者にも同じく五貫文
 の褒美を下し置かれるといふことに相成りました、されば前奉行半
 左衛門は切腹の上、家改易と云ふことに相成つて了ひ、また是れと
 謀を通せて是れまで様々善くないことを働いて居りましたる奥力同
 心の輩は、或は切腹または半知、役目を取上げられるといふ様な者

もありましたが、こゝに奉行がスツカリ更りまして、高崎一同の者
 も「雨降つて地固まる」といふの譬へで、大いに悦び合ひましたる
 ことでございませ、只荒浪清六は上役人に手向ひに及び、中には清
 六の子分のうちより亂暴なことをなし、縦令壓制にもせよ上役人の
 手先同心に對し、怪我人七八人、死人三人までも出来したといふの
 で、そこで荒浪清六におきましてはお籠責でございまして、且つま
 た此の役人を殺した者は上に引致して、この者を處刑に及ばんけれ
 ばならぬ次第でございませ、これはお上の法でございませ、そこで
 子分一同を呼び集めまして、兎も角も其の犯罪人を調べるといふこ
 とになりましてが、朝比奈の勘太郎及び目玉の虎五郎、元宮角力を
 取つて居りました、勇灘の重太といふ、この三人が總体此の度の罪を
 引受けるといふことに相成りまして、尤も目玉だの、重太等は彼の
 大騒動の際に刀を引抜いて役人を切つたのでございませ、朝比
 奈も其の中に遣入りまして、處刑を受けるといふことになりまして

是等の社會の習慣として、随分他人の罪でも身に引受けまして、名乗つて出る奴は親らもありましたもので、そこで苦役を勤め上げて來ると、其の身の顔の好くなるのを自慢の様に致したもので、この三名の者にかまましては遂に上の御法が立ちませんどころから死罪といふことに相成りました、漸う此の度の大騒動事件も、荒浪の方から三人の罪人、上役人の方でも死人三人といふので、向後を誠められ、よい鹽梅に清六はお罷責だけで事が相済みました様な次第でございます。

第二回

されば觀音丹次は其の後醫者に掛りまして治療を受けることになり、またが、何うやら斯うやら身体も百日ばかり経ちまして全快することになり相成りました、こゝに此の度の事件について丹次郎つくづく考へました、丹次郎も親父さん貴爺のお蔭で私も當所で少しは賣

出しました、素より私は斯様な身で生涯終りたいといふ所存ではございせん、隙て貴爺に申した通り、國を出るときから何うぞ致して穴熊金助といふ奴の所在を捜し、何處までも養父の仇を討ち、その上わが一代のうちには實父の所在も捜したいといふ、この二つの望みがあるのございますから、何うか暫くの間お暇を頂くといふ譯にはなりません、か清六成るほど、して丹次お前は何うする積りだ、丹次「先づ當所を出立して江戸表の方へ出まして、大都會繁華の土地なれば、何處に何うして潜伏して居まいたいものでもない、見付け次第に金助の野郎を討取り、なほ實父の所在も捜したいのございます、若し江戸に居なければ關八州、末は奥州の邊までも尋ねて見たいといふ所存でございます、清六「尤もだ、何時までも汝の身を是れに置いて、乃公は隠居をして汝に此の賭場を譲りやア譯は無いなだが、さういふ望みのある身を何時々までも留めて置くのも可哀相だ、マア、劍術も其所まで出來て見れば、まんざら仇に出會つ

たどき狼狽く様なことはあるまい、よつて然うするが宜い、幸ひ江戸表へ行つたら今消防のうちで神田の長兵衛といふ、これは頭を勤めて居るが、随分俠氣な者で譯の分つた人間だ、乃公とは兄弟同様にして居るから、それへ便つて行くが宜い、若し江戸に居らば、また乃公も行つたことはねえが、これは中々年は若いさうだが、忍の行田に今小天狗小次郎といふ者があつた、何でも子分は五六百人も出来たさうだ、小天狗小次郎といふ者もある、何でも子分は五六百人も彼と同じことで、彼れも武士の果で、餘はど擧げも出来さうだ、それへ一つ便つて行くが宜い、丹次、ハイ色々有難うございませう、清六、それちや、兎も角も別れの杯を仕やう、といふので、今日しも子分の別會でも云ふ様なことで、お子刻頃は、いから重立つた子分を集めて酒宴をいたして居りました、モウその夜も追々深更で参り、殊に夕景から雨が降り出しまして、何しろ秋雨といふのは陰氣なもので

ござりまして、世間もソノと静まつた亥刻過ぎの頃は、表をトソく叩く者があつた、〇誰れた、誰れた、女あの一すお開けなすつて、〇何だ、一寸お開けなさいつて名を云はつしやい、女、ハイ荒浪の親分様にお目に懸りたい者でございまして、〇オヤ、女、ハイ来たとは、政、この野郎野暮な奴だな、宅の親分は女嫌ひだと云つてお内儀さんもお持ちなさらぬが、あの年をして木の股から生れた者ぢやアなし、外に女が圍つてあるに違ふねえんだ、〇さうだらうか、政、ムウ、そこで其の女が會ひに来たんだらう……もし親分、清六、何だ、政、今表からね、女の群として親分様に一寸お目に懸りたいと云つてね、貴殿の情婦が會ひに来ましたよ、清六、馬鹿にするな此の野郎、何でも宜いや、乃公の名前を云つて来なすつたのなら、此方へ通せ、政、上げて構ひませんか、清六、ムウ上げろ、やがて入口をガツリと開けますと、被つて居りましたは竹狸の便頭笠、そいつを脱つて、

「御免なさい」と這入つて來ましたが、何しろ裾を端折りまして草鞋穿き、上には赤合羽を着て居ります。姿は、何處かの中間小者と云ふ様な風体でございます。○「オヤ女の聲だと思つたが男と早換りを仕やアがつたな」何であらうと思ひながら、跡をヒタリと閉りました。女は笠を片傍へ置いて被つた手拭を脱りますと、頭髪は疣塗巻といふので、怪しな簪一本でグムク巻にして、只今で云はうなら束髪の様なもので、櫛を横に挿して居りますが、凄いな美女です、年頃はモウ三十五六でもございませう。元は何でも妓輩の上りで見えます、着て居る合羽を脱ぎますと、その身は粗いところの縞縮緬に黒繩子の襟の掛つた袷でございまして、尤も草鞋を穿いて居ります。腰には胴輪の一刀を打込んで居る。帯をグイッと引揚げて締め居りますのは、何だか譯の分らぬ様な變的な風でございませう。政、何だいな、お前は女親分様に向うか密かに目に懸りたいのでございませうが、おせんが參つたと仰しやつて下されば分り

ます。政、何だとおせん、矢張り親分の情婦だな……ねえ親分、這入つて來たときに見ると中間か知らんと思ひましたが、おせんが來ましたよおせんが、親分御存じでせう。清六「おせん、知らないよ、そりやア何か間違ひぢやアないか。政「へエ……姐さん、まだ老破した様な年齢ぢやアないけれど、親分は何うも知らないよ云つて居な。さるよせん、オヤ然うでございませうか、大層御混雜の様子でございませうが、是非今晚お目に懸りたいことがあつて來たのでございませう。柳のおせんだと云つてお呉んなすつたら御存知でございませう。政「ムウ、色々な名があるんだな……ねえ親分、おせんも只のおせんぢやアないさうで、柳のおせんだと云つてませう。清六「エ、エ……柳のおせんだ。政「そいら親分、情婦でせう。清六「さうか、それぢやア是れへ通せ」そこで洗足の水を持つて參りますと、足を洗つて漸うのことに胴輪の一刀を携へながら、オツと其處へ通りました。清六「オ、おせんせん、これは親分、お久し振でお目に懸りました。清六「マア何うし

たおせん、見れば汝は男の姿で来たぢやないかせん、ハイ親分、折入つて貴郎にお願ひがございますので、何うかお手間は取りませんか。暫時お人拂ひを願ひます。清六「ムウ……ヤイ野郎共、汝達やア次室へ行け。〇へ、さうでせう、何うも情婦と内證のお話に私共が……清六何を言つてやがる此の野郎、次室へ起て」悉皆子分の者を起たして了ひまして清六「さアおせん、モッど此方へ來な、まだお前は知るまいが、此所に居るのは是りやア乃公の忤分にしてある觀音の丹次といふ者だから、何うか見識つて置いて貰ひたい……丹次、この女はね、乃公の兄弟分に日光街道幸手の驛の三次と云ふ者がある、その幸手の三次の女房で柳のおせんと云つて、元は江戸の深川で藝妓をして居た者だがね、何うか此の後は心安くして遣つて呉んな。丹次「オヤさうですか……」こりやア姐御、初めましてお目に懸りました、私は觀音丹次といふ向だ駆出者ですが、何うか此の後も心安く願ひますせん、何うも申し後れまして恐れ入ります、かね」

は承はつて居ります貴郎が觀音の親分でございますか、それでは此の兩親分に對して今日は折入つてお願ひがおりますが、何とお聞届け下さる譯にはなりません、清六「何うしたんだおせん、實は他でもございませぬがね、妾の良人の三次でございます、丁度今年の春でございまして、流山の藤次郎の賭場におきまして、些細の間違ひから喧嘩が出来、遂に藤次郎の子分を三人で打斬つたのでございます、ところが何分藤次郎といふ奴は二足の草鞋を穿いて居る奴でございまして、上から十手捕縄を預かつて居やうといふ、それで上の威光を借りまして、遂に三次を召捕らうとしたのでございす。三次は夫等のことを存じて居りますから、暫く信州松本の喜左衛門の許へ落ちて行かうと云つて參つたのでございす、で妾も幸手の驛の身代を取片付けまして、良人の跡を慕つて松本へ參り、それでア喜左衛門の宅に厄介になつて居りました、どころが藤次郎は夫れから夫れへと渡りを付け、松本の目明上州屋の音右衛門といふ者

に相談をいたしたものと見えまして、今度不意に其人は召捕りになつたのでございませう、いよく唐丸籠で江戸表へ差立てに相成るといふことで、妾も何うしてもモウ一度其人を娑婆へ出したと思ひまして、女ながら大胆に後になり前になり、此の様な怪しげな風体をして尾つて参つたのでございませう、が何分驛送りとは云ひながら大勢の役人が付いて居りますので、何うも其の唐丸籠を破ることも出来ません、素より何か上の御用で八州方の旦那衆が信州の方へ捕方に行つて居らつしやいませう、とて、この度捕縛した切て幸手の三召捕ることも出来ぬ、そこで上州屋が今度捕縛した切て幸手の三次なりとも護送して手柄に仕やうといふのでございまして、そこでマア十四五人といふものは役人衆が付いて居りますから、なかく三次の唐丸籠は嚴重でございまして、マア碓氷峠も何うやら斯うやら越したのでございませう、然うして昨夜は坂本の驛に泊りました、今日は多分熊谷あたりまで行くだらうと思ひました、ところが何

分途中からの降雨でございまして、時刻が後れて居りました、で、漸う今晩は新町の本陣へ唐丸籠を送りました、さうして新町の驛で泊りましたといふことを、儘に妾は見届けたのでございませう、彼の兒玉屋といふ本陣がありませう、清六「ムウ、新町にやア兒玉屋といふのがあるせん、それへ今晩は唐丸籠を泊り込んだのでございませう、何うも新町といへば貴郎のお住居地でございませうから、それへ行つてお願ひ申さうと是れまで遣つて来ました、とて、ところが當時この高崎に貴郎はお在でになるといふことを聞き、わざ／＼日を暮らして夜に至つて遣つて来たのでございませう、何うぞ致して三次を助け出して貰ひたいものでございませう、親分兄弟分の誼み、何うか何分お願ひ申したいのでございませう、清六「そりやア大變だ、けれどもおせん、何も賭場の喧嘩でお互ひに面が立つたねといふところから、藤次郎の子分を二人や三人殺したからつて、マア多分遠島ぐらゐなことでは済んだ、それをわざ／＼此方が唐丸籠破りをする、却て三次の

罪を増す様なものだ、それに新町といへば乃公が長らく住居をした
 土地だ、乃公が手出しをするといふ様なことになる、却て三次を
 助けんがために乃公の身の上にも關はる様な次第だから、マア汝も
 女のこともだ、そんな大胆なことを仕ないで、マア御年貢を納ら
 せるが宜い、兎も角も幸手へ歸つて、時機の到るを辛抱して待つて
 居る、やがて白日青天の身の上となつて三次が歸つて来るときにや
 マ、立派に乃公も行つて出迎へをして遣るから、その様な唐丸籠破
 りつてな大胆なことを仕ねるで、大抵ならば止すが宜からうせん、オ
 ヤ、ちやア親分何ですかお前さんの住地だによつて唐丸籠を破るこ
 とは出来ないと仰しやるんですか清六ア、住地だから出来ないと
 いふ譯ちやアねるが、詰り三次の爲りと思つて乃公は云つてるんだ
 せん、ちやア何うもつても助けて下さることは出来ないと云つて清六
 マア可けないなア、暫くの間清六の顔を眺めて居りましたがせん、小
 父さん、お前さんも大層早くから若老碌を仕なすつたね清六なに、

何だぞせん、何も其様に恐い顔を仕なくつても宜いちやアないか、お
 互ひに旨い物を食ひ合つて好いことを爲る間は、乃公は義兄だとか
 義弟だとか云つて居るが、兄弟分と云ふのは何にも物を食ふときは
 かりちやアないよ、畢竟する俠客同士の交際といふものは、いゝ時
 やア兎も角も、悪いときにお互ひに助け合ふのが兄弟分の誼みです
 今お前さんは斯うやつて觀音の丹次といふ立派な息子さんも出来た
 から、それでわざと新町から此の高崎へ出張所を設けて、飯やア
 立派に食へるからと云つて、一旦約束した兄弟分が其の驛を唐丸籠
 で通つて行つても、彼方に向いて知らぬ顔をして居るといふのは、
 上州邊の俠客は夫れで立つかは知らぬが、日光あたりぢやア其様な
 ことは通らないんですよ、妾も本當にお前さんばかりぢやア見損つた
 そんな人ぢやアないと思つた、夜中にわさく、乗り込んで来て詰ら
 ないことを云つたが、大きにお邪魔アしました、女でこそあれ標の
 おせんだ、モウこの上からはお前さんは頼まない、物の見事に妾が

是れから破つて見せやう、自分の住んでる驛を願がせられては濟ま
 ないもあらば、上へ訴人を仕やうと思へば仕なさい、お前の様な人
 は此の後は交際には仕ないから、さう思つてお呉れ、態を見やアがれ
 此の死去損ひの老祿老爺奴、そのまゝ一刀を持つて座を起つて行か
 んど致しまするを丹次、オイ、姐御、待ちなせん、何だ、何か用が
 あるのか、丹次、用がある、觀音丹次が用があるんだ、せん、こりやア面
 白い、親爺さんのことを悪口されて、お前妾を何うか仕やうと云ふ
 のか、丹次、マアそんなに大きな聲を出しなさんな、姐御、マア氣を
 鎮めて乃公の云ふことを篤と聞きなさい、今日斯うやつて大勢が寄
 り集まり酒宴をして居るのは、實ア乃公が今日親爺と別れの酒宴だ
 明日になりやア當所を出立して、江戸表から續いて關八州、少うし
 乃公も尋ねる者があつて廻るんだ、どこへ持つて来てお前が突然
 來なすつたものだから、荒浪の親爺さんも一時はワソと諾合へぬも
 のと見えて、お前に彼様なことを云つて怒らしたんだ、ね、親分、

花の東都へ旅土産、柳のおせんに腕を貸して、今宵の唐丸籠破りや
 ア此の丹次が一人で引受けませう、清六、ムウ丹次、素よりおせんの了
 簡を試かうがため乃公は彼の様なことを云つたんだが、乃公も荒浪
 の清六だ、一旦兄弟と約束した幸手の三次が、此の驛を通つたのを
 些ども知らなかつたのだが、おせん、乃公が加勢をしないと云は
 汝は力を落して悄然こゝ歸るかと思つたんだ、女に似合はね、汝の
 度胸、一人でも破らうといふ其の根性なら能くね、十分腕は仕込んで
 乃公が行くのも丹次が行くのも別に異りはね、十分腕は仕込んで
 あるから、これから丹次を伴うて、速かに行つて助けて遣れせん、有
 難うございます、さうも女といふものは前後の考へがないから、つ
 い彼様に云つたんでございます、何うか御勘辨を願ひます、清六、な
 にそんなことは詫びるにやア及ばね、夜が更けね、うちに早く支
 度を仕るゝと、早速兩人に身支度を致させました、丹次、それぢやア父
 さん、明日とも云はず、今宵のうちに清六、オ、汝も隠分氣を付けて行

くが宜い」かねて其の身の實父の形見、彦四郎貞宗の護身刀を錦の
 囊に納めまして、之れを確かり懐中いたし、十分身輕の扮装でござ
 いまして、路用の金も相當に用意をなし、やがて扇輪の一刀を打込
 み、脚装へも嚴重にいたしました、そのうちに早速經節だの水砂糖
 かういふ様な類をチャンと頭陀袋の様な物に入れまして清六は持出
 しました、清六「おせん、唐丸籠を破つたら暫くは山籠りだ、まさか
 の時の食料に持つて行け、随分二十日や一月やア經節を嘗啗んで居
 ても我慢は出せるからせん、有難うございます、何かから何までお世話
 に預かりまして」とおせんも非常に勇み立ち、思ひがけなくも清六
 の片胸と相成りし觀音丹次の助勢によつて、兩人十分支度が調ひま
 す、その夜のうちに新町の驛へ乗り込んで参りまして、いよ
 一、寸一息いたしまして次回に。

第三回

さて觀音丹次は圖らず出立の際に及んで、幸手の三次を助けんけれ
 ばならないといふ次第に相成つて、彼の三次の女房おせんと同道い
 たして荒浪の宅を出でましたのは、最う彼れ是れ子刻でもあらうと
 いふ頃は、尤も兩人は身輕に支度を致し、高崎を背後になして、
 殆ど二里餘もあらうといふ新町の本陣の裏手へ遣つて参りますと
 丹次「さて姉御、先づ是れまで來れば大丈夫、お前は此所に待つて居
 て、何うか四邊に氣を付けて居てお呉んなさい」と其の身は一筋の
 細引を取り出しまして、其の端に小石を括り付け、裏門の脇に内方
 から出張つて居ります松の枝に引懸けましたることに、やがて
 其の身は猿の如くツルツルと夫れへ登りまして、見るく間に高
 塀を乗り越え、首尾好く内方へ忍び込みましたることでございま
 お仙は外に在つて彼方此方の様子を探つて居ります内に、丹次は

内方より裏門の非常口を何うやら斯うやら袴を掛けて夫れへ出て参りました丹次「オイ姉御、丁度好都合だ、役人の奴等も十分疲れて居るものど見えて、皆々寝込んで居る、それに好い鹽梅に雨戸も閉まつて居ない、是れから幸手の兄貴を引き出して来るから、素破といふ時にはお前が負ふつて何處かへ逃げ延びて貰ひたい、乃公は殿をして引き取ることであるがら」と大丈夫の言葉におせんは「それでは若親分、何うか宜しく願ひます」と密におせんも内方へ這入つて参り、椽側の此方に待つて居ります、丹次は密と椽の上へ上りまして、障子に穴を明けて内方を窺いて見ると、何が借遠方から是れまで遣つて参つて此の宿に泊り込んだのでございまして、況して夜の寅刻頃は十分寝入最中でございまして、何れも役人の輩は枕を並べて高軒でございまして「して遣つたり」と丹次は密と裏所の丁度店の次に三疊の板の室がございまして、其の所へ葦を布き、一

庭の唐丸を据ゑ、其の前に寝すの番と見えて二人ばかり手先の者が居りまするが、何分夜が更けて居りますから、是れとても其の所に打倒れまして、グウ／＼と軒を登いて寝て居ります、丹次は密と内方へ這入り、彼の唐丸の前の方に、食物などを入れて遣りまする穴が開いでございまして、其穴から内方を窺き、小聲になつて、丹次「オイ三次、オイ」と聲を掛けますると、唐丸の中で寝て居た幸手の三次は不圖目を覺して三次「誰だ、何者だ」丹次は之れを制し丹次「静かにしぬえ、幸手の兄イ、乃公ア荒浪清六の子分、觀昔の丹次と云ふものだ、實のところは今晩柳のおせんのお姉御に頼まれて、親分清六に成代つてお前を助けに来たん、だが張番の奴等の寝入最中を幸ひにお前を助け出すから、其の積りで居るが宜しい」とやがて腰なる一刀を引抜きまして、彼の唐丸の戸をバリ／＼と切り始めました、幸手の三次は鴻大もない喜びにて、片臈へ寄つて居りまするうちに、漸く一方を切り破りました丹次「ア出ねえ」と夫れへ對

して引出し、羽翼綿に繩が掛つてございませぬのを僅かの内にアツ
 〇〇と切りまして、さて此の三次を引立てようと致しませぬが、
 何分三次も餘程疲れて居りますものと見え、足は立ち兼ねて
 〇〇いたしませぬ、依つて丹次は夫れを引背負ひまして、今縁側へ
 出ようと致しませぬ時に、圖らず番を致して居つた一人の手先の足
 をグイッと踏んだものですから堪りませぬ「アッ」と云つて目を覺
 した、見ると此の所様でございませぬから「汝れッ、唐丸破り」と掛
 けたる其の一聲に、エイ面倒なりと足を舉げて、其の手先の脇腹を
 甚かに蹴りましたから、其の所へ打倒れましたが、其の物音に驚い
 て目を覺した他の手先が「オヤッ唐丸破りだ、早く旦那に報せろ」
 と呼ばゝる聲に他の者共も何れも目を覺し「ソレ唐丸破りだ、曲者
 だ」と騒ぎ出しました、其の間に此方は三次を引擔いで縁側へ遣つ
 て参り丹次「オ、姉御、此處は構はず早く兄貴を伴れて去きな」とお
 せんにと手渡しを致しましたることでございませぬからせん「若親分、有

難うございませぬ、夫れでは申法なやうではございませぬが御免を蒙
 りませぬ、サア眞人お出でよ」と女ながらも甲斐々々しく、率手の三
 次を背中に緊かりと引背負ひまして、ソレ〇〇と裏口指して逃げ出
 さんどしませぬ、座敷の者は追々目を覺して「ソレ唐丸破りだ、
 取捉まへよ」と其處へハハハハと飛び出して來ました、丹次は一刀
 を振り被つて「サア來い來れ」と身構へに及び、大勢を相手に斬り
 結んで居ります、其の際におせんは裏口よりソレ〇〇と逃げ出し
 て了ひました、跡に残つた丹次は、成るべく夫婦の者を緩容落して
 遣らうと思ひませぬから、其の身は尙も屈せず大勢を相手に斬り合つ
 て居りましたが「裏手の方へ逃げたぞ、ソレ追駆ける」と飛び出さ
 うとする奴の襟を引掴んで引戻し、肩に擔いで二三間遙かの向ふ
 へ投げ出した、汝手向ひをさらすか」と打掛つて來る奴を、左手右
 手の方へ蹴飛ばし斬り飛ばして居ります、其の内三次夫婦の者
 は到頭何方へか逐電を致して了ひましたが、此の夫婦の者のお話

茲に暫らくお預りと致して置き申す。何しろ跡に残つた丹次は見
 るく、間に七八人を左手右手の方へ打倒しました。最う大丈夫違
 くへ逃げたであらうと思ひまして、其の身も遂に一方の血路を開い
 て、裏口よりドソソと逃げ出しました。最う東天が白むといふ頃
 は、此の新町の驛を離れまして、路を急いでドソソと、本庄の
 驛までといふものは、何うして逃げたか吾れながらも合點が參らぬ
 位でございませす。先づ茲まで落ち延びて參れば、豈夫捕方の奴等も
 來るまいと思ひ、見ると背後に一つの森を扣へました辻堂のやうな
 ものがありませすから、夫れへ來つてハッとい息を吐いて居りませ
 ぬ。其の堂の横手の所に、蕨屏風のやうなものを建てまして、何うや
 ら人の居る様子でございませすから、近寄つて見ると、一人の怪しげ
 なる金毘羅參りが、其の所で枯木なを築めて焚火を致して居りませ
 す。一間ばかりの青竹を三本上の方で縛つて、其の細の端を垂らし
 て、之れを火の上に跨がらせ、小さな鍋を細に縛り付けまして、何

かグツグツと物を煮て居りませす様子、丹次は之れを見て丹次、オイ
 其處に居るのは何だ。〇、ハイ、私は此の邊を徘徊しませす金毘羅
 參りでございませす。是れから飯を喫つて又此の邊を徘徊かうと思
 つてませすのでございませす。何うぞお慈悲でございませす。一文頂かし
 て下さいませ。丹次、ウ、乞食か汝は。〇、イ、エ、元々然うではないの
 でございませす。私は金毘羅へ參つて歸りがけに、到頭路用を無くし
 て了ひ、今ちやア仕方がないので、非人乞食となつて此の邊を徘徊い
 て居りませすので、丹次、ハ、ア然うか、ちやア放郷へ歸る氣はないのか
 〇、ヘ、エ、歸る氣があつたところがお前さん、金が無けりやア仕方
 がないので、暫らく此の邊を徘徊いて居りませすのでございませす。丹次、
 ム、ウ、ちやア何うだ、汝其の着て居るところの金毘羅參りの衣類
 を乃公に賣つて呉んねるか。〇、何と仰しやる、之れを賣つて呉れ……
 お前さんは妙なことを仰しやるな、此様な物を買つてお前さん何う
 なさいませすか。丹次、實ア乃公もね、少し所在があるんだ、といふのは

乃公も大の金毘羅信者で、何うか然ういふ事をして歩きたいと思ふんだ。〇餘程お前さんは物好きなお仁だねえ、けれどもお前さんに之れを賣りますと、後で着るものに困ります。丹次、夫りやア何も心配をするな、乃公の着て居る此の衣類を脱いで遣るから。〇へー、其の着物を何ですか、悉皆私にお呉んなさるか。丹次、然うよ。〇、そのア有難い、私も其の位な着物が出来たら、ア少し路用でも調へて故郷へ歸ります、然うすれば大きに足も洗へる道理です。前さんさへ構ひなければお替へ申しませう。丹次、いつア何うも有難い、おちやア汝の其の股引から白の桶神まで脱いで悉皆乃公に呉んね。〇、そこで此の金毘羅参りの身に纏うて居りまする白の腰束を悉く脱せましたが、久しい間着てゐたものと見ると汚れ垢付いて居ります。やがて丹次は己れが着て居る衣類から帯に至るまで残らず脱いで彼れに遣りました。何が着て居る袖入り袖の立派な袴、桶神を云つたところ、鳴海絞りの胸で縮緬の袖が付いて居ります、帯は博多の帯。

と来て居りますから、金毘羅参りは非常に悦んで、悉皆之れを取替へに及びました。そこで丹次は其の腰束を身に纏ひまして、縁で親父の形見と致す宗貞の一刀を懐中いたし、丹次、どうか其の金毘羅様の札も乃公に呉んねえか。〇、致し方がございませぬ、おちやア是れもお前さんに進上いたしませう。〇、呉れましたのは〇金と誌してございまして、油紙に包んだお札でございませぬ、其札を頸に懸け、手拭で繋がり頭を包んで了ひ、背の笠から金剛杖といふやうな物まで、是れは代價は上げ、〇、夫りやア是れは少ないが、茲に金子が三兩ある、羅参りは大悦びでございまして。〇、マア、斯うやつて色々頂きます。りやア、私も儉約をすれば是れで國許へ歸れます、何うも有難うございませぬ。丹次、ム、然うするが宜い。〇、是に於て丹次は、すつかりと金毘羅参りの姿に成りまして、一度は江戸表へ出ようといふので、段々と路を急いで遣つて参ります。〇、一度は江戸表へ出ようといふので、

しる乞食同様な姿でございますから、立派に威張つて立湯茶屋へ這入つて飯を喫ふといふ譯にも行かず、そこで安飯屋だとか、一膳飯屋だとかいふやうな所へ這入つては腹を満たし、何と云つて輕茂もれやうとも相手にならず、温順しく致しまして、何うやら斯うやら熊谷の土手まで遣つて参りましたが、丁度土手の中央まで來ますと、俄かの降雨でございます。「ア、何うも困つたことが出來た、其の用意はなし、ア、我れは斯るところの乞食の姿だが、此奴をして了つては迷惑だ」と思ひながら路を急ぎますと、片傍に一つの地藏堂がございますから、兎も角も是れにて少時雨宿りをせんと様の上に入り、狐格子を開けて内方へ這入り、少時足を休めて居りまするが、中々雨は歇むやうにもございせん、何分其の身は高きを飛び出して新町の働さより、一生懸命に是れまで逃げ來つたのでございますから、昨夜などは碌々寝もせず、少しも身体を休めるといふことがございせんので、十分身体は疲れて居りまするし、何

うせ今の姿では通常の旅宿へ着くといふ譯にはなりません。「エ、まゝ上、斯ういふ姿をして居るから氣兼ねねえ、何うなることか、今晩は此所で一夜を明かしてやらう」と其のまゝコッリと横になりまして、返にグウグウと鼾を發いて寢込んで了ひました、どころへ是れも雨具を持たない旅の者と見えますして、今此の辻堂のあるを幸ひに、ア、と駆けつけて來ましたは一人の武士でございます。「ア、困つたことである、大變激しく降つて來やアがつた、此様に這く降つては何うすることも出來やア仕ねえ、困つたことが出來た」と地藏堂の軒下に佇ちまして、彼方此方を打眺り、やがて椽の端に腰打掛けて、是れも少時雨宿りを致して居ります、内方では丹次は左様なことは知らず、好い鹽梅に寢込んで居ります、又武士も堂の内方に新様な金毘羅参りが寢て居ることは更に存じせん、「オヤツ、誰れか來た様子だ」と土手の方を眺りて居りますと、一人の旅武士が雨具を持たず、是れもピツピツと雨に濡れまして、杖に紐つて

トボくど選つて参りました。見ると眼病を患つて居るものと見えて、探り今其の堂の前を通り過ぎやうと致しました。先程より地蔵堂の縁の端に腰打掛けて眠り此の様子を見て居りました以前の旅武士は「オイ、其處へお越しになつたか武家、俄かの降雨で嘸かしお困りであらう、少時此處へ来て雨宿りをなすつては如何でござる」△「ヤッ、これは」千萬辱けなうございます、誠に手前も雨具の用意も持ちませず、殊に眼病に備んで居りました。路の勝手も知れず、宿ある方へ参らんと漸う是れまで参りましたが、夫れではお言葉に甘へまして、少時雨宿りをさして頂かせうと。と聲を知音に選つて参りました。△「貴方は何ですか、餘程お目が病いのですか。△「誠にハヤお話し申すも恥かしいこととございます。先月以來次第に眼病が激しくなつて参りました。最う此の夕景になりますると、少しも物の色も分りませず、鳥眼同様と相成りまして、引とでもなく、甚だ難澁を仕ることでございます。△「ハ、ア左様か

拙者は諸國を武術の修行を致して廻る山田某と申す者でござるが、失禮ながら其許は何方の御藩でござるな。△「ハ、ア、夫れでは貴方は武術の修行をなさる方とございますか、拙者は矢張此の上州界隈の者でございます。安中の城主板倉伊豫守の藩中、津田新十郎と申す者でございます。これ聞いてハッとはかりに驚いた彼の浪人者は、黄昏の頃はひどはいへ、眠り彼れの顔を眺めて居りました。が、何か胸に浮むことがあると見えて。△「それは嘸かし御不自由なことでござらう、して貴方は其のやうな鳥眼同様な眼病でありながら、唯お一人で何れへお出でなさる新十「へい、お尋ねに預かりました。戸へ出で、少し世の中に尋ねる者がありません。探して居ります。其の内に、不圖斯く眼病に取合せまして、夫れが爲に甚だ以て迷惑を仕り、到底斯く眼病では尋ね出して目的を遂げることも出来ませず、一度國許へ立歸つて、篤と養生を致した其の上のことに仕よう

と思ひまして、據なう通りくは是れまで参りましたが、ツイ旅宿
 を取損ひまして、行けどもく旅宿に當らず、其の内に雨が降つて
 参りました、誠に困りますやうな次第でございます。〇ハ、ア左
 様か、夫れは何うもお困りでござらう」と云ひながら彼の武士は左
 手右手の方を少時の間見廻して居りましたが、何思ひけん腰なる一
 刀の鞘を拂つて、眼病に惱んで居るところの津田といへる者の肩口
 より乳の下へ掛けまして、「ヤッ」と一聲諸共に斬り下げました、新
 十郎は「アッ」と叫んで其の處へ打倒れました。斬り下げてしま
 新十「ヤッ、ナナ何奴なれば、新くの通り眼病に惱んで居る者を、暗
 し撃ちどは卑怯であらう、ナナ名を名乗れ」と云ひながら、自分も
 腰なる一刀の鞘を拂つて、夫れへヒョリと付けました。これは付けま
 したものの、身体は起つことが能ひませんので苦しんで居ります
 ど、〇ハ、ハ、ハ、ヤイ津田、イヤ、新十郎、可哀さうに汝は奴盲目に
 なつたな、ム、ム、ウ、汝のやうな奴を叩き斬るのは刀の汚れであるけ

れども、何うも存命して置くといふ譯にはならないから送付けたん
 だ、武術の修行者山田某と云つたは偽言、汝ア乃公を見忘れて居る
 か、縦し知つて居つても、奴盲目で中々見えさうなことはあるまい
 今を去ることに三ヶ年以前、汝の親父の津田新左衛門に、些いなこと
 で満座の中にて耻辱を受け、其の恨みを晴さんと、遂に國許に於て
 彼れを撃つて立退いた水谷大膳様だ、汝ア忘れたか新十「ナナ何とい
 ふ、さては尋ねる汝は水谷か大膳オ、如何にも大膳だ、汝の親父
 を打斬つて板倉の家の中を浪人をして以來、諸國を武藝の稽古に廻つ
 て居たが、當時では忍の行田に於て、人に知られた大親分、小天狗
 小次郎の一分と謂はれて、賭場を預かり、強請者押へをするとい
 ふのが身共の仕事、今日少し用向きあつて此の邊へ出掛けて参つ
 たが、俄かの降雨で此の處で雨宿りをして居るところへ、廻り廻つ
 て汝が此處へ来たといふのも、能くく汝の運の盡きた、三年前に
 は汝の親父を此の刀で以て斬り殺し、又今日も汝を殺すといふのは

能く、拙者の刀は汝達父子とは離れぬ因縁があると思はる、断念を付けて観念しろ」と云ひながら、傍へ進み寄つて參つて、又も斬り付けんと致しました、此方は新十郎、大地にドッカと平倒り、見えぬながら一刀を振廻しまして新十郎、殘念である、何の因果で此の鳥眼、眼力さへ明かであるならば、豈夫斯くの如く暗々と襲たれやうや、御父上といひ此方までも、斯く卑怯にも暗撃に致すとは、云はうや、やな悪人奴が、卒で此の上は一太刀なりとも恨みて呉れん」と面上望んで斬り込んで來る奴を大膽「エ、何をさらす」と揃ひ退け、忽ち片腕を其の處へ斬つて落しました「ホイ」とばかりに悲鳴を擧げて臨終の際の新十郎の苦しみ、格子戸の内になつて、十分勞れ切つて居りますから、前後も知らず好い心持で躡込んで居りました、素より其の身は兇狀持でございますから、若しや追手の役人が此の處へ追駈けて來たのではあるまいかと、忽ち起き上つて狐格子

子の隙合から外を窺ひて見ると、最うメツアリと日は暮れて、破かりと人顔は分りませんが、何うやら其の處で人を殺して居る様子、ヒイ／＼と苦しみながら新十郎殺さば殺せ、汝、魂魄此の土に止まつて、汝が吭になりと喰ひ付かいで措くべきや大膽「ハ、ハ、何を詰らぬことを吐す、ヤイ汝ア化けて出ようど吐かすのか、ム、ウ、奴目、の分際と致して、乃公を仇と付け狙ふといふのは片腹痛い、最う斯うして了へば何うすることも出来まい、卒さ息の根を止めて呉れるから、覺悟に及べよ」と將に一刀を以て吭に押當がはんとします、殘念なり」と此方は倒れながらも新十郎の爲に斯く暗々と反撃になるとは、此の様に身を見て居りましたが「さては此の者共は仇同士だな、仇の爲に反撃になるとは不憫の至り、卒で助太刀を致して遣らう」と根が義侠心に富んで居る丹次ですから、黙つて見ては居られませぬ密と狐格子を開けて外へ出でました、此方は左様なことには知らず、

今一刀を取直して絶息を刺さうと致して居ります丹次曲者待てと
 と聲を掛けましたから、ハツと驚いて水谷は背後を回首つた、どこ
 ろへ椽側から飛び下りて参りました、さては地蔵堂の内に新様な奴
 が居つたことであつたかど、物をも云はず頭上から斬り下して参り
 ました、大抵の者なら兩断になるところでございませうが、金毘羅
 参りはハツと体を躲して、「何を爲す」と金剛杖を以て彼の腰の邊
 を甚かに打ちましたのでございませう、打たれて彼の曲者は「ハッ
 ヲと踏眼いた」「オヤッ、甚いことを仕やアがつた」と無二無三に斬
 り込んで来るやつを、彼方此方に体を躲し、再び彼の頭をば甚か
 に打撃つたのでございませう、曲者は「アッ」と叫んで「ハッ
 ヲと踏眼いたが、此は敵はぬと思ひましたか、血刀を掲げ、其の儘
 ドン／＼と逃げ出しました」「汝を逃がしてならうか、待て」と云
 ひながら、跡を追掛けました、何分曲者は雲を霞と逃げ出しまし
 て遠くに取逃がして了ひましたのでございませうから、嫌なく丹次は後へ引

還して参りました、新十郎の側へ来て見ると、最う虫の息でござい
 ます、今がて様々に介抱を致しながら丹次如何にお武士、飛んでも
 ない目にお遭ひなすつた、其許は全体何方の御藩で、名は何と仰し
 やる、卑怯未練にも曲者は到頭逃げ失せて参つたことでありませ
 るぞ、此方は蟲の息ながらも新十郎眞に以ちまして、サ残念の至り
 でございませう、拙者は上州安中の城主板倉の家中、津田新十郎と申
 す者、吾が父新左衛門といへる者が三ヶ年以前に、同家中水谷大勝
 なる者の爲め撃たれまして、其の仇を尋ねる其の内に、今回圖らず
 も斯る眼病に取合せ、遂に鳥眼同様に相成りました、依つて一度本
 國へ立歸つて養生を致したる上、全快いたさば再び仇を尋ね當てん
 ど心得、國許へ引取る途中でございませうが、現在仇を側に置きなが
 ら、新しく暗々と反撃に相成りました、貴方は全体何方の何と仰しや
 るか、方は存じませんが、何うか水谷大勝といへる奴は、當時忍の
 行田にて、刺客の一人とかに小天狗小次郎とかいへる者があります

るさうで、其の者の許に子分となつて居るといふことを、今彼れ
 の曲者に一刀なりとも恨み下さいまして、私の無念をお晴し下
 置かれませう、偏にお願ひ申し上げます。といふ内にも、
 次第々々に當人は弱つて参りまして、今は舌も廻らぬやうになり、
 遂に敢なく息は絶え果てましてございます、先程より熱々聞いて居
 りました丹次は「ア、眞にハヤ氣の毒なことを致した、如何に津田
 氏がやら、如何にも其許の顔みの次第は承知を致した、屹度此の丹
 次が吾が身に引受けて本懐を達してお進げ申す、豫て荒浪の親公よ
 り、小天狗小次郎といへる俠客は、天晴なる者であるから、事
 つたら訪ねて行けよと云はれて居ることであるが、是りやア都合に
 依れば小天狗を向ふに廻さんければならぬやうなことになる、だ
 が何條何程のことやあらん、卒で此の上からは忍の行田へ乗り込
 んで、此の津田とやらいへる仁の恨みと晴して呉れん」と決心に及
 び

第 四 回

まして、そこで新十郎の死骸は、此の地藏堂の後方に穴を掘つて埋
 めまして、其の夜は先づ此處に一夜を明して、翌日大膽にも此處を
 出立致し、観音の丹次は忍の行田へ乗り込んで参つて、愈々小天狗
 小次郎と初めて、面會に及ぶといふ一段、一寸一息御免を蒙りまし
 て次回に伺ひます。

されば観音丹次は念ひがけなき場所に出逢ひまして、遂に津田新十
 郎の頼みを聞き届け、其の身も仇を尋ねる身でありながら、大膽に
 も當時水谷大膽の住居をする小天狗小次郎の許へ参り、津田の恨み
 を晴して遣らんと、翌日夜の明けを相待つて、忍の行田を指して
 路を急ぎました、漸うのことに其の翌日の午刻過ぎの頃はひに忍の
 行田の市中へ這入つて参りました、當所は何しろ十萬石の御城下で
 ございまして、城主は松平下總守様、中々市中も賑やかなことで

さいます、其の市中の本町といへる所に立派な家を構へまして、有
 名なる小天狗小次郎といへる者は、元は水戸家の士族でございまして、
 の小天狗二本手挟んだ者であります、幼少の頃はひより熱心に剣道に
 立派に二本手挟んだ者であります、幼少の頃はひより熱心に剣道に
 心を寄せまして、中條流の達人でございまして、然るに其の身が二十
 三歳の砌り、同じ家中の同役の者共が、餘り彼れの腕前の出来す
 ると、ころから、羨嫉妬の心を起し、遂に窃かに小次郎を撃たんと
 致しましてが、却つて小次郎の爲に五人ながら反對に命を捨てまし
 たることもございませぬ、素より他人を殺して自分助からうといふ
 やうな了簡はございませぬ、此の由をお上へ名乗つて出でまし
 たが、何分小次郎には少しも悪しき所はございませぬ、皆々忍び
 束で、彼れを撃たんと致して却つて小次郎の爲に撃たれたるに相違な
 く、依つて小次郎には罪はないといふことに相成りました、といふ
 て、小次郎を此の儘に捨て置くといふ譯にもなりませんから、遂に

永のお暇といふことに相成りまして、水戸の領分から追放になりま
 したのには、即ち此の仁の二十三歳の折でございませぬ、然るに至つて
 義侠心に富んだる者でございまして、浪人を致しましたる後は、諸
 國を武術の修行を致して廻つて居りましたが、遂に此の忍の行田に
 來つて、當所に足を止めるといふことに相成りました、遂に此の忍の行田に
 れは何か考へるところがあつたか、武家を捨て、町人と相成りまし
 た、何分腕前が出来るどころから、何處の喧嘩にも、彼所の争論に
 も口を利いて遣りませぬ、遂には人々が小次郎の親分々々と呼
 ぶやうになり、今では行田に立派な宅を構へまして、自ら小天狗の
 小次郎と名乗り、百人以上の子分も出来、當時に賭場の二三ヶ所も
 有らまして、高崎の荒浪清六など、是れまで度々付合を致して、
 實に飛ぶ鳥落とすところの勢ひでございませぬ、ところが今日しも小次
 郎は宅に在つて、是れから支度を致して、何處かへ赴かん
 と致して居ります、是れから支度を致して、何處かへ赴かん
 折しも、怪しげなる一人の金尾羅參り風体の者

が戸外に佇つて、肥と内方の様子眺めて居りますから、小次郎の子分魁の六之助、大目の敏次、獄門の太助、俵藤太の金太といへる二つ名のある輩が七八人といふもの、今店頭で車座になつて世間話を致して居りましたが、金太といへる奴は此奴を見まして金太「イヤ、イヤ、何だ汝は、薄汚ない姿をしやアがつて、内方を覗き込んで居やアがる、出ないよ、去け、去け、去け、去け、私ア別に物貰ひに来たんぢやアございませんで、金太「何だ、合力を受けに来たんぢやアねえ、これなら何しに来たんだ、乞食、實ア御當家の親分の、小天狗小次郎様とか仰しやるお方にお目に懸りたいことがあつて参りましたので金太「何だ、宅の親分様は、汝のやうな金屋羅参りには用事はねえは、愚圖々々云はないで早く去け、乞食、何だ、乃公に用事がねえ、汝の方に用事は無くつても、乃公の方に用事があるから出て来たんだ、お前

は茲の宅の子分ぢやアねえか、假令姿は何のやうな姿をして来ても親分にお目に懸りたいと云つて来たら、オ、然うかと云つて取次いで呉れたら可いではないか、金太「何だ、巫山戯たことを云やアがる、奴乞食の分際と致して、生意氣なことを云やアがる、捨置かんぞ、乞食「ハ、ハ、中々御大層な勢ひだね、何も乃公は汝達に此處へ喧嘩挑ひに来たんだ、小次郎「さん、逢ひたいと云つて来たんだから親分に取り次いで呉れたら何うだい、金太「何うしよう兄弟、此様な乞食が親分を友達見たやうに云やアがつて、取り次いで呉れいと云つて居るが六之「ハ、ハ、大方分つてらア、讃岐の金屋羅様へのお参りを致しました、どころが路用の金子に盡きて斯うしてお貰ひをして居ります、當所の親分様は御有名なお方と聞いて御無心に参りましたッてなことで、左様な奴は面倒だ、捨て置け、金太「だから乃公「然う云つて、夫れはど汝は合力が願ひたければ、サツ、茲

に錢が三文ある、之れを遣るから持つて歸れ」と云ひながら、煙草盆の引出から端下錢を三文ばかり取出して、乞食の前へ投つてやりました、乞食は夫れを見ると非常に催怒しましたか、其の儘内方へメイッど這入つて参りました六之、ヤイ、何しに這入つて來やアがつた乞食、汝達ア小天狗の子分ども云はれながら、随分目の見えねる奴だ、先刻から乃公ア合力を受けに來たんぢやアねると云つてるんぢやないか、何だつて此様な失禮なことをする、姿は金毘羅参りの姿をして居ても、汝達に輕蔑げられるやうな人間ぢやアねるのだ、此の徳利野郎奴が六之、何だ、徳利野郎だ、巫山戯たことを云やアがる、此の奴乞食めが」と行きなり一人の子分は、煙管を引搦んで上り口へ這つて参つて、庭に佇つて居る金毘羅参りの頭をホカリーと打たんとした、ハッど体を躲して、グイッど其の利腕を引搦んだから堪りません六之、オ、痛、何う仕やアがる」と振り放さんとする奴を「ヤッ」と引きましたから堪りません、忽ら上口から庭へ轉

がり落ちました、之れを見ると五六人の輩は「此の奴乞食、何をさらすか」と握拳を固めまして、打て掛りをする奴を「何を仕やアがる」と右左に体を躲して、或は蹴飛ばし投げ飛ばし、忽ちの内に其の所へ取つて押へるといふ有様でございまして、子分の聲はワイ／＼と願ぎ始めました、然るに奥に居りました小次郎は、何事やらんど一刀を携へ店へ出掛けて参つて、見ると此の有様でございまして、から小次、ヤイ野郎、其處退けッ……ヤイ、金毘羅参り、何だつて汝は乃公の子分を打毆りやアがつた、薄汚ない身姿を仕ながら、此の土地に於て小天狗の子分ども云はれる者を能くも汝ア打つたな」とハッどばかり睨め付けました、金毘羅参りは莞爾と笑ひ乞食「ハ、ア、お前が小天狗小次郎といふ仁か、如何にも乃公アお前の子分を打つた、實アお前に用があつて來たんだ、夫れに乞食だの物貰ひだ何うした小次、何を生意氣なことを仕やアがつたものだから、手向ひをしたが

様に云やアがる、其の分では捨ておかんぞ 乞食、ふ、捨て置かんと
 いふのなら何うする 小次郎何うも斯うもねえ、汝の命は貰つた」と云
 ふより早く一刀を引抜いて、頭下から斬り下して参りました、此方
 はハッとして体を躲して 乞食、巫山戯た真似をするな、勝負が仕たくば
 如何にも勝負をしてやる、ハッ 戸外へ出る」と其のまゝ金比羅参り
 は戸外へ飛び出しました「心得たり」と小次郎も忽ち戸外へ飛び出
 しました、其の内に金比羅参りは手に持つたる彼の金剛杖をヒョリ
 と中段に構へますと、小次郎も「ハッ」と一刀を振りまして、
 「エッ、ハッ」と互に少時の間は双方呼吸を測つて居りました、
 小次郎は腕と金比羅参りが中段に構へて居ます其の腕前を見て非
 常に驚きました「ム、ウ、此の野郎、中々確かな腕前だ」と思ひまし
 たか 小次郎「ヤ、待てッ」と聲を掛けて一刀を引きますから 乞食何だ
 と、待て……ム、ウ、乃公の腕前に恐れ入るといふことは更に無いが、中々何うも汝
 云へ、汝の腕前に恐れ入るといふことは更に無いが、中々何うも汝

は、其の姿に似何はぬ確かな腕前だ、實ア感心をしたんだ、汝は其
 様な姿をして居るが、必ず本名のあるものと思ふが、全体此の小次
 郎に何の用があつて来たんだ、ハア宜い、此方へ還入つて呉んな、
 乞食「ハッ、然う親分、お前さんに云はれて見りやア、何も手向ひを
 するんぢやアねえのだ、實アお前さんに用事があつて出て参りました
 た、どころが子分の衆が餘り失禮なことを云つたものだから、此方
 も憤怒して手向ひをしたやうか譯です、小次郎「夫りやア何うも飛んだ間
 違ひであつた、ハア何は兎もあれ此方へ通つて呉んな」とそこは、
 「當つて碎ける」といふ誓の通りで、況して俠客同士のことでは、
 いまさらから、やがて小次郎は金比羅参りを伴れて内分へ還入りまし
 て、早速子分の者に吩咐、當人の足を洗はせ、奥へ通すといふこ
 とに相成りまして、此方は少しの怖気もなく、漸う一室へ通りまし
 たることでございまして、乞食「さてお前様は當家の御主人小次郎
 郎と仰しやるか、初めてお目に懸ります、私は上州高崎に住居を致

した荒浪清六の身内の者で、観音の丹次といふ客な野郎でございませうが、何うかお見知り置かれませうやう小次、ウ、ウ、夫れぢやア何か、お前はア、噂の高い観音の丹次と云ふ仁か、素より荒浪と乃公とは至つて心安くしたものだ、して又観音の丹次とも云はれる者が、何だつて其様な姿をして來なすつたんだ、丹次、實ア少しお前さんの方に尋ねたいものがあつて來たんですが、當時お前さんのお宅に、元は安中板倉家の藩中であつたといふ、水谷大膳といふ子分が、ありませうか、其の者に就て少し折入つてお頼みがあつて來たんです、が小次、ウ、ウ、如何にも大膳といふ者は板倉家の浪人者で、當時は當家に於て食客の身の上となつて、強請者押へを勤めて居るが、其の者に就て、何の用があつて來なすつた丹次、夫れやア他でもね、熊谷の土手の地藏堂に於て、同じ板倉の家、中の津田新十郎といふ仁が、其の水谷大膳の爲に父を撃たれ、何うかして仇討をしたいと、

三年此の方諸々方々を尋ね廻つて居る其のうちに、ツイ眼病を患つて、夫れが段々ど激しくなつて、鳥眼同様となつて了つたので、到底斯ういふ病氣では仇を討つことは出來ない、一先づ故郷へ引取つて養生の上、仇討を致さうと、丁度熊谷の土手で遣つて參つた、然るに其の水谷大膳といへる奴は其の地藏堂に雨宿りをして居て、圖らず津田に出逢つたるを幸ひに、ツイ眼界の見えない者を不憫にも、腕り殺しに致して反撃、實に残酷な取計ひに及んだ、乃公は其の時、地藏堂の内方で一寝入遣らかして居て、ヒイ、と掲げた悲鳴に目を覺し、見ると何うやら人殺しの様子、早速飛び出して其の曲者を取捌まへようとしたが、彼れは卑怯にも逃げ去つて了つた、そこで段々ど手負を介抱して遣つたが、何分肩口から乳の下へかけての一刀、刺へ刀を持つたる利腕を斬り落され、今は殆ど虫の息、其の苦しき中から前の次第を物語り、何うか仇を討つて呉れいと退引ならぬ其の顔み、乃公も観音の丹次、豈夫後へ引く譯にもならぬ

そこで其の水谷は何處に居るかど聞いて見りやア、當時お前の宅に食客となつて居るといふことを、水谷の口から申したものであつたから、それでお前に頼まうと思つて来たやうな譯合だが、何うにかして、お前の宅に居るものなら、乃公に討たして貰ひたいが何うであらう。此の儀を承はりますると小天狗は大きに驚きまして、小次郎程、お前も随分義侠心に富んで居る仁だ、如何にも水谷は乃公の宅に在るから、然ういふことなれば、鬼も角も今此の所へ大膽を呼び出して、蛇度其の邊のところを取調べ、愈々お前の云ふ通りを違ひなければ、尋常に勝負をさせませう。丹次、夫りや何うも有難い乃公も津田といふ仁に頼まれて見りやア、此の儘に捨て置くといふ譯にもならぬから、夫れぢやア一度其の大膽を此所へ呼び出して貰ひたい。と兩人の者が頻りに談話を致して居りますやつを、水谷大膽は、先刻金比羅参りの乞食が、子供を相手に括頭で願いで居るといふことを聞きまして、大抵なれば飛し出して行かうと思ひま

したが、此度の熊谷の土手の一件に就きまして、己れが津田を反駁に遣はせた所へ、夜中ながら怪しげな金比羅参りが飛び出して来て、撃つて掛つたが、中々腕前の確かな者であつたゆゑ、到底敵はぬと思つて逃げ延びたもの、斯様な者が地蔵堂に在ようとは露知らず乃公は當時忍びの行田の小天狗の許に居るといふことを、新十郎に向つて大言を拂つたから、若しや彼奴が跡を慕うて来はしまいかど、夫れどなく心配をして居るところでございますから、「南無三大變、事に依つたら此間の金比羅参りは一室へ通りましたか」と密と様子を見居ると、遂に金比羅参りは一室へ通りましたか」と思ひ、次室に來つて兩人の談話を伺きまして見ると、果せるかな水谷大膽といふ噂が出て居ります。此奴ア大變、先達とて、果せるか彼奴が横合から妨害をしやアがつたばかりなれど、其の腕前の確かなところから、此は敵はと逃げ出したので、然るに今其の者に宅の親分までが味方をする様子、左様なことになつては到底敵

はぬ」と根が卑怯な奴でございませうから、周章狼狽して裏口へ飛び出た。一生懸命になつて「ノノ」と逃げ出し、小次郎、六は居ます、此方は小天狗、左様なことは存じませんから小次郎、六は居ないか、魁の六之助は「へエ親分、何を御用で小次郎、水谷の先生を一寸此處へ呼んで呉れ六之助、へエ畏まりました……オイ、水谷の先生、先生は何うした……先刻此處に在りやアないか、オイ先生」と捜して居ります、裏口から這入つて參つた獄門の太助は「何だ兄、イ六之助、親分の吩咐で、水谷の先生を捜して居るんだ太助、ウ、今方先生は、裏の切戸を開けて這々の体で逃げて去つて了つたか」とそこ小天狗や丹次、傷へ來つて此の事を申し入れて、了つたか、と二人は大きに残念に思ひました小次郎、さては前と談話をして居ると、野郎卑怯にも風を吃つて逃げた

ることであるか、併し觀音の兄弟、マア心配はしなさんな、お前も一旦願まれて、夫れが爲に仇を討つて還らうといふので態々來なすつたし、乃公も然ういふ悪人を聞いて見りやア捨て置けぬ、遠からず捜し出して屹度お前に仇を討たして還らう、併し野郎も一生懸命になつて逃げ出したることであるから、何うせ此の邊に間諜突いては居まい、マア當分は乃公の宅に、何なら兄弟、足を留めて呉んねるか丹次、ヤツ小天狗の兄、有難い、その言葉に甘へるやうではあります、夫れでは少時の間厄介に相成りませう、是に於て觀音の丹次は遂に當家に食客の身の上と相成りまして、足を留めるといふことに相成りましたが、後には小天狗も、彼れの腕前の優れたるところといふ、其の義侠心に富んで居ることを益々感心を致しました、遂には兄弟分の盃を取交すといふことに相成りました、尤も小次郎の方が丹次より上長者でございませうから、小天狗は兄弟丹次の方は弟といふことになつて、互に冷酒の中へ血を絞り込んで

双方が之れを娶り合ひ、是れからは苦業を共に仕ようといふので、
 兄弟分の契約を結びましたることでございます、然うなるといふと
 子分の奴等も決して丹次を馬鹿には致しません、當家の強請者押へ
 の水谷大膳の跡役に、観音の丹次といふ立派な男が出来たど、一同
 は大きに悦んで居ります、終ひには若親分々々々と云つて尊敬を
 するやうになりました、其の内に丹次の名前も追々々々へ聞える
 といふことになりました、ところが其の年も暮れまして、丁度其の
 翌年三月の中旬と相成りましたが、茲に此の忍の行田から一寸半里
 ばかり離れたるところに、徳大寺といふ寺がありまして、丁度此の
 節は其の徳大寺の境内にありまします、櫻遊の真盛りでございまして、
 尤も此の盛りの時分になりまします、數多の茶店なども出来まして
 忍の行田の町人共の、是れへ對して觀花に出掛けます者も澤山と
 さいます、今日は至つて天氣が宜しうございますから小次郎何うだい
 丹次、幸ひ賭場も休みだし、此の節は徳大寺の境内の櫻花が真盛り

ださうだが、一つ野郎共を伴れて出掛けやうか丹次「夫りやア兄貴、
 宜うございますね、酒肴辨當などの用意を十分いたしまして、さて十四
 日、運で宅を出で徳大寺へ遣つて來ました、境内の内には彼方此
 方に華篋を張つて茶店が出来てございまして、或は木の芽田樂、湯
 豆腐などいふ看板を掲げまして、商つて居ります、其れへ這入
 つて一杯飲んで居る客もあれば、又は花の下に毛氈などを敷き詰り
 幕などを張り廻して、中で飲つて居る者もありまします、丁度此の徳
 大寺の横手の方の、少し斯う高地に當つて、月下亭といふ料理屋が
 ございまして、此處の座敷は随分見晴しの好いところとございます
 小天狗も度々是れへ來る度毎には參つて居りますから、仲居や皆の
 者は顔を知つて居りまして、今しも小天狗を見付けますと、女
 や、行田の親分ではございせんか、何うぞお通りなすつて、奥の
 座敷が空いて居りますよ小次郎見晴しの好いところが空いて居るか、

女「ハイ、何うぞお通りなすつて小次、ちやア通して貰はう」とやが
 てのことに見晴し好き奥の座敷へ通りまして、是に於て小天狗小次
 郎、観音の丹次を首め子分一同の者が酒宴を始めました小次「何うだ
 い丹次、お前は此處へ来るのは初めてだらう、随分人が出盛つて居
 るではないか丹次「然うです、何うも新様な田舎に似合はない大變な
 賑合ひですなア」傍で六之助は一杯飲つて居りましたたが六之「何うで
 す若親分、斯ういふやうな田舎でも眞更侮つたものぢやアあります
 まい、随分女の好いのも居ますよ、何うです向ふから此方へ来る女
 は、中々婀娜い姿でせう、彼りやア城下の何處そこの娘です、あの
 お細君さんは中々立派なものではありませんか」と前へ来る者毎に
 品評を致して居ります、其のうちには齡の頃は十七八でもあらうと
 いふ、最も上品な一人の娘、日傘を翳して、一人の下女を供に伴れ
 ぬりに花の下を道造して、花を眺めて居りますのを、六之助は
 ・イッとのれに目を着けまして六之「ヤツ、何うです若親分、彼處を

見なさい、彼の餅茶店の前の櫻の下へ小町娘が来て居ります、何と
 行田に於て一といつて二と下らぬ小町娘と云はれるだけあつて、随
 分立派なものではありませんか丹次「何をヤ、云つて居やアがる
 小町娘だ六之「然うです丹次「へ、へ、人を馬鹿にするな、彼様な者ア
 乃公「是れまで度々見慣けて居るんだ六之「へ、へ、若親分、大層威
 張つてるねえ、彼りやア當所で一二を争ふ加島屋といふ金満家の一
 人娘で、お花さんといふんですが、流石小町娘と評判をするだけあ
 つて、何と美しい綴綴ではございせんか、夫れに彼様な者は幾らも
 見慣けて居るなんて、随分若親分も負惜しみの強いことを仰しやる
 ねえ丹次「何が負惜しみが強い、乃公は大体女などには關係のない方
 だから、別段美しいとも思やア仕ねる六之「へ、へ、ぢやア貴郎は女は
 嫌ひですか丹次「嫌ひだ、大嫌ひだ乃公「六之「稀代なことを云つてる
 ねえ、人間と生れて女の嫌ひな奴があるものか、畢竟する此の土地
 の勝手を知らねえから、お前さんなどは左様なことを云つてるが、

彼の女か、さて丹次の親分さんなんて、莞爾笑つたものなら、お前
 さんだつて堪つたものぢやアあるまい丹次馬鹿なことを云ふな、少
 しも左様なことには頓着しねえ」と話しながら一杯飲つて居ります
 る、さて此方は加島屋の主人藤右衛門は、今日は娘のお花を首めど
 致し、番頭下女お花を伴れまして、此の徳大寺へ花見に参りました
 が、今しも娘のお花は下女を伴れて頻りに花の下を彼方此方と追
 うて居りますのでございませう、どこへ年の頃二十四五の者を首
 と致して、何れも若きところの三人の武士、紺襦袢に梵天帯、眞鍮
 金具の木刀を一本を佩り込んだ中間兩人を伴れまして、一既に何處か
 で一杯傾けて、餘程飲べ酔つて居るものと見えまして、一踏々跟々と
 致しながら遺つて参りました、〇オイ小林、何うもハヤこの徳大寺
 の櫻花は又別だな小林ア、左様々々、ア何處かで陣取を仕ようか
 が、〇それが宜からう」といふので、彼方此方を打眺めて居りました
 が、丁度今加島屋藤右衛門が掛茶屋へ這入つて、辨當を開いて一杯

飲つて居ります、其の直ぐ次の所へドレドレと這入つて参りまし
 て小林「コリヤ、酒を呉れよ女何うそマア且那樣お上り遊ばして」
 小林「齋藤、服部といふ三名の輩は、市助、汝達も此方へ這入つて
 来るが宜い」といふやがて三人は上へ上つて車座になり、兩人の間は
 其前の所に腰打掛けをする女「お肴は何に致しませう服部然うだ
 なア、相變らず木の芽田樂か、何か他に美しい物はないか女「何も他
 に變つた物はございませんが、厚焼でも致しませうか服部「ぢやア其
 の厚焼を五人前持つて来い、酒は成るだけ熱くして持つて来て呉れ
 やがて夫れへ酒肴を運んで参りました、そこで五人の者は一杯飲み
 始めました、此方の加島屋の四人の者も一杯飲んで居りましたが、
 其の境のところは、何がさて新様な掛茶屋のことでございませうから
 はんの簾が半分はと吊り垂けてあるばかりでございませう、其のうち
 に加島屋主従の者も追々酒が廻つて参りましたが、酒といふもの
 は飲めば酔ふ、酔へば氣が狂ふものでございまして、下女は徐々悪

戲を始め出した、紙丸などを拵へまして、之れを番頭の頭へ投
 り付ける、番頭も亦其いつを下女に投げ返すといふので、互ひに投
 り合を致して居りました、ところが其のうちに、ヒョイツと投りま
 した紙丸が、何ういふ途端か簾を越して、今隣りの席で頻りにグイ
 くど飲んで居りました服部といふ男の頭へボカリと中りました
 服部「オヤッ、何をしやアがる小林何うした服部何うのはねえ
 拙者の頭へ斯様な紙丸を中てやアがつた小林「イヨ一こりやア面白
 何うも服部、貴公の面は恐ろしい大きな面だから、二王様と間違へ
 られたんだな服部「馬鹿を云へ、眞個に人を馬鹿にしやアがつて、今
 隣りの素町人が投り合つて在やアかつたから、乾度其奴等の所業に
 違ひない」と服部は起ち上つて、やがてのことに彼の取合に吊ら垂
 げてある籠を引摺んで、アスリと引取りまして服部「ヤ、其處に拵
 へて居る素町人、汝ア全体拙者に何の遺恨があつて斯様なことを致
 した、拙者の面上へ對して紙丸を投げ付けるなと、は甚だ以て不埒

な奴だ、勘辨相成らぬ、夫れへ出る」と一刀の柄に手を掛けました
 加島屋の主人は非常に驚きまして、忽ち其の處に兩手を支へ藤右「こ
 れは旦那様、飛んでもない粗相を致しました、實は奉公人が悪戯を
 致して居りましたので、別段貴方にてやうとして遣つたものではな
 さいませんが、ツイ外れて中りましたやうなことでございますから
 何うぞ御容赦のほどを願ひまする服部「成らぬ、勘辨成らぬ、身共に
 於ては松平下總守の家中、馬廻役の一人で服部小八郎と申す者だ、
 何と心得て斯様なことを致した、夫れへ座れ、此の所に於て兩斷に
 致して呉れる」すると傍に居る小林、齋藤等も「然うだ、服部、
 確かり掛合へ、勘辨するな、武士たる者の面上へ對して投打を致す
 なと、は甚だ以て不埒な奴だ、速かに斬つて了ひ玉へ、吾等も共々
 に加勢を致してやる」と同じく刀の柄に手を掛けて其の處へ乗り込
 んで参りました、主人を首め番頭下女はガク／＼慄へ上りまして、
 色々詫を致ししまするといへども、何うしても勘辨しないのでござい

ます、今は堪り兼ねましたか娘のお花は、其の處へ兩手を支きまし
 てはな「恐れながら御城内の旦那様、何うぞ御勘辨を願ひます、全
 く貴君方に遺恨があつて致したのではございません、下女と番頭が
 悪戯を致して居りました、夫れが外れて中つたのでございます、何
 處までもお詫を致しますから、何うか御容赦を遊ばして下さいませ
 るやう」こいつを眺めますると齋藤五平太「なアる程、オイ、オ
 イ服部、マアア然う怒るな、コレ是れを見玉へ、ナア、此の娘が
 斯くの通り詫を致して居るではないか、何も紙丸が中つたからと云
 つて、別段に貴公の頭に傷が付いたといふ譯でもなし、新様に窺
 かなる小町娘が詫びるといふに、勘辨がならないといふことがあ
 るか、お娘、お前が然うして詫を致すとあれば、吾々に於ても服部
 一ツつ挨拶を致してやらう、ナア服部、何うぞ一ツ免してやつて呉れ
 服部小八郎も昵と此の体を眺めて居りましたが服部如何にも五平太
 貴公の云ふ通りだ、勘辨ならぬどころではあるが、此の女が詫びる

とあれば勘辨を致してやる、其の代り一杯飲み直すから、是れへ來
 つて酌を致せ、然うすれば勘辨いたしてやる」と云ひながら、ク
 イツと女の手を握つて引立てようぞ致しましたはな「アレ御免遊ばせ
 服部、ナア、其様にマア、するな」と無理無体に自分等の席人伴
 れて参りました、酌をせねば勘辨せぬといふのでございますから、
 何うも今は致し方なく、怖々ながら其處にて酌を致すといふことに
 相成りました、ナア斯うなるといふと、服部、小林、齋藤の三名は
 大悦び、乃公にも酌げ、身共にも酌いで呉れといふので、頻りに飲
 んで居りましたが、終ひには手を握つて手許へ引寄せんと致しまし
 たはな「アレ御免遊ばせ」と逃げんとする奴を、亂暴にも手込にも及
 ばんとするの有様でございますから、今はお花も堪り兼ね、忽ち其
 の處を起たんとしますと齋藤待て、待てよ、何も汝は起つに及
 ばぬ、勘辨ならぬどころを酌をすればこそ勘辨いたして遣るんでは
 ないか、よ、ウ、此方が免さぬのに中座をするとは何事だ、愈々汝

は身共の前まへに在あつて酌しやくを致いたさぬとあれば打斬うちきつて了しまふが何なにうだ何なに分ぶん醉すい拂はらつて居ゐるから堪たりません、夫おとこれへ對たいして齋藤さいとう五平ごへい太奴たぬ、酒さけ與よのの上うへとは云いひながら、一ひと刀やいばを引ひ抜ひきました、之これを見みるといふと、花はなは非ひ常に驚おどろいて、忽たちちキヤツと叫こゑつて逃にげ出でした、するといふと、人ひとの者ものも醉すいに乘のりて、「エ、殺ころつて了しまへ」と何なにれも一ひと刀やいばを抜ひき逃にげししたるしたることとさいます、と此こゝの近ちか邊へで一ひと杯はひ飲のみつて居ゐりまししたる花はな見みの客きやくは、「ソレ武士ぶしが抜ひいた、抜ひいた」と八方はつぱうへ逃にげ廻まりませする、此こゝ方の三さん名なは面白おもしろ半分はんぶん分に「ナ、精せいふもんかい、ソレ殺ころつて了しまへ」と益ますます々々暴あやれ廻まります、されば此こゝの徳とく大だい寺ていの境さかい内うちは大だい騒さわ動どうとなりまして、支し度ど料りょうをも置おかす逃にげ出です客きやくもあるといふ、實じつに大だい騒さわ動どうになりまして、た、然しかるに月つき下げ亭ていの座ざ敷しきに於おいて一ひと杯はひ飲のみみながら此こゝの体ていを見みて居ゐりましした、小こ天てん狗く小こ次じ郎らう、觀くわん音おんの丹たん次じの兩りゆう名なは、甚しいことを仕しやアがる、ぞ、今いま日ひの紋もん日ひを當あたて込こんで居ゐる茶ちや店てんは、何なにの位ゐ迷ま惑わくをするか知しれ

ない、是こゝりやア捨すて置おく譯わけにはならないと、遂ついに觀くわん音おんの丹たん次じを首くびめ子こ分ぶんの奴やつ等らが掛かけて行いつて、彼かれの三さん名なの武ぶ士しを相あ手てに一ひとつの大だい喧けん嘩かを始はめるといふお話はなしでございます、一ひと寸すん一ひと息いき御ご免めんを蒙まりまして、次つぎ同どうに。

第 五 回

さて又また此こゝ方は彼かれの小こ天てん狗く小こ次じ郎らう、觀くわん音おんの丹たん次じの兩りゆう人にんは、子こ分ぶんを伴ともれ、て先まづ此こゝから月つき下げ亭ていの座ざ敷しきで一ひと杯はひ飲のみんで居ゐりまして、境さかい内うちの者ものが俄たちに武ぶ士しが長ながい刀やいばを引ひ抜ひいて、頻しばしばりに大だい勢せいの中なかで暴あやれ廻まつて居ゐりませする、加か島しま屋やの家いへ内うちの面おもて々々はガ、標めがねへながら、段だん々々と詫わかびませする、何なにうして、勤こゝろ辨べんいたしませせん、肥こ丹たん次じは此こゝの様よう子こを眺ながめて丹たん次じ何なにうだ、家いへ中ちゆうの武ぶ士しと見みえるな、小こ次じ然しかうだ、松まつ平へい下げ總そう守しゆうの家いへ來きたの奴やつ等らが、偶たまに

小 天 狗 小 次 郎

に酒でも飲やアがつて、彼様な亂暴なことを仕やアがるのだらう、何と女が可哀相ぢやないか、況して此の近邊で、今日を楽しみと祈うして一杯飲んで居る多くの仁の迷惑になることだ、誰れか行つて押へて遣れ六之助は、尻を端折つて飛び出しました、今三人の者が娘を中魁の六之助は、尻を端折つて飛び出しました、今三人の者が娘を引立てようと思ひまするところへ、と駈け着けて参りまして六之助「オイ、且那、一寸待つてお呉んなさい、お前さん方は先刻から見て居りやア、可哀さうぢやねえか、町人衆を取捉まへて、左様な詰らぬことをするものぢやアありません、成るべくなれば勘辨してお遣んなさい、服部何だ、汝は何だ六之助、私ア當所の侠客小次郎小次郎の若い者でけす、服部何だ、小次郎の若い者だ、汝達のやうな素町人が横合から要らぬことを云ふな、黙つて引込んで居る、生氣意なことを吐すと打き斬るぞ六之助何だ、餘り巫山戯たことを吐すな、瓜や茄子ぢやアあるめえし、人間の身体が左様に無暗に斬れ

小 天 狗 小 次 郎

て堪るものかい、若し汝達が勘辨を仕ねると云やア、小次郎の子分が此の野郎と向ふ鉢巻を致しまして、忽ち六之助は一刀の柄に手を掛けました、三人の者はこいつを見まして、服部何を生意氣なことを吐しやアがる、其の儀なれば汝から先に遣付けてやる」と忽ち其奴へ斬り込んで来た、とこゝろへ、と駈けて参りましたのは、同じ小次郎の子分にて、大目の敬次を首めとして、黙門の太助、又は依藤太の金太などいへる奴、敬次六、確かり遣付けろい、田士は我々が引受けた」と皆々其處へ乗り込んで参りました、然るに三人の武士に従いて来た兩人の間は、愈々喧嘩が始まつた、向ふ願巻を緊乎と締め、真鍮金具の木刀を引抜きまして、中間且那、確りか遣りなさい」と是れも三人に加勢をして、今茲に一つの大陸嘩が始まらうと致して居ります、所へ、と駈けて参りまして、たは觀音の丹次、忽ち双方の中へ分つて入つた丹次、マア且那、少時

お待ちなすつて下さい……野郎共、引けッ」と子分の輩を推し
 分けまして、やがて三人の前へ出て小腰を屈めまして丹次失禮な
 ら且那方へ申し上げまするが、私は小天狗の若い者でございまして
 何か此の野郎共が貴下方に對して粗相なことでございまして
 見えますすが、謂はゞ酒の上の興といふものでございまして、お腹も
 立ちませうが、何うか其處んどころは御勘辨を願ひたうございませ
 服部黙れッ、此奴下郎の分際と致して、武士に向つて生意氣なこと
 を云やアがる、何うあつても勘辨相成らぬ丹次、夫れぢやア是れはど
 までにお詫を致しまして、勘辨いたさぬと云ふんですか服部如何
 にも、武士道が立たぬわい丹次何だと、武士道が立たない、ムハハ
 下から出やア好いかと思やアがつて、餘り付上つたことを吐すな
 武士道もねるものだ、此の生意氣野郎、吹けば飛ぶやうな町人、或
 は女子供を引提まへ、左様なものを引抜きやアがつたッて、乃公は
 やア些ども徹さないのだ、此の上からは観音丹次が相手だ、サア出

て来い服部何を生意氣なことを吐しやアがる」と先に進んだ服部は
 「斃れッ」と云ふより早く打ち下して参りました、大抵な者なら兩
 断に相成りまするところを、ハッといふと体を懸しまして、行きなり彼れ
 の利腕を引掴みグイッとはかり、捻ぢ上げました「アッ」といふと
 ころを肩に引摺いで、筋斗打たせて二三間向ふの方へ投げ付けまし
 た、之れを眺めた齋藤、小林の兩人は「汝手向ひをさらすか」と左
 右から斬つて参りまする奴を、手早く身を引外しておいて、小林の
 横面を甚かに打ち付けましてございませ、念ひがけなき所を打たれ
 たのでございませから、横飛に飛んで了ひました、齋藤五平太が、
 「汝ッ」と斬り込んで来る奴を、是れ亦利腕を捉つて遙か向ふの方
 へ投げ飛ばしました、其の内に兩人の中間が斬り込んで来ましたが
 是れも忽ち右左へ投げ飛ばしました、實に其の腕前といふものは天
 晴なものでございませ、五人の者は初めの言葉に似も違らず、命辛
 々這々の体で逃げて去つて了ひました、大勢の者は唯ワイ〜と聲

を立つて願いで居ります。先程よりの願ぎに、全休何うなること
 であらうと、加島屋の藤右衛門は大きに慄へて居りました。漸
 彼等が遊げて了ひましたので、やがて丹次の傍へ來つて、大地に雨
 手を支きまして、藤右衛門に危いところをお助け下さいまして、有難
 うございませう。と、非常に喜んで種々様々に禮を述べます。下女や
 番頭も、娘のお花と共々に、夫れへ來つて禮を述べましたること
 ございませう。丹次失禮ながら私共が、先刻から備ふで一杯飲りながら見
 て居ました。が、お前さんの方の番頭さんか何だか知らないが、何
 も下女と巫山戯なすつたから此様な間違ひが出来たんだ。以來は訖
 度氣を付けなざるが宜い、若し又彼奴等が是れへ取つて還して何
 の新うのど云ふと面倒であります。藤右衛門は我々が引受けますから、一
 刻も早くお歸りなさるが宜しい。藤右衛門は有難うございませう。親分様は彼
 の小天狗の親方のお宅に在らつしやいませう。丹次然うでげす、親分様は彼
 音の丹次といふ客な野郎でげす、兎も角も早くお引取りなさい。」

ここで皆の者は大きに悦びまして、早く辨當などを片附けて引取らう
 と致して居ります。六之、サア若親分、往つて一杯飲み直しませう。」と
 へ立歸るといふことに相成りました。娘のお花は先程より莊然と致
 して丹次の顔と穴の明くはと打眺めて居りました。實に色は白く
 狭客とは思はれませんが、上品な質でございまして、何處の大家
 の若旦那であらうと思はれるばかりの立派な姿でございませう。其の
 ア、世の中に彼の位の優姿は又と二人どあるまいと、其の後姿に見
 惚れて居ります。加島屋の藤右衛門は「サアお花、間違ひのない
 ちに早く歸りませう。」と漸うことに、加島屋家の者は引取つて了
 ひました。跡で花見の面々は「何うだい、小次郎親分の宅にも随分
 強い仁が在るぢやアないか」とソイヤ、別段仕返に來る様子もござい
 るが此方の小天狗、丹次の兩名も、別段仕返に來る様子もござい
 せんから、遂に其のまゝ歸つて了ひました。それ以上は、

るに此の忍の行田に於て吳服屋渡世を致し、一といつて二と下らぬ
 金満家藤右衛門の一人娘のお花は、彼の花見より立歸りますと、何
 どなく物思ひ、鬱々致しまして、一向食事も進みません、何分
 一人娘のことでございませうから、非常に兩親は心配を致しまして、
 何うぞ娘の病氣を早く治したいと、そこで先づ出入の醫者を呼んで
 診察をさせて見ますと、醫者は小首を傾けまして醫者何うもお
 さんは一通りの御病氣ではございませぬ、當地に於て今小町も
 名をお博りなすつた位の是れだけの御標緻美しでございませぬし、
 殊に御年頃でもありませうから、何か是れとお見込みをお付けなされ
 た殿御でも出来たと見えます、御容体を診まするに、別段脈に異
 りのないところを見れば、必定其れに違ひございませぬと申し出
 でましたから、主人藤右衛門夫婦の者も非常に驚きました、そこで
 下女のお松を招きまして藤右衛門も角も娘の心中を尋ねて呉れ、何か
 彼れが想ひ込んだことでもあれば叶へて取らせて遣る、娘の命には

代られぬから」と子煩悩といふやつて、呉れん、も下女に云ひ含め
 ました、そこで下女は娘の居室へ遣つて参りまして「ねえお嬢さ
 ん、貴方何う遊ばしたのでございませう、何かお想ひ込みになつたこと
 らつしやるには及びませぬ、貴方、何かお想ひ込みになつたことが
 ありませうれば、遠慮なく此のお松に仰しやいませ、且那樣も非常の
 御心配で、娘が何か想うて在れば、其の望みを叶へさせるが宜いと
 のお言葉でございませう、屹度貴方は深く想ひ込んで在らつしやる
 ことがあるんでございませう、お秘し遊ばすな、此の松に云つて下
 さいませはな、ア、松としましたことが、決して妾は左様なことはないよ
 まつ「左様ぢやございませぬ、貴方無いです、合はぬ非常の働き、夫
 花見の時に、觀音の親分といふのが齡にも似合はぬ非常の働き、夫
 れを貴方は想ひ込んで在らつしやるんでございませう」ハッと思
 ましたお花は、大きに顔を赧らめまして、其のまゝ差俯いて居りま
 すから、まつ「何うでございませうお嬢さん、能く當りましたでございま

せう、夫れなら夫れで貴方、何も御心配には及びません、屹度妾が
 好い鹽梅に御周旋を致しますから、貴方お手紙を一通お書きなさ
 い、想ひのだけをお書きなすつたら、夫れを以て妾が屹度先方へ對
 して申し込んで見ますから」と段々下女が勧めまするところか
 ら、お花も今は耻かしなからはな、實のところは彼の親分のお妾が、
 今に目の前に散付いて、何うしても思ひ断ることが出来ないから、
 夫れでは汝一つお父様に内證で……まづ宜うございませ、萬々妾が
 呑み込んで居りますから、といふので、段々お花に勧めまして
 漸う想ひのだけを認めさせたることでございまして、さてお松とい
 へる下女は、お殿さんの手許から少々の金子を貰ひ受けまして、中
 々此の女も斯ういふことに掛けては如才のないもの見ゆ、早速此
 の加島屋の宅を窺かに出ますと、彼の本町の片傍に梅川といふ一
 寸いたした一軒の料亭がございませ、彼の本町の片傍に梅川といふ一
 奥の一室へ通りまして、まづ一寸一口燗けて下さい、中々大胆な女も

あるものでございませ、程なく小鉢に何か付けて、酒と共に持つて
 参りますと、まづ一寸姐さん、お前さん氣の毒だがね、使ひに行つ
 て貰ふ仁はありますまいか、女へ、其處の小天狗小次郎さんのお
 まするが、御遠方ですか、まづイ、エ、其處の小天狗小次郎さんのお
 宅まで一寸行つて貰ひたいんでございませ、女、畏まりました、
 と起て去きました、少時すると使ひの者は夫れへ遣つて参りまし
 た、使姐さん何でございませ、小天狗の親分さんの所へのお使ひ
 でございませ、かまづ貴方が行つて下さるか、使へ、私が参りませ
 う、まづ夫れではね、何うぞ氣の毒だが早く行つて来て下さい、小
 天狗の親分さんのお宅に、魁の六之助さんといふ仁が在らつしやい
 ましたら、其のお方に、お手間は取らせませんから、何うぞ茲まで
 一寸来て下さい、女が遙ひに來て居ますと、斯う仰しやつて下さい
 使、ヤッ、委細承知いたしました、と早速使ひの者は飛び出しまし
 て、小天狗の宅へ來て見ますと、子分の輩は大勢臺所に集つて四

方山の談話を致して居ります。使へ、御免なさいませ。金太「オイ、何だい。使は此の向ふの梅川から来ましたかね、エ、只今一人のお女中がお入来になりました。一口飲んで在らつしやいますか、御當家のお身内の魁の六之助さんと仰しやるお方が在らつしやいましたら、一寸何うかお入来を願ひたいのことでございます。金太「フム、オイ、六、變なこともあるもんぢやアないか、オイ、六之、何だい、金太「梅川からお前を女が呼び出しに來たぞ、汝のやうな奴を女が呼び出しに來るとは不思議だ、何うかして在やアがるな、汝は」六之助は變な顔を致しまして六之「お前は梅川の若い衆か、使へ、左様でございます、使はに頼まれたので六之「女が來て一杯飲んで居るよ、ウ、ウ、……、間違ひぢやアねか、使へ、決して間違ひぢやございません、六之「助さんと仰しやいました、魁の六之助さんといふのは貴方でせう、六之「魁は乃公だ、使へ、夫れぢやア貴方に違ひないので六之「併し何うも女が呼び出しに來る筈がない、何様な女だ、使へ、然う

です、ね、一寸二十四五でもございませうか、マア何處か御大家に御奉公でもなすつて在らつしやるお方と見なしまして、立派なお女中でございます、六之「縹緞は、使へ、別段に左様に悪うはございませぬ、ね、一寸愛敬のある女です、六之「ム、ウ、是りやア妙だ……、金太「ヤイ、六、何を其様に真面目な面をして在やアがる、白狀して下へ、覺はがあるだらう、六之「イ、ヤ、乃公「其方な覺はは些とも無いんだ、奥から丹次は出掛けて参りましたが、丹次「何だ、六之「イ、エ、ナ、若親分、私を女が呼び出しに來やアがつたんです、丹次「フム、ウ、夫りや結構だな、早く行つて遣りね、六之「一向譯が分りませんがね、マア兎も角も行つて來よう、と不思議に思ひながら六之助は、彼の使ひの者と同道をして梅川へ遣つて参りました、奥の座敷でございます、といふので、下女に案内をされ奥へ乗り込んで來て、ヒョイツと唐紙の内方を覗いて見ますと、酒肴を取寄せながら、飲みも仕ないで、ヤツと女は扣へて居ります、「オヤツ、全体何處の女であらうか」と

思ひながら、漸う唐紙を開けまして、六之御免なさいまつ「オヤ、是れは親方でございますか、能うマアお入来下さいました、サッ何うぞ此方へ六之エ、私ア魁ですがね、一向お前さんは見たやうにも思はれませんが、全体何の御用でございますかねまつ「貴方は妾をお忘れでございますか、は知りませんが、妾の方では決して貴方を忘れは致しません六之ヘエ、お前さんはまつ「妾は加島屋藤右衛門の宅に奉公をして居る下女の松と申す者でございます、此間花見の節に……六之オ、く、違ねね、夫れで漸う想ひ出した、先刻から見やうにも思つて居たが、それぢやア彼の時お前さんは番頭さんと巫山戯た仁だなまつ「ハイ左様でございます、何うも恐れ入りしましたが、少しお前さんに折入つてお願ひ申したいことがございまして、それで一寸此處へお招き申したやうな譯でございます六之ハ、ア然うかい、乃公ア是れまで女の方から文句を付けられたことがね、何から變に思つたんだ、今年ア南瓜の豊年といふのか、して何か、お前の頼

みといふのは、彼の時に乃公が腕前を願はして、魁の勢ひを見せたから、夫れでお前が想ひ込んで呉れたのか、そりやア何うも有難い夫りやアモウ此方も、他人に頼まれたことア後へは引かないといふ性分だからね、萬々其の邊のところは分つて、飽くまでも承知だまつ「左様なことを仰しやらんと、兎も角も一口召し上つて下さいませ、其の上でお頼み申し上げませう六之ア、宜しく如何にも聞きます、ぢやア一杯馳走れよう、何うも有難い」と野郎自惚根性で大方此の下女が乃公を想ひ込んで在るのであらうと思ひますから、乃公は此様なことは初めてだ、女に想はれたといふものは真更悪くはね、何ものだ、頻りにガア、と飲つて居りますまつ「ぢやア魁の親方六之何だまつ「お頼みを背いて下さいませ六之ア、背いて遣るども、何なら今晚何處かへ出掛けようかまつ「イエ、別段何處へも参らんでも宜うございます、今此處で貴方にお話し申しますからね六之、今か、夫りやア何時でも構やア仕ね、今此の唐紙を開けて

了つて……何なら蒲團を取り寄せようかまづ「貴方マア何を詰らぬこ
 とを云つて在らつしやいます、背いて下さいますのなら、早速一つ
 返事を取つて頂きたいのでございませぬがね六之「何だ、返事を取る、
 何ういふ返事を取るんだ」女はやがて懐中より一通の手紙と、金子
 を三兩取り出だして之れを紙に包みましてまづ「誠に失禮ではござい
 ますが、是れは貴方に手紙を取次いで頂く其のお骨折賃に差上げた
 うございませぬから、何うぞお納め下さいませるやうに」と手紙と共
 に六之助の前へ差し出しました六之「誰れに全体之れを渡すんだまづ
 何うか之れを観音の親分に、實は妾の方のお嬢さんが十分想ひ込ん
 で在らつしやるんですから六之「フム、何のこつたい、ぢやア乃公
 ぢやア無かつたのかまづ「冗談ぢやアございませぬよ、貴方のやうな
 お方には、餘り女の悪手もございませぬ六之「巫山戯やアがるな
 此の女奴、人を馬鹿に仕やアがつて、乃公も是れまで女の方から此
 様なことをされたことは無いから不思議に思つたんだが、ぢやア此

の金子は乃公が貰ふのかまづ「サア、お盡力賃に差上げます六之「そい
 つア有難う、乃公も此の頃は間拍子が悪くつて困つて居るんだ、ぢ
 やア其の埋合せに貰つて置かう、ぢやア若親分から乃公ア返事を取
 つて來れば宜いのだなまづ「實のところはねえ、斯様なことを申して
 は如何はしいやうではありまするが、何分お嬢さんが是れが爲に病
 うて居らつしやるんでございませぬから、親分さんが何處かで一應會
 つて頂きたいのでございませぬ六之「然うだらう、若親分の腕前では
 が想ひ込むのも無理はねえ、ア、全し人間と生れても違つたものだ
 何しろ此の土地で今小町とまで綽名を取つた彼の娘に想ひ込まれる
 といふのは結構だ、乃公と振代つたら尙結構であるに、乃公の身体
 では、生れ變つて來なくつちやア然ういふことは出來ねえまづ「何を
 コテく、云つて在らつしやいます、早くお願ひ申します六之「ア、宜
 い、ぢやア行つて來よう」とお松に別れを告げて六之助は立歸つて
 参りました、大勢の子分は待つて居りましたが金太「オ、六、何うし

た、冒く行つたか六之馬鹿を云へ、行くも行かぬもありやア仕ねえ
大變な間違ひだつた金太「フム、何う間違つたんだ六之何うも斯う
もありやア仕ねえ、全然當てが外れたんだ金太「へ、巧く云つて居や
アがる、汝其様なことを云つて、好い相談を付けて来たんであらう
全体何處の女だ六之、愚圖々々云ふなる、若親分は何うした金太「今
へ行つて、宅の親分と何うやら碁を圍つて居る様子だ六之、然うかい
と云ひながら、やがて離座敷へ来て見ると、兩人は差向ひを、ナリ
く、と碁を圍つて居ります六之、若親分「丹次「オイ、何だ六之一寸御面
儀ながら顔を貸して下さいませんか丹次「ナ、乃公に顔を貸せ、可
怪しなことを云やアがるな、用があるなら此處で云へ六之、夫れが一
寸可けんぬのです、親分の前では少し憚かることなんですから、何
うぞ一寸で宜しいから顔を貸して下さい丹次「此の野郎、何を詰らぬ
ことを云やアがる、女のところから呼び出しを掛けられやアがつて
何か文句でも付けられて来たのか六之「ナア、行つたところが全然

お門違ひで、當てが外れたんです、夫れに付いてお前さんに顔を貸
して頂きたいと思ふんです丹次「乃公に顔を貸して呉れいといふのは
何様な用があるかは知らねえが、此所で云つたら何うだ六之、夫れが
一寸親分の前では云ひ悪いので丹次「何が云ひ悪い、乃公の爲にやア
大切な兄貴が此處に居るんだ、兄貴の前で云へないことなら云ふな
難しいことを云ふやうだが、其の昔時唐土の關羽、張飛、玄徳とい
ふ三人が、桃林の中にて眞の兄弟の酒宴を催して、兄弟となる上か
らは唯何事も秘さぬやうにしよと、堅く約束を結んで、眞の兄弟
になつたといふことが、唐土の古いことを書いた本に出て居る、乃
公も斯うやつて此の土地へ流れ込んで来て、今ちやア小天狗の弟分
観音の丹次と人に知られて居るんだ、其の眞實の兄貴の前で出へな
いことなら決して云ふな、乃公「他人に物事を秘すといふことは大
難ひだ六之、それぢやア何うも仕様がございませぬ、ちやア云ひ
ますがね、親分云つても構ひませんか小次「何を又汝は變的な顔をし

て其の宅の一人娘と云やア、外へ嫁に出ることア出来ぬ、何うせ
然るべきところから養子を迎つて跡目相續をさせねばならぬ娘だ
如何に齡が長かないで前後の分別がないからと云つて其の堅氣の宅
の娘を取捉まへて疵物に仕ようを云ふやうな、左様な了簡の丹次だ
と思つてるか、乃公だつて木の股から生れたものぢやアなし、男女
の情を知らねえことはねえから、乃公のやうな身分相應な者なれば
又何とか話も仕ようけれど、一度や二度會つたところだ、乃公が養子
に行けるぢやアなし、眞の娘を疵物にするまでのことだ、乃公も少
しやア望みのある身だ、是れに居る小天狗の親分の弟、觀音の丹次
も云はれる者が、女に附文をされて、夫れで悦んで在ると思ふか
全體其の下女は、斯ういふ淫らなことを取持つといふは甚だ不埒な
奴だ、主人の悪事を異見をするのが家來の本領ぢやアねえか、そい
つを好い氣になりやアがつて、汝を呼び出す何とかいふのは、大体云つ
料理屋へ登りやアがつて、

て在やアがるのだ、今丹次の云ふ通りぢやアねえか、乃公が聞いて
悪いことなら少しも云ふにやア及ばぬ六之、お前さんまでに然う云は
れて見りやア仕方がございませぬ、ぢやア申しませぬ、此の前花見
の時に加島屋の娘を助けてお遣りなすつたことがありませう、丹次、
夫れが何うした六之、どこで向ふの下女が私を呼び出しに來た
んで、夫れが甚しい當てが違つたのです、マア親分御覽なさい、
が、夫れが甚しい當てが違つたのです、マア親分御覽なさい、
ふ手紙です、實のところは向ふの娘がお前さんを見初めて戀病ひ
いふのでして、夫れを下の女が段々聞いたものと見えて、夫れで
れで私を呼び出して、此の手紙を若親分、貴方に渡して、夫れで
事を貰つて來て呉れい、云ふのです、丹次、何だ、加島屋の娘が乃公
に文付をした、ヤ、野郎、人を馬鹿に仕やアがつて六之、イ、馬鹿
に仕やア仕ませぬ、此の通りです、マア御覽なすつて、丹次、ヤ、
が爲に乃公が此様な者を貰ふんだ、先方は大家の堅氣の商人だ、
ぬは不縁の基といふことがある、先方は大家の堅氣の商人だ、
況し

たら其の下女の心得が違ふんだ、其様な淨氣な奴だから、花見の時
に彼アいふ間違ひが出来たんだ、其様な物を見る用はねえから返し
て来い六之へエー、ちやア若親分、何うあつても貴方は之れを見な
いのですか丹次見る用はねえちやねえか六之若しお前さんが之れを
許んで下さらぬといふと、全然此方の貰つたものが……丹次「ナニ
六之、イェ此方のことで、玉なしになつて了ひますので丹次何を詰ら
ぬことを云つて居やアがる、早く行つて返して来い」小天狗は傍に
在つて「コッ」笑つて居ります、魁の六之助は何うも仕方がないも
のですから六之「ちやア宜しうございませ、然ういつて返して来ませ
う」と據なく手紙を持つて梅川へ歸つて参りました、先程からお松
は待ち兼ねて居りましたが、まづ「貴方、色々ど大きには有難うございま
す、何うでございませしたな六之、可いねえ」まづ「可いねえ、何
う可いのでございませ六之、乃公なら、マア第一番に悦んで開封い
たし、先さへ返事を出す筈だが、若親分は何うも偏偏しい人間だか

ら、手にも取らないで断つたんだ、マア折角だが、此の金子と共に
お返し申しませう」と其のまゝ三兩の金子を添へて、手紙を其の處
へ差出ししました、流石の下女のお松も大きに困つて了ひましたまづ
何うあつても何でございませるか、見て下さらぬのでございませるか、
六之「サア、夫れで困つて居るんだ」少時お松は考へて居りましたが
まづ「妾も此儘手紙を持つて歸ることは出来ませんよ、堅くお嬢さん
に受合つて来たんですからねえ、そこん所を何うか貴方骨を折つて
下さいな六之、夫れがね、彼の仁も年頃ではあるし、眞更心の中では
然うも思はなかつたであらうけれど、今日は間拍子の悪い所で、
宅の親分と碁を圍つて居た時であつたから、マア親分の前だから彼
アいふことを云ひなすつたのであらう、ちやア事を新うしなさい、
盆まで待つては何うだ、汝も知つての通り、大抵の所のお嬢さんも、
で、林河原へマア大概なもの集まつて、大抵の所のお嬢さんも、
又大家の若旦那も踊りに出て、随分此の色情の道も盛ひんだ、依つ

て何時なら何時と定めて置いてね、乃公ア若親分を誘れ出すから、
 汝もお嬢さんを誘れ出して、彼處に魚久といふ料理屋があるだらう
 彼家で互に待ち合せて、そこで本人同士を付き合せたら、若親分だ
 つて木の股から生れたものぢやアなし、ウソといつて得心をするだ
 らうと思ふんだ。下女のお松は之れを聞きましてまづ「はんに前さ
 んの仰しやる通りでございます、ぢやア其の日までお嬢さんに待た
 せて置きますから、能度其の當日には間違ひなくお出で下さいませ
 るよう六之、ム、如何にも承知だまづ「どうか何うか此のお金子をお
 納めなすつて六之「ぢやア此の金子は貰つて置かう、手紙だけは前
 持つて歸つて呉れまづ「夫れでは何うぞ六さん間違ひなく」と茲に雨
 人は約定を致しまして、そこで下女は當家の勘定を拂つて立歸りま
 した、されば此方の六之助は親分の宅へ立歸りますと、先づ夫れど
 なく踊の當日を待つて居りました、尤も當所は、七月の盆には、毎
 年踊が盛みまして、素より其の當日には、城下の町人、堅氣の家の

娘、下女、又は大家の若旦那までが、皆競つて踊に出でまして、僅
 か三日ばかりの間でございませうが、非常に踊が盛みまして、中には
 年越のお化のやうな姿をして出る者もございまして、先づ女のは浴
 衣に三尺帯の一つも締め足袋、足と成つて、男子の姿をして出る、
 すると男子は女子の姿になつて出ようといふ、随分可笑しな服装を
 致します、又御家中の方々は、一寸編笠などを被つて、中間、僮僕
 姿になつて躍り出すといふやうな形でございまして、未だ觀音丹次
 は一度も之れを見たとはいふやうな形でございませうから、豫て六之助は
 下女のお松と謀し合はせてございませうから、前々から夫れとなく丹
 次に踊見物を勤めて居りましたが、丁度七月の盆となりまして、
 愈々十六日の夜、暮れて間もない時分から、小天狗小次郎、觀音の
 丹次の兩名は、林河原の踊を見ようといふので、六之助を首め三四
 名の子分を伴つて出掛けるといふことに相成りました、さて一同は
 河原へ遣つて來ますると、何がさて多くの踊子が出でまして、鉦太

敷を入れて、踊廻るといふ有様でございまして、流石廣々たる河原も人を以て堆まる位でございませぬ、觀音の丹次は此の願きを見て實に驚き、大變な勢ひだど之れを眺めて居ります、氣連中が手際好く踊り廻つて居ると、家中の輩が後方よりドツと其處へ這入つて来る、女共はツイくいつて逃げ廻る、何時の程にか其奴が込合つて踊り廻るといふ、何のことはない、狂氣染みた有様でございませぬ、小次郎何うだい丹次、大變な願きです、六之親分、何處かへ行つて一杯飲つたら何うでございませう」と魁の六之助、大目の敬次、大助などが勧めますところから、小次郎、夫れぢやア魚久へ行つて飲まう」といふので、其の河原の片傍に在ります二階建の魚久といふ料亭、是れは中等以上の客は大抵飲みに行くところとございまして、今日は大紋日と見えます、景氣好く、二階から軒下に至るまで數多の提灯を吊りまして、晝を焚くばかりの有様、やがて是れへ這入つて参りますと、若者「入らつしやい、御案内」といふので、

下の奥の風障きの宜い座敷へ向けて案内を致しました、是に於て、へ物萬端を致しまして、五人の者はグビリく一杯飲み始めました、御免遊ばして下さいませ」と這入つて参りました一人の女下でございませぬ、是れ別人ならず、城下の加島屋藤右衛門の下女お松でございませぬ、是に於て丹次を呼び出すといふ一件から、圖らず此の料亭の二階に於て丹次が女に會つたるばかりに、愈々當所に於て血の雨を降し、夫れが爲に小天狗小次郎、觀音の丹次の兩名が、遂に國越をせんければならないといふ、大願助のお話に移るのでございませぬ、一寸一寸御免を蒙ります。

第六回

さて此の魚久の座敷で五人の者は快く一杯飲み交して居りますと、念ひがけなくも取合の唐紙を開いて、「御免遊ばして下さいませ」と

這入つて参りましたは、是れ加島屋の下女お極でございますまつ「親
分方へ申し上げまするが、當春は徳大寺の境内に於て大難をお助け
下さいますして、有難うございました、妾は加島屋の下女まつと申す
者でございます」小次郎は是れを見まして、小次、オ、彼の時のか女
中か、何か用かあるまつ「誠に恐れ入りましたが、観音の親分さん一
寸何うかお顔を貸して頂きたいのでございます」丹次は之れを聞き
まして、「さては此の間の一件か」と思ひまして、丹次何ぞ用かある
が、あるなら此所で云つてお呉れまつ「イエ、恐れ入りまするが、此處
では一寸差合ひますから、御面倒ながら一寸お顔を拜借願ひたう
ございます、丹次可いねえ、兄貴と斯うして一杯飲んで居るのだ、兄
貴の前で云へねえことなら、別に云ふにやア及ばねえまつ「イエモ
左様なことを仰しやらずに、妾の主人の命にも關はるはどのこと
でございますから、一寸何うか、お手間は取らせません、何うあつ
ても貴方が嫌と仰しやるなら、貴方から直接に本人にお断りなすつ

て下さるやう、妾は能度と受合つて來たんですから左様なことば能
う申して歸れませんが、又主人藤右衛門も眞更知らぬのもございま
せん、夫れゆゑ夜分にも拘らず、斯うして女二人が斯様なところ
へ出掛けて参たのでございます、何うか是非共一寸お入來なすつて
下さいませるやう、丹次「可いねえ、乃公ア左様な淫らなことは嫌ひだ
自分云ふことが出來ねえなら、其の氣を此處へ伴れて來な、乃公
が皆々の前で云つて遣るから小次「オイ、丹次「何だ兄イ小次「お
前のやうに然う素氣なく云ふもんぢやアねえ、此の仁も能く、左様
ればこそ、女の口から耻を忍んで是れだけのことを云ふんだ、左様
に素氣なく断られちやア此の仁の身が仕様がねえ、マア一逼行つて
やりな、丹次「厄介なことなア」するど子分の輩は之れを聞きまして
子分「餘り厄介なことでもございますまい、折角向ふが彼アして頼ん
で來たんだから、マア行つて篤と女に得心をさせてお遣りなさい、
丹次「何を汝達ア詰らぬことを云やアがる」強て小次郎が勧めますも

のですから仕方なく丹次「ぢやア行くど仕よう、全体何處に居るんだ
まつへ、二階でございます」とそこでお松は先に立つて案内を致
します丹次「ぢやア兄貴、一寸行つて来るよ小次「緩容行つて来るが
宜い」と茲に於きまして、丹次は一刀を提げて二階へ登つて参りま
した、廊下をメツと通りまして、奥の小静とした一室へ遣つて参り
ますると、酒肴をチャンと取寄せて、加島屋の観お花は耻づかしさ
うに扣へて居ります何がさて當所に於て評判の標緻美し、夫れが
今日は何でも想ひを晴したいといふのでございまして、薄化粧を致
した上、派手やかなるこの縮緬の浴衣を身に纏つて、十分僧扮
し込んで居りますから、實に譬ふるに物なき絶世の美人、夫れが少
し顔を覗らめて扣へて居ります、どころへお松の案内で丹次は還入
て来ましたまつ「サッ、何うぞ親分、此方へお出でを願ひまする」
丹次を正座に座らせ、四邊を見廻して唐紙を開きましてまつ「誠に
招き申しまして相済みません、實の所は此間、魁の六之助さんを頼

んで、主人が想ふだけを認められた手紙をば貴方に差上げようど致しま
した、何分手にも觸れないでお返し下さいました、一旦女が斯うと思ひ
段々とお嬢さんに御異見を致して見ました、貴方に嫌はれて見
込んで、斯ういふやうな耻かしことを致して、貴方に嫌はれて見
れば、此の世に何樂しみがある、存命て居る甲斐がないと、將に
短氣なことを仕ようどまでなさいましたから、マア、と段々ど宥
りて置きまして、お願ひ申すのでございませ、依つて主人の心中を不憫と思ひま
して、妾よりお願ひ申すのでございませ、御迷惑でもございませ
うが親分、何うぞ主人の想ひを叶へて上げて下さいませ、釣合はぬ
可いね、可いませんよ、能く物を考へて御覧なさい、釣合はぬ
は不縁の基、乃公のやうな何處の馬の骨か牛の骨か分らぬやうな者
ど、何うして末始終添ひ逃げられよう、又此の忍の行田で加島屋と
いへば人も知つたる金満家、觀音の丹次といふやうな詰らぬ根性骨を有つて
瞞着して、養子にでも這入らうといふやうな詰らぬ根性骨を有つて

居やアがるかど、他人に後指を指されるも實に乃公も残念だ、又少し乃公も所存のある人間だから、何時までも此の土地に足を留めても居られない、何時當所を出立するかも知れない身体だ、オイお花さんどやら、想うて呉れるは有難いが、折角だがお断りを致すまつ、夫れでは親分、是ははさまでに願ひ申しても、何うしても御承知下さいませんか、素氣ないばかりが親分といふのぢやアございませぬ、少しは物の道理をお考へなすつて、何うぞ主人の望みをお叶へ下さいませぬやう丹次「可いねねと云つたら可いねね、お前も加島屋の主人に對して、其様なことを取持つて濟むと思ふかまつ、夫れは何も貴方御心配には及びませぬ、宅の旦那様も豫て其の邊の所は御推量なすつて在らつしやいませぬから丹次「イヤ、何と云はうども、此の邊のどころは平にお断り申す、お花さん、お前さんも身分相當な所から婿を迎へて、夫れで兩親に安心をさせて、其の上家の相續をなさるが親御へ對しての孝行、心得違ひなことをするもんぢやアね

は、乃公もお前に見込を付けたと云はれて見りやア有難いが、到底お前と末始終添ひ違げられる身分の者ぢやアないから、此の邊のどころは飽くまでも思ひ断りなさるが宜しい、男女七歳にして席を同じうせずといふことがある、餘り長居をしては宜しくないから、ア是れにて御免を蒙る」とオイッど其のまゝ起ち上つて、素氣なくも此の所を立去らうと致しました、先程から頼は唯ヤッど差俯いて何事も云はず涙に暮れて居りましたが、今は堪り兼ねましたること、でございませぬか、ツカ、ッど丹次の傍へ進み寄つてはな、モッ親分様、一寸お待ち下さいませ」と袂を掴んだ、丹次はヒョイッど回首く途端に、早くも丹次の腰なる一刀を引抜きまして、既に自害をせんとする有様でございませぬから丹次「オイ危ねる何を大膽なことをするんだ」と怪我をさせてはならぬと思ひますから、夫れを取上げんと致しませぬはな、何うぞ死なせて下さいませ、女の口から此のやうな恥かしいことを申しまして、是れはとまでにお願ひ申しまして

も、貴方が嫌だと仰せられますれば、何うも致し方がございせん
 所詮妾は存命では居られません」と尙も自害を仕ようといふ有様で
 ございますから、困つて了つたのは丹次です丹次「オイお女中、何を
 お前は左様に吊然として見て居るんだ、主人が今死なうといふんで
 はないか、コレ、危いといふにまつイエ、決して妾は止めません、
 サッお嬢さん、確りお切り遊ばせ、愈々親分様が承知をして下さら
 ぬといふことなれば、お嬢さん、貴方ばかりではございません妾も
 共々に冥途のお供を致しまする」と此奴も女ながら大膽な奴で、
 際て用意をして来たか、帯の間から懐剣を取出しまして、鞘を拂つ
 て是れ亦自害を仕ようといふ有様でございます、此方を止めれば此
 方が死なうとする、左右に分つての刃物三味といふのでございま
 から、困つて了つたのは観音丹次、何うも斯うなるといふと女は強
 いものでございます、能くお芝居でも演ります通り、己れの望み
 の叶はぬ時は、直ちに「オ、然うぢや」と自害に掛る「アレ危い」

と野郎が止める、左様なら此の懸叶へて下さんすか「ぢやと申して
 是れが「マア左様なら死にませうか」「サア夫れはでは」「死にませう
 か」「サア」「サア」サア……と取合ひに及びまして、遂には野郎の方
 が「チエー是非に及ばぬ」と承知をするといふ、マア大抵紋切形は
 極つたものでございます」ところが夫れが反對に男の方になりませ
 と大變でございます、實アお前に惚れて居るんだが、乃公の云ふこ
 とを肯いて呉れんか「妾は左様なことば嫌でございます」「夫れでは
 何うあつても肯いて呉れんか、僕の云ふことを肯いて呉れねば致し
 方がない、僕は自害をする」と一刀を引抜きましたところ、女は
 夫れを止めるかといふに中々止めません「貴方か何うな勘定で、何
 さい」と其儘でドン／＼と逃げ出して「了ふといふやうな勘定で、何
 うも平素は女は耻かしさうにして居りまするが、卒さといふ場合に
 至ると、女の方が強いのでございます、流石の丹次も今は殆ど困じ
 果てまして丹次「マア待ちねえ、ぢやア何か、是れはと云つてもお前

方は肯き入れないのか、況して斯く二人までの命に關はるやうな
 分、前肯いて下さいますか丹次、肯かなければ仕方がないぢやアないか
 お前方は死なうと云ふんぢやアないか、はな、眞個でございませうか丹次、
 眞個にも虚言にも、一人ならず二人までの命に關はることだから、
 マア其の一刀を放しなと漸うのことに、眞個に肯いて下さいませうか
 ヲリと鞘に納めましたまづ、それでは眞個に肯いて下さいませうか
 下女のお松もやがてのこと、互に見合はす顔と顔、バツと顔を報らめま
 の傍へ突き進りました、互に見合はす顔と顔、バツと顔を報らめま
 して、莞爾笑つた其の目許、堪つたものぢやアありません、下女の
 お松は片傍へ飛び退いた途端に、バツと燈火を消しました、さて此
 の後、は暫時の間講談は黙でございませう、豈夫講談に黙といふはご
 いませせんが、之れを申し上げますと違警罪に觸れるから申し上げ
 られませせん、依つて何うか此の邊の所は諸君宜しく御推量下さ

いまするやうに願ひます、下女は其のまゝメイツと外へ出て去つ
 て了ひました、やゝ少時経ちまして、何うやら斯うやら燈火を点け
 て唐紙の外へ持つて参りました下女のお松は、「お嬢様はな、オヤお松
 かに、暗くつて仕ようがないから、何うか燈火を持つて来てお呉れし
 内方へ這入つて見まするといふと、お花は莞爾笑ひながら、體裁悪さ
 毛を撫で上げて居ります、丹次は正面に座りまして、体裁悪さ
 な顔を致しながら丹次、オイお松さん、最う大分夜も更けたやうだか
 ら、若し途中で間違があつてはならない、お花さん、又の逢瀬の日限を、
 宜い、まづ有難うございませう、夫れぢやア親分、又の逢瀬の日限を、
 何月の何日とお極め下さいませ、丹次、それは又追つて、先刻お花さ
 んにも云つて置いたから、マア兎も角も、餘り夜の更けないうち
 歸りなさるが宜しい、そこでお松はやがて手を鳴しまして、當家の
 勘定萬端を致し、まづ、それでは何月の何日といふことが定まりまし
 ら、何うぞ六之助様を以て梅川まで報せて下さいませうと、

んで置いて、さればお花を伴ひまして、當室を起つて出て去つて了
ひました、丹次も、漸うのことに休裁惡げに下の座敷へ歸らんと、
今廊下の此方まで遣つて参りますと、左手に十疊ばかりの廣座敷
がありまして、其の内方では大勢の者が一杯飲んで居りましたが、
取合の唐紙を開けて待つて居りましたものを見ね、
りなされるは觀音の親分ぢやアねねか、一寸這入つて呉んねね、失禮
ながら持合せた杯だ、素通りは可けねねから、一杯飲んで呉んねね、
回首つて見るといふと、御家中の若武士から中間の輩が、色々雑多
な姿を致した大勢の連中、是れも踊に出て今此處で一杯飲んで居る
ものを見ねます、されば其の者共が取圍いて盃を献さうといふので
ございませすから、面倒なりと思ひまして丹次「イエー、これはく
那方でございませすか、名前を呼ばれて見りやア仕方がない、併し私
は氣急でございませすから、何うか御免下されたい、
イ、何と左様にお前逃げなくつても宜いぢやないか、相手は加島屋

の娘だつたな丹次「エ、ッ……何と仰しやいます、
いよ、〇「娘の傍ぢやア酒を飲むが、乃公のやうな無骨者の盃は受け
られねといふのか丹次「イエ、何ういたしまして、左様いふ譯では
ございませせんが、少し下に氣急さで、〇「ア下も上も云つたもんぢ
やアねね、是非受けて呉んな」と差出ししましたることとございませ
から、眞更夫れを見捨て、下へ下りる譯にもなりませす、やがて其
處へメイッと這入りまして丹次「ぢやア折角のお盃、有難く頂戴いた
しませう」と其の盃を受けんとすると、忽ち盃を引きまして、片傍
にございませした五六合も這入らうといふ大平の蓋を取つて差付けま
した丹次「ハ、ア是れは怪しからぬ、何うも此のやうな大きなやつで
は頂戴する譯にはなりませせん、〇「何が成らない、加島屋の娘の盃な
ら何様なものでも受けるだらう、身共の献す盃は受けられないか、
丹次「イエ、盃なら頂戴いたします、何うも此のやうな大平の蓋なん
かでは受けられませせん、私は元々下戸の性でございませすから、〇「愈

々々汝は飲めぬか、何うあつても飲めぬとありやア、我々が口を開つてでも飲ませるが何うだ丹次「ハ、且那方は、何うも大層な勢ひで在らつしやる、然う御冗談を仰しやつちやア困ります、ア御免を蒙ります」と其の儘オイッとして起つて去かうと仕ますと、〇ヤイ野郎、待てッ」と呼び返しませしたる、正面に扣へた一人は、是れ別人ならず齋藤五平太でございませす五平「汝ア當春能くも此方に對して恥辱を與へたな、之れを喰へ」と云ふより早く前にございませした小鉢を取つて、丹次の面上を望んで投げ付けました、ハッとして体を躲す所へ、四五人の者が、各自に隠し持つたる燗徳利、或は皿鉢の類をハラ／＼と投げ付けました、不意を吃つて丹次は、彼方此方に体を躲す、徳利は片傍へ落ちて破れる、中から酒が溢れ出すといふ騒ぎでございませす丹次「此の野郎、何を仕やアがる、城下の旦那方と思へばこそ、下から出りやア付け上りやアがつて、然う賣りたい喧嘩なら買ふて遣らう、馬鹿な真似をするな」とやがてのことに前から

打ち込んで来たやつを体を引外しておいて、ボカーりと其奴の横面を拵り倒した「ソレ喧嘩だ」といふので大勢はドッどばかりに起ち上りました、何しろ大勢の者が前々から仕組んだことでございませす「ソレ遣付けろい」といふので、ハラ／＼と駆けつけて来る奴を、今は丹次も仕方がない、大勢の者を相手に撲り合ひを始めて、忽ち二階は大騒ぎとなりませした、然るに下は下でワツと始めまして、何うやら小次郎の居る座敷へも喧嘩を吹掛けに行つたものがあると思はせまして、此處でもワイ／＼と騒いで居る様子、其の内に丹次は七八人を投げ飛ばしませして、やがて段梯子より下の方へ飛び下りて参りませしたることとございませして、見るといふと、小天狗小次郎は一刀を引抜きませして、大勢の中間を相手に働いて居ります、丹次は、夫れと見るなり丹次「兄貴、何うした小次郎、丹次か、先刻から大勢の中間奴が這入り込んで来やアがつて、乃公に喧嘩を吹掛けやアがつた、野郎共も何處か此の邊に

働いて居るに違ふねい」向ふを見るといふと、廊下の方では、魁の六之助、獸門の太助、或は大目の敬次などが三方に別れまして、何れも二人三人の相手を取つて、必死の働きでございませう。小次郎の方は十四五人もワイ／＼と云つて、得物々々を持つて打ち込んで参りますから、夫れを相手に斬り合つて居ります。丹次は是れまでなりと思ひまして、忽ち一刀を引抜き、大勢の中へ駆け入つて必死に働き出しました。此の騒ぎに家内の者は皆々逃げ出して、了つたものと見えまして、跡に残つたのは御家中の中間僮僕ばかりでございませう。漸う一方の道を開いて丹次「サッ兄貴、一旦此處を引上げるが宜からう」と云ひながら、トシ／＼と中間の輩に刀背打を吃はせて居ります。と、ころへ加島屋の下女お松は、何れにてか鬚を壊されたものと見えまして、髪を振り亂し、跣足のまゝで一生懸命に此處へ駆け込んで参りまして、まづ親分、観音の親分、と金切聲を立つて参りますから、丹次「オ、汝は加島屋のお松か、何うしたまづ、ハイ

タ大變なことが出来ました。先刻お前様にお別れ申しまして、當家をいで、漸う一二丁も城下の方へ参ります。念ひがけなくも中間衆や、又は御家中の人達が現はれ出で、到頭お様様を河原の方へ引摺いで去つて了ひました。主人を奪られては一大事と、跡を追駆けようと致しまして、遂に大勢の爲に新様に打たれました。河原命カラ／＼一方を通れて駆け戻つて來ましたが、何うぞ親分、原の方へ伴れて行きましたから助け下さいませ」といふなり其の所へ平倒つて了ひましてございませう。非常に驚いた丹次は「さへは素より仕組んだ喧嘩か、兄貴、跡を頼む」と云ひ捨て、忽ち一刀を提げ、河原の方へドシ／＼と、雲を霞と駆け出しました。東とでございまして、踊の場所も何も大騒ぎと相成りまして、人々東西に奔走を致します。其のうち丹次は凡そ四五丁も遣つて参ります。遙か上手の森の中にて、キヤ／＼と女の泣き叫ぶ聲が致しますから、やがて傍へ駆け着けて参ります。此は抑も如何に

大勢いたして加島屋の娘お花を荒縄を以て、縛りまして、將に怪し
 からぬことにも及ばんとするの有様でございます、之れを眺めた丹
 次は「ヤイ、汝等ア全体何をさらす観念しろげ」と云ひながら、怒
 色を心頭に現はして、忽ち前へ進んだ一人の者の首を、ハッカリ其
 の所へ斬つて落しました、血煙立つて其の所へ倒れますると「ヤイ
 野郎、斬りやアがつたな、ソレ遣付けるい」とありまして、四方八
 方から得物々々を振つて打込んで参りました「心得たりと」あつて
 此處にても亦大勢を相手に斬合が始まりました「心得たりと」あつて
 此方は丹次、五六名の者を向ふに廻して、「ヤヤヤ」背後より丹次の向
 りに斬り合つて居ります、何者ども知れず、背後より丹次の向
 腹を拂つた者がございます、不意を吃つて「ヨロ／＼」と踏眼いて倒
 れるところを「仕てやつたり」と大勢は、忽ち髪を掴んで引摺り廻
 し、到頭得物を挽ぎ取りまして、高手小手に縛りて了ひましたるこ
 とでございます「残念なり、遣られたか」と身体を跳いて居ります

るが、如何ども致し方がない、遂に丹次は片傍の松の木に縛られて
 了ひました、然るに覆面を致し中間体に扮装つて居りました踊子の
 一人「大きに御苦勞だつた……ヤイ丹次、汝ア乃公を見忘れたか、
 豈夫見忘れは致すまい丹次オ、汝ア花見の時に「オ、然うだ、
 是れなる加島屋の娘をば捉へて想ひを遣げて遣らうと思つてるとこ
 ろと、遂に汝が妨害を仕やアがつたんだ、服部小八郎を豈夫忘れて
 は居るまい、サツ、此の上からは汝が見て居る目の前で、此の娘を
 ば十分慰んで遣るのだ」とツイ泣き叫んで居る奴を小八「ヤイ、
 猿轡を嵌せろ△合点だ」とやがて中間体の奴が來つて夫れに猿轡
 を嵌せましたることでございまして、遂に服部は夫れを片傍へ擔い
 て参り、可哀さうにも加島屋の娘お花を捉へて、怪しからぬ振舞に
 及びまして、漸くのことには小八郎は「サツ、乃公の役目は済んだん
 だ、汝達ア跡で十分娘を慰んで遣れ、其の暇に乃公は此奴を弄殺し
 にして遣るんだ」とやがて一刀を掲げまして、松の木に縛られて居

る丹次は傍へ乗り込んで参りました小八「ヤイ、観音の丹次、サッ是れからは汝の療治だ、何か云ひ残すことがありやア残して置け」此方の丹次は齒を咬ひ緊つて丹次「チエー残念だ、汝ア能くも狼らなことを仕やアがつたな、其の上ならずも乃公に不意を吃はして斬るといふのは不埒千萬な奴、サッ、殺さば殺せ、命を惜しむ丹次ではな

た小次郎は「オ、丹次か」と云ひながら、手早く繩を解いて走り出た、此方は丹次「兄貴、彼の森の中へ行つて呉れ、加島屋の娘を寄つて集つて強淫をして在やアがる小次「そいつア大變」とやがて夫れへ乗り込んで参りまして、一當るを幸ひ斬り立てました、既に二人ばかりは其の所へ斬り倒しました、勝に残つた中間休の男は、服部と同役の彼の小林でございす、さては小天狗が来やアがつたか此いつア敵はぬ」とドンくど、逃げ出しましたることでございす

した貴方に今日嬉しきお言葉を蒙りました甲斐もなく、斯ういふやうな耻辱を受けました、妾は是れなる武士の爲に肌身を汚されましてございませぬ、何うぞ貴方の手に掛けて殺して下されませうやう、其の臨終の際に、未來は夫婦になつて遣るど、唯だ一言仰しやつて下さいませうやう、丹次、残念なことを致したが、汝が存命で居る氣がないとあれば仕方がない、観音の丹次は、必ず未來は夫婦になつて遣るぞよはな有難うございませぬ」と其の所に覺悟を定めて掌を合せました、止むを得ず丹次は背後へ廻り「南無阿彌陀佛」の聲共、遂に首を斬つて落しました、其の首級を携へて此方へ來り、氣絶をして居る服部小八郎の脇腹を足を擧げて蹴飛ばした、ウツと息を吹返して居るのは観音の丹次でございませぬ、血刀を掲げまして、仁王立に突立つて居るのは観音の丹次でございませぬ、小八「オ、丹次、汝ア細を解きやアがつたな、丹次、黙れ、一旦此方が縁を結んだ是れなるどころの女房お花を、能くも汝ア慰み物に仕やアがつたな、小八「オヤ、さては加

島屋の娘を斬つたな、汝、今晚文句を付けて置いて、身共の女房に仕ようと思つて居たんだ、最う汝は助けて置けん」と片傍に落ちてございませぬ、一刀を拾ひ取つて向はんとする奴を「何をさらす」と忽ち左の肩先から乳の下へ掛けて七八寸斬り下げました、何條以て堪りませうや、「アッ」と叫つて其の處へ倒れんとする奴を、手早く背後へ廻つて、彼の首を斬つて落しましたることでございませぬ、其のまゝ再びお花の死骸の傍へ來りまして、縮緬の片袖を引斷つて、夫れにて首級を包みました、さて自分は一刀の股血を拭ひ鞘に納め少時考へて居りましたが、何か其の身は覺悟を定めたることでございませぬ、漸う彼れ是れ夜の時刻でもあらうといふ頃は、小天狗の宅へ立歸つて參りました、何しろ宅に居りました子分の輩は、今魚久で大喧嘩が始まつて、魁の六之助、大目の徹次の兩人は少し手傷を受けて立歸つて來るやら、獄門の太助が殺られた、親分や若親分は尙だ大勢を相手に斬り結んで居るといふことを聞きまして、開は

太變なり、卒で乗り出さんといふので、ハハハハ、
 ところへ漸う丹次が立歸つて参りましたから、
 は今から繰り出さうとして居るんですが、
 した丹次「ア、兄貴も今に歸つて来るよ、
 及ばねえ、靜かにして居るが宜い」と其のまゝ決水槽下へ來つて
 イと水を一杯飲んで、やがて二階へ「く」と上つて了ひました、
 何分何うも丹次の氣相が變つて居りますから、
 ど、子分の輩は不思議に思ひました、
 まするから、魁の六之助は差足拔足して密と二階へ上つて参つて、
 内方の様子を見て見ると、丹次は己れの居室に平座りまして、
 の片袖に包んだ生首を前に据ゑ、硯箱を取出して、何か斯う手紙の
 やうな物を認めて居ります、是れは手取早く兄と加島屋への書置を
 認めるのでございまして、早くも二通の手紙を認めて了ります、
 忽ち諸肌を押脱ぎ、將に一刀を引抜いて切腹をしようといふ有様で

ございまして、六之助は大いに驚きました、
 忽ち其の處へ飛び込んで参り、緊かきと其の手を引握つて六之助、
 若親分、何をすんだ、早まつたことを仕ちやア可けんぢやない
 か丹次「イヤ、捨て置いて呉れ、六之助放せ、色情の道に溺れて、飛
 んでもねえことが出来たんだ、何うか放して呉れ六之助「夫りやア可
 ねえ、ヤイ誰れか来て呉れ、若親分が大變だ……と嗚鳴つて居ると
 ころへ、漸う立歸つて参つた小次郎は、六之助が頻りに聲を立つて
 居りますから、早速二階へ遣つて参りました、小次郎「オ、丹次、歸つ
 てゐるか六之助、親分、オ、大變です、若親分が今腹を切らうといふん
 です、小次郎「何うした丹次、早まつたことをするな丹次「兄貴、ア、飛ん
 でもねえことを仕たんだ、實ア乃公も今までは色情の道を慎んで居
 たんだが、加島屋の下女の強くての勘めといひ、お前までが行つて遣
 れと云つたものだから、遂に乗り込んで行つたのだ、どころが親分の
 お花といひ下女のお松までが、若し背いて呉れねば自害をしよう

いふので、よ據なく二人の命を助けよう致して、夫れから後は是れ
 く新様々々、遂に林河原に於てお前が乃公の繩を解いて呉れたか
 ら、お花の傍へ乗り込んで行つたところ、當春乃公が喧嘩をした服
 部小八郎の爲に肌身を汚された、夫れが口惜しいから乃公に首を斬
 つて呉れいといふんだ、乃公も餘り残念に思つたところから、遂に
 彼の首を斬つて落した、コレ此の通りだ、と彼の振袖に包んだ生
 首を示しました、六之助は非常に驚きまして六之助、小町娘を
 殺つて了つたね、丹次ア、今熱々考へて見りアや、兄貴にも申譯なく
 又加島屋の親御にも申譯がない、依つて乃公は腹を切つて云譯をす
 るんだ、腕を拱いで熱々聞いて居りました小天狗小次郎は「丹次、
 汝は娘の最期に少し斯う逆上をして居るな、汝の身体は千金にも替
 へ難い大切な体といふことを忘れたか、穴熊の金助を尋ね出して養
 父の仇を討ち、又實父の所在も捜し出さねばならぬといふ、大切な
 身の上ではないか、事の善悪に關はらず、乃公も今晚は三四人を斬

つて捨てた、何れも中間僮僕に化けては居たが、何うせ密家中の部
 屋住みの若武士に違ひない、汝も服部を斬つたと云へば、此方も魚
 久の座敷に於て、確かに齋藤五平太を斬つて捨てた、其の上ならず
 小林といふ奴も、到頭追ひ詰めて斬り殺して了つたんだ、然うして
 見るといふと、何うも此の儘此處に居るといふ譯にはならないから
 六、汝は此のお花の首級と、丹次の認められた此の書置とを持って、兎も
 角も加島屋へ行つて、斯様々々の次第といふことを萬事云つて呉れ
 丹次、ハッ是れから汝と兩人何方へか高飛を仕よう、乃公と汝と此
 の地に居なけりやア仔細ないことであるから、とありますから、觀
 音の丹次も熱々考へて見ると、成程其の身は仇を尋ねる身の上な
 り、且は津田新十郎に頼まれて、水谷大膳の所在をも捜し出さねば
 ならぬ、大切なる身体でございますから丹次夫れぢやア兄貴のお供
 を仕よう、といふので、そこで此の宅は、六之助、敬次、其の他儀
 藤太の金太などに留守居をさせ、意々夜の内に立をするといふこ

とに相成りまして、兩人は旅の用意も忽々に致して、其の夜の内に當所を逐電いたしましたることでございます、斯くて遂に恩の行田を背後になして、武州岩槻まで逃げて参りましたが、圖らずも當所に於て、又一つの大騒動を惹起しまするといふ一段でございます、が、開は一息いたしまして次回に伺ひまする。

第七回

さて小天狗小次郎、觀音の丹次の兩人が岩槻まで参りまするまでは別に是れといふ異つたお話もなく、又追手の者も来りませんところから、先づ一安心を致しまして、此の御城下の油屋町といへる所に古河屋藤兵衛といへる旅宿がございますから、兎も角も兩人は夫れへ泊り込みました、ところが其の翌日になりまして、空模様は幾りまして、朝からトトト雨が降つて居ります、女お客様、最う晩うございますよ、お目覺めになりましては如何でございます」と下

女に呼び起されて丹次は目を覺した、丹次「オイ兄貴、起きねえか、大分遅いやうだ」漸う小次郎も目を覺しまして、早速兩人は寢床を出でました、下女はやがて蒲團などを取片附けて居ります、小次郎は室外へ出て見ると、雨がトトト降つて居ります、小次郎「何うだい、用意も別に持たず、といつて何處へ行くといふ的もなし、何うだい、今日一日逗留しようか、小次郎、夫れが宜からう」と云ふので、兩人の者は、別に急ぐといふ旅でもありませんから、下女にも其の話を致しまして、お前の方で今日一日厄介にならうといふので、食事などを済ませまして、四方山の談話を致して居りますうちに、最う午刻過ぎとなりまして、四方山の談話を致して居りますうちに、最う鹽梅だ、此の様子では今日のうちに路も乾くであらうから、兎も角も明朝は出立をしようといふので、そこを旅宿の者に云ひ付けて酒肴の用意をさせ、表の二階座敷で往來を眺めながら兩人は頻りに一

杯飲んで居りました、然るに其の日の未刻頃はひでございましてが、
 丁度此の古河屋の前を通りかゝりましたのは最う齡の頃は四十以上
 にもならぬといふやうな立派な婦人でもございまして、町人百姓ども
 思はれませんが、何うやら御家中の奥方を見まします、一人の中間
 を供に連れて遣つて参りました、其の頃當所に辨慶組といふ一つの組を立
 けて参りましたのは、其の頃當所に辨慶組といふ一つの組を立
 した一人の俠客が住居を致して居りました、是れは當所で名高い
 雀の幸次といふ俠客でございす、今では一寸子分の五六十名もあ
 りまして、随分岩槻で巾を利かせて居ります、其の子分の内にも
 三壺の清吉、唐獅子の権蔵、荒鷲の勘次、萬歳の金太などい
 何れも家雀の身内では相當の顔の利いて居る、若い者でござい
 夫等の輩が、何處か一杯飲んだものと見え、十分酔ひたし、遣
 つて参りましたのでございす、丁度今此の戸口で双方行き合ひ
 ました、奥方の従れて居る下郎を見ましますと、突然三壺の清吉は

「ヤイ、其處へ来たのは岡平ぢやねえか、汝ア人を馬鹿にして居や
 アがる、全体此間は乃公が口を利いて親分の前を都合を付けて置い
 てやつたのだ、直ぐに一兩日の内に持つて来ると吐しやアがつて、
 其儘でもつて顔出しも仕ねえのは、全体何うしやアがるんだ、此方
 が催促を仕なければ好い氣になつて打棄つて置きやアがる、返答し
 る」と云ふなり岡平の胸倉を取促まへました岡平「こりやア誰れか
 と思つたら、お前は寒雀の許の三壺の兄イぢやねえか、何うも濟ま
 ねえことをした、今日は斯うやつて主人のお供先だから、何事も
 云はず勘辨して呉んねえ、何れ一兩日の内には出掛けて行つて何う
 ども譯を付けるから清吉「ヤイ、岡平、人を馬鹿に仕やアがるな
 畢竟する此處で會つたなればこそ汝は左様なことを云やアがるんだ
 お供先も何も云つたもんぢやアねえ、サッ、親分の宅へ出て来い、
 愈々汝ア拂ふことが出来なけりやア、汝の兩腕を引抜いて了ふぞ、
 岡平「冗談云つちやア可げぬ、僅か二兩ばかりの端下金で、腕を抜

かかれて堪るもんかい。彼の奥方といふのは立止まりまして奥方「コレ
 岡平、見共ないぢやないか、汝用があつたら、邸へ歸つた其の後で
 出直して行くが宜い」妾は氣急ぎだから岡平、何うも奥様濟みません
 此様なことが旦那様に知れましては私は申譯がございませぬ、實ア
 此の者の親分の宅で少々私に借りました、夫れでもつて其の催促を
 吃つたのでございませぬ、何うかお歸りになりまして、殿様には内
 分に願ひます、勘次「ヤ、岡平、汝ア氣の好いことを云つて居やアがる
 ナア三壺の兄イ、彼れ是れ云ふのは面倒だから引張つて歸らうぢや
 ねえか」と荒鷲の勘次は行きなり岡平の利腕を捉つて引立てようど
 しますると岡平「オイ、勘次兄イ、左様に仕なくつても宜いぢやア
 ないか、先刻からも段々いつてる通り、何をいふにも斯うして主人
 のお供先だから、何うか今日のところは勘辨して呉んねえ、勘次「馬鹿
 を云へ、汝の姿を見付けたからは、何うしても勘辨は出来ねえ、平
 生部屋へ来やアがる時にやア御大層なことばかり云つて居やアがる

て、今日に限つて其様なことを吐したつて勘辨出来ねえ、何でも斯
 でも一緒に来い岡平「何うか其處んどころをねえ、乃公ア抱くまでも
 詫びるから、何うか勘辨して貰ひたい、勘次「馬鹿なことを吐せ、ア
 来い」と云ひながら、將に四人の者は彼の岡平といふ中間を取圍い
 て引立てんと致します、何がさて往來の者は立止まりまして、何
 うなることであらうと見て居ります、何を云ふにも辨慶組の内
 於ても何れも夫れ、緯名を博つて居る位の奴でございませぬから、
 其の勢ひに中々激しうございませぬ、今は彼の奥方といふのは、餘り
 の亂暴に見兼ねましたることでございませぬから奥方「一寸お待ちな
 い、お前方は何だつて其様な亂暴なことを仕ますか、其の者に何の
 やうな用事があるのかは知らぬが、今日は妾が斯うして供に召伴れ
 て居るんだ、文句があるのかは知らぬが、邸へ歸つた後で此の者をお前の方
 へ遣りませすから、兎も角も今は免して遣つて下さい、清吉「オイ奥さん
 お前さんは何も知らねえのだ、黙つて歸るが宜い、乃公は當所で勘

慶組と絆名を博つた家畜の身内の者だ、此の下郎奴が此間部屋へ出て来やアがつて、足を出しやアがつたんだ、夫れを屹度明日持つて来るも吐したから、乃公が親分の口を利いて遣つて、二兩の貸しがあるんだ、出来ねば出来ぬで翌日出て来て断りでも吐すことか、其の後は何の沙汰も仕やアがらぬ……勘次「オイ、兄弟、愚圖々々云つてることはねえや、引摺つて行きねえ岡平、ちやア是れはさまでに断つても、お前方は肯いて呉れないか……真に奥様濟みませんが、貴方に御迷惑が掛りましてはなりません、何うかお前様は此の下郎に構はずお歸り下さいませ……ヤッ野郎、何うども仕ろい清吉、ナニ生意氣なことを吐しやアがつて、何うども仕ろいなら、如何にもして遣る」何がさて四人は酔つて居りますから堪りません、忽ちボカト、ど撲り付けました岡平「オヤッ、撲ちやアがつたな清吉、撲つたら何うした」今度には萬歳の金太といふ奴が、向脛を甚かに蹴飛ばした不意を吃つた岡平は、忽ち其所へ倒れました「ソレ遣り付けろ」と四

人は既に袋叩きにも及ばんとするの有様でございますから、餘りのことに奥方も、此のまゝ見捨て、去く譯にもなりません、奥方「何を前方は暴亂なことを仕ますか、此の者は妾の邸の召使ひの下郎、文句があるなら、後から遣ると云つて居るではないか、妾を女子と侮つて不利の氣いたことを吐すな、御家中の武家の奥方だからと云つて其様なことを恐れるやうな辨慶組の輩ちやアねえんだ、全体汝は女だ、たらに口を發くなら、奥方「黙れ、云はせて置けば妾に對して不埒の一言、佐竹伊織が妻、佐野を女子と侮り無禮なことをすると容赦は致さぬぞ、清吉「こいつア面白い、容赦しないッて汝ア全体何うする、サッ何うでも仕ろい」此方は打たれながら岡平は「オイ、お前達ア、乃公を此様に打つたら最宜いぢやないか、何れも御主人にまで迷惑を掛けるにやア及ばねえぢやないか、大抵なら最上是れで勘辨して呉んねえ、清吉「馬鹿なことを吐せ、一旦斯うして見付けた上から

は、茲で以て二兩の金子を拂へば可し、然もなければ勘辨は出来ぬ
ゑのだ、其のうちには益々人は集つて参ります、彼の奥方も、今は殆
ど四人の亂暴を持って餘しなして、思はず帯の間に手挟んでお在で懸
ばした七首の柄にヒョイッど手を掛けましたやづを、目早く見付け
た唐獅子の襦袢、「ヤイ三壺、確かり行け、如何に御家中の武家の家
内だからといつて、貸借の應對を打棄つて置きやアがつて、何うや
ら柄に手を掛けやアがつたぞ、清吉、さては汝は抜いて斬る氣か、ヤ
斬れ、辨慶組の遺だ、五分でも後へは引かね、何うでも仕やアが
れ、大きに奥様も抜くことも出来ず、柄に手を掛けたッさり躊躇つ
て居ります、どころが四人の者は酒の勢ひで益々突け入つて参り
ます、有様でございませ、其有様を二階の手摺に憑り几つて、小
狗、觀音の兩人は熱と見て居りましたが、丹次、オイ兄貴、此の邊の
客といふものは、女子や下郎を相手にして喧嘩を吹掛け、通行の
害を仕やアがつて、其の上ならず大層威張つて在やアがるが、一
つ

彼の女子を助けて遣らうか、小次、そいつも宜いな、遣つて見ね、そ
こでやがて丹次は一刀を掲げまして、下へ下りようと仕ますと、
小次、オイ兄貴、下りるにやア及ばね、此所から一つ喧嘩の橋渡し
をして遣るが宜い、丹次、それ、然うだ、と元の座に復り、食卓の上
に並んでございませ、肴の中から、やがて刺身をば箸で挟みまして
見當を定めて上から投り下しました、すると此方は三壺の清吉とい
ふ奴が、自慢で現はす文身を見せようといふので、片肌脱いで腹鳴
り切つて居ります、其の清吉の額口へヒョリと刺肉が中りました
清吉、オヤッ、何だか妙なものが降つて来やアがつたぞ、ヒョイッ
ど手を遣つて見ませ、何がさて刺肉でございませから、朝から
降つて居た雨が天氣になつたと思つたら、妙なものが降つて来やア
がつたぞ、と其のまゝ其物を口に頬張つて、ムシヤ、と喰つて了
ひました、呆れたのは小次郎に丹次、意地の汚い奴もあるものだ、な
ど、又片傍の小鉢に在ります、玉子の厚焼を取つて、野郎共の頭の

上へボカーリと投げ付けました、今度は唐獅子の権蔵といへる奴の頭へボソと中りませした、ヒョイツと手を遣つて取つて見ると厚焼でございます、權蔵「今日の天気は妙な天気だ、又此様なものが降つて来やアがつたぞ」と又此奴も口へ入れました、丹次「エ、面倒な」と此度は錦手にコテく盛つてあります、刺肉を其のまゝボカーリとぶち空けました、すると勘次の頭へ刺肉の權が落ちまして、額口の所から鼻へかけまして山葵醬油といふやつがベツツリと掛りました、勘次「オヤッ、大變なことを仕やアがつたぞ」とヒョイツと上を見るとき階の手摺に憑り几つた二人は「コック」笑つて居りますから、勘次「オヤッ兄弟、先刻から色々なものが降つて来ると思つたが、彼奴等が飛んでもねぬことを仕やアがつたぞ」と云ひながら、山葵醬油が目と鼻へ浸み込んだものと見み、頻りに勘次の野郎、腹を始り出し、た「こいつア面白い、頭上から一杯權を掛けられて、成程此の野郎へんな面を仕やアがつた」と往來の者は「ッ」と笑つて居ります、荒

驚の勘次は二階を眺めまして、勘次「ヤイ、古河屋に泊つて居やアがる客人、何だつて巫山戯た真以をしやアがつた、汝達ア横合から喧嘩を買ふ氣か、然う買ひたいなら賣つても遣らう、オイ兄弟、彼奴等を乃公等の頭上へ色々なものを投げ着けやアがつたんだ、此の野郎の方が何時でも喧嘩が出来るんだ、岡平、今日のところは汝はマア免して遣る、此方の喧嘩が忙がしい、ソレ行けつ」といふので四人の者は古河屋の家内へ飛び込んで参りました、往來の者は「オヤ大變、何うやら喧嘩が飛火をした、今度は宿屋の二階で喧嘩が始まるんだ、ソレ行つて見ろ」とワイく、云つて居りますうちに、店頭に座つて居た古河屋の番頭「これは辨慶組の親分達、何の間違ひかは存じませんが、何うか御容赦なすつて頂戴を……」清吉「馬鹿なことを云へ、汝の宅の二階に居やアがる野郎が、乃公等の頭上へ色々な物を投げやアがつたんだ、不埒な野郎だ、斬つて了ふ」と其のまゝドレく「ドレく」と二階へ上つて参りました、彼の六疊ばかりも布け

ようといふ、表二階で兩人は、食卓子の中に据ゑ差向ひでヨコ
 笑ひながら一杯飲んで居りましたが、先に進んだ三壺の清吉は、ガ
 ヲと取合の唐紙を開けまして清吉「ヤイ野郎、汝ア今二階から物を
 投げやアがつたな、何だつて人の頭上へ刺肉へ色々なものを投げ付
 けやアがつたんだ、此處へ出る小次「ハ、ハ、イヤ御大層な勢ひで来
 なすつたな、お前方が何うやら下で喰ひたさうな面をして居たから
 一寸香を投つて遣つたんだ、清吉「生意氣なことを吐すな、人の喧嘩
 を汝ア買ふ氣だな、サッ此處へ出る、全体汝等は此の土地で見たこ
 とのねえ奴だ、何といふ野郎だ小次「何だ、生意氣なことを吐しや
 アがつて、此の邊の侠客は、大道の中央で女子下郎を相手にして、
 夫れは汝達ア喧嘩が仕たいか、他人の名前が聞きたくば、汝等の
 名前から先に云へ、都合に依つたら名乗つても遣らア清吉「巫山戯た
 ことを云へ、此の岩槻で人も恐れる辨慶組の其中で、乃公は寒雀
 の身内でも、人に知られた三壺の清吉、荒鷲の勘次に萬歳の金太、

唐獅子の權藏さんといつちやア四天王とも謂はれる兄イ株だ小次「ハ
 、何うも豪さうな名前を付けてるねえ、名前が聞きたくば名乗
 つて遣らう、憚りながら乃公は、今牛若の丸之助様といふんだ、
 清吉「何だ、今牛若の丸之助だ、巫山戯た名前を命けやアがつたな
 して其方の野郎は丹次乃公か、乃公は今頼朝の今若丸様と仰しやる
 んだ、汝等は辨慶組とあるなれば、吾々には些ども頭は上らぬ筈だ
 清吉「何を巫山戯たことを云やアがる」と忽ち四人は其處へ飛び込ん
 で参りました小次「ハ、ハ、さては汝達ア喧嘩を遣付ける氣か、サア
 来い」と忽ち立ち上つたところへ、三壺の清吉は圓輪の一刃を引こ
 抜いて、小天狗小次郎の頭上より斬り込んで参りました奴を、ハッ
 とばかりに体を繰した、空を斬つてヨコ／＼と跟踏く奴の利腕を
 引掴み「ヤッ」と云ふなり、二階から往來の中央へ投げ下した、一
 刀を持つたるまゝ投げ飛ばされて来ましたから、下に居る者は「ソ
 レ大變」とトッとはかりに入方へ逃げ出した、往來の中央へ一刀を

持つたまゝ投げ下され、腰の邊を甚かに打つたものですから、急に
 起つことは能ひません、どころが後に續いて落ちて参りました、奴は
 荒鷲の勦次、此奴も一刀持つた儘で丹次の爲に投げ飛ばされ、遂に
 其の所に平倒つて了ひました、尙又後に續いて萬歳、唐獅子と、
 人の輩は何れも二階から往來へ投げ飛ばされ、眼を白黒いたして呆
 れ返つて居ります、二階の手摺に憑り几なりながら往來を眺めま
 して小次、ヤイ、奴、そりや汝達の忘れ物がある、上つて来るのも
 倒だらう、之れを持つて去け、と跡に殘つてございまして、刀二本
 手拭、煙草、入といふやうなものを、引纏めて往來の中央へ投げ出し
 した、其奴を持つたまゝ、四人の者は命辛々、這々の体で逃げ歸つて了
 ひました、〇、オイ、一寸見ね、此の宅の二階に居る人は大層な勢ひ
 ぢやアねえか、眞個に何うも辨慶組の態はねえのぢやないか、と唯
 々往來の者は、ワイ、く、と囁し立つて居ります、先程から軒下に
 んで此の有様を見て居りました、佐竹の奥方は、下郎の岡平に何か云

ひ付けたものと見えて、早速岡平は古河屋の家内へ飛んで這入り
 ました、岡平、一寸二階のお客様に何うか逢はせて呉んね、番頭、又貴方
 も喧嘩にお入でなすつたか、私の宅が迷惑を致しますから、岡平、イヤ
 然ら、ちやね、乃公が先刻彼様に打られたところを助けて下さつた
 から、夫れで一寸お禮に來たんだ、と漸う二階へ上つて参り、次の
 室に兩手を支へまして、岡平、モシ、其處に在らつしやいます親分、打
 先程は大きに有難うございまして、私は先刻往來で以て彼奴等に打
 たれまして、誠に主人の供先で迷惑いたして居ります、一つ仰しやつて
 下さいまして、有難うございませ、何うぞ御姓名を一つ仰しやつて
 下さるやう願ひたうございませ、彼れに在でなされるは此の御家中
 大岡兵庫頭様の家來、物頭役を勤めてお在で遊ばす佐竹伊織様の奥
 方のお佐野様と仰しやるお方で、私は其のお邸に御奉公を致して居
 ります、岡平と申しませ、少々所存がある、親分方の名前を承は
 りました上、主人の奥方も少々所存がある、と申して居られますので

小次「イヤ、これはお尋ねに預つて恐入る、名乗るほどの者ぢやアない、私には眞の詰らぬ田舎者であゆまずが、今日日光の方へ参詣を仕ようと思つて是れまで遣つて来て、昨晩は當家へ泊り込んだのだが朝ッからの降雨で、據なう今日一日は逗留をして居るやうな譯合、何うか跡にはお構ひなく早くお歸りなさい、晩くなつて辨慶組が又兎や角う云つて来てはならないから、岡平誠に恐れ入りましてございませす、ぢやア何うあつてもお名前は聞けませんか、小次「ナア、先刻彼の野郎共に尋ねられて、私は今牛若の丸之助、又此方の者は今頼朝の今若丸と名乗つて置きましたやうな譯合です、そこで岡平はヒエコスカ頭を下げ、様々禮を述べて下へ下り、其のまゝ奥方と同道して立歸つて了ひました、跡は小次郎と丹次の兩人は、又々酒肴を眺へ込み、類りに一杯飲んで居ります、お話替つて此方は四人の奴等、腰を屈め、面を翳めながら這々の体で寒雀の幸次、其の他大勢りました、が、丁度今臺所に長火鉢を据白、寒雀の幸次、其の他大勢

の子分の奴等は四方山の談話をして居ります、清吉「親分、大變なことが出来ました、幸次「ヤ、三壺、何といふ面をして居やアがる、又喧嘩をして来てやアがつたな、清吉「親分、残念なことをしました、吾々四人は酷い目に遭つたんです、實ア是れ、斯様々々でございます、途の中に於て岡平に逢つて金子の催促のことから、清吉「古河屋といふ宿屋の二階から喧嘩を賣りやアがつて、飛び上つてはいつたところか、何だか今牛若の丸之助、今頼朝の今若丸だとか云やアがつて、滅法界強、い奴でして、吾々四人を到頭往來へ投り出しました、此のまゝ打棄つて置きましては、お前さんの顔にも關はりませすから、何うぞ仕返しをしてお呉んなさい、幸次「何だ、さては汝達ア宿屋の二階からり、投り出された、意氣地のない奴だ、ア此の野郎、斯くなる上から、は、事の善悪に拘はらず、此のまゝ捨て置いては辨慶組の名折にな、今寒雀の身内の者が四人も、左様な目に遭つたとして見れば、一、

刀を取つて突ち上つた。今奥で、好い鹽梅に酩酊いたして、カッ
 と寢込んで居りました。一人の俠客体の男は、「何だい幸次、願々
 しい幸次、オ、三次の兄イ、今宅の若い者が喧嘩をして来やアがつた
 んだ。三次、フ、ウ、何處で喧嘩を遣つたんだ。幸次、ナア、此の向ふの
 古河屋といふ宿に泊つて居る若い野郎と喧嘩を追始めて、それで以
 て若奴等が不覺を取つて歸つて来たんだ。乃公の面に關はるから
 一寸行つて来るよ。三次、マア止しね。兄弟、何うせ若い奴等が酒でも
 飲やアがつて、詰らぬ喧嘩をしたんであらう。打棄つて置いたとて
 汝の面にも關はるめ。幸次、イ、ヤ、辨慶組の若い者が往來へ投り出
 されたとあつては此方の名折だ。黙つちやア居られない。サッ野郎
 來い」といふので、其のまゝ、と駈け出ししました。三次、ア、煩
 いなア、併し此のまゝ棄て置くといふ譯にもなるまい」と蒲團を跳
 ね去け起さ上り、背伸を致して次の室に來り、刀懸に懸けてありま
 した。扇輪の一刀を掲げまして、されば此の所を出掛けようとしまし

第 八 回

たは何者でありませるか、是れぞ日光街道で名の高い、當時寒雀の
 兄貴分と相成つて、當家へ來つて食客をして居ります。幸手の三次
 でございます、事と次第に依つたれば、幸次に一番力を添へて、其
 の奴を殺つて了はうといふ所存で、遂に古河屋へ乗り込んで参り、
 茲に圖らず觀音丹次と二度の面會を致すといふお話、一寸一息いた
 しまして次回に。

お話を替つて此方は古河屋の二階で小次郎、丹次の兩人は頻りに一杯
 飲んで居ります。亭主藤兵衛は眞蒼に成つて二階へ飛び上つて
 参りました。藤兵衛、旦那様、オ、大變なことが出来ました。小次郎、何うした
 御亭主、藤兵衛、先刻お前さんが、辨慶組の若い者を、二階から往來へ
 投りなすつたものだから、其の仕返しと見せまして、辨慶組の親分
 の幸次さんといふお方が、私の方へお出でになりました。お前の宅で

出入をすれば定めて迷惑をするだらうから、何うか二階の客人といふ
 二人の奴を立たして了つて呉れ、若し野郎が出立をしないといつ
 て威張つ居やアがるなら據ね、乃公が二階へ飛んで上つて文句が
 あるんだと仰しやいますから、マア兎も角も少時お待ちなすつてど
 止めて置きました、甚い斯様なことを申しましては恐れ入ります
 るが、私の方で貴下方が、命の通り取りを爲すつて下さいましては
 非常な迷惑を致します、何うぞマア濟まぬことではございませぬが、
 只今から御出立を下さるといふ譯にはなりません、此所から屋根を傳つて裏へ下
 りて、密と裏口から御出立下さいませしても、夫りやマア、跡のどこ
 るは、貴下方さへ居て下さいませぬのなら、私が如何やうとも寒雀
 の親分へ詫を致します、丹次「何も左様にお前方は怖がるには及ばね
 兄貴、子分が子分なら、何うせ其の親分といふ奴も高の知れた腕前
 だらう、お前が熊々手を下さすまでもね、乃公が下へ行つて、文句

を付けて、強て喧嘩を仕ようと云やア引受けて這るから、お前は此
 處に待つて居て呉んな小次、ちやア、乃公「此處で様子を見て居るか
 ら、一寸一寸應對を遣付けろ、若し汝が危いやうになりやア、此
 の小天狗も飛び出すから丹次「ナア、夫れはどちやアあるめ、よ」
 帯締め直した觀音丹次、やがて胴輪の一刀を腰に手挟んで、亭主の
 案内に伴つて二階から下りて参りました、店の庭に七八人の子分を
 伴れて待つて居ります、寒雀の幸次、一年齢は最う三十恰好でござ
 いまして、大兵肥満の男、縞縮緬の袴縮緬の袴には、巾廣の博多の帯
 を締めまして、長い刀を腰に打込んで居ります、背後に扣へた大勢
 の子分は、「親分、彼の野郎が相手の一人で今頼朝とか吐した奴です」
 此方は丹次、オイッ、店の店へ出でまして丹次「全体乃公に用がある
 ヲツてのは汝か幸次「オ、然うだ、汝は何處の野郎か知らね、生
 氣なことを云やアがつて、能くも宅の若い者を往來中へ取つて投げ
 やアがつたな、サッ寒雀の幸次が仕返しに来んだ、往來へ出る丹次「

何だど、乃公に文句がある、こりやア面白、出るどあるなら出て
 遣らう幸次「サア来い」と戸外へ飛び出さうとしますと、「ソレ喧嘩だ」
 と従いて参つた子分の輩も夫れ、用意に及びますのを、流石は
 寒雀の幸次も、少しは面を賣つて居る者だけあつて幸次「ヤイ清吉、
 相手は一入で遣つて来やアがつた、決して汝達ア横合から手出しを
 するこは成らんど、乃公も寒雀の幸次だ、乃公が殺られたら、汝
 遠ア夫れまでと諦めて、死骸を宅へ持つて歸れ……サア奴、往來へ
 出る」と云ひながらも手拭を取つて向ふ願巻、尻端折つて往來の中
 央へ罷り出でますと、「如何にも出て遣らう」と丹次も往來の中央
 へ飛び出ししました丹次「サア来い」と一刀の柄に手を掛けますと、
 早くも抜き打ちに幸次は斬つて掛りました、丹次は一足後方へ飛び
 退りさま一刀を引抜いて「ヤ、ヤ、ヤ」と受け止り、此の所に於て斬合を
 始めましたることわざいす、然るに七八人の子分は掛つて行く
 こどもなりませず、若し親分が危い時にヤア加勢を仕ようど、柄に

手を掛け十分身構へを致して居ります、二階の手摺に憑り几つて
 往來を眺めて居ります、小天狗小次郎は、何うだ丹次、何なら乃公
 が行つて腕を貸さうか丹次「サア大丈夫だ、其處から緩容見物して
 在ね、乃公が鮮しい着を拵へて遣るから」と幸次を相手に斬り合
 つて居ります、齡は長かないが中々の腕前、寒雀の幸次も相當に
 出来る奴でございませすから、互に火花を撒らして斬り結んで居りま
 したることございませす、ところへ「ソレ」と駆けて参りましたは
 幸手の三次、喧嘩の相手を見てあれば、思ひがけなくも観音の丹次
 でございませす、豫て夜分とはいへども新町の本陣に於て、其の身の
 唐丸を破つて助け出して呉れました者の顔は、確かに見て記憶にて
 居ります、此は猶豫ならじと大手を擴げて二人の中へ飛び込んだ、
 三次「サア待て幸次、早まるな少時待て幸次、オ、兄イ、危ね、お前の
 出る場合ぢやアね、暫らく其方へ避いて居て呉んな、三次「馬鹿なこ
 とを云ふな、待てッ」と云つたら少時待て、観音の兄イ、お久振りだ

お目に懸りました、何うか少時お止まり下さい丹次、汝は全体何者だ
相手をするなら一刀を抜け、大膽にも無刀で向つて、二つもない命
を捨てるな三次、マア少時待つて呉んね、兄貴、お前は乃公を見忘
れたか、幸手の三次だ丹次、ナ、オ、ほんに遠ね、道理で見た顔
だと思つたんだ、さてはお前は幸手の兄貴か、ヤッ、何うも思ひが
けないところでお目に懸りました三次、ヤイ幸次、乃公が豫て汝に話
をした、是りやア觀音の丹次と云つて、高崎の荒浪清六兄弟分の身
内では、随分名を知られた仁だ幸次、何だ、さては是れが觀音の丹
次といふ仁か、其いつア飛んでもね、何をしたとやがて後へ退
つて忽ち一刀を鞘に納めました幸次、ヤイ野郎、皆々其處へ出る、何
だつて此の兄貴に對して無禮を仕やアがつた、何うか丹次兄貴、見
損つたんです、勘辨をして呉んなさい、實はお前さんを知らない
ものですから、それで詰らぬことをしたんです、私は幸手の三次の
弟分、當所に住居をして、辨慶組と籍名を取つた、寒雀の幸次と云

ふもんでげす三次、兎も角もお前さんに色々話もあるんですから、
何うぞ幸次の宅までお入でなすつて下さいまするやう、妙なもので
先方に斯うして頭を下げて來られて見りやア、此方も感張るといふ
ことも出来ません、一刀を鞘に納めまして丹次、夫れぢやア、兎も角
も二階へ上つて兄貴に話をして、後から出直してお宅へ参ります、
三次兄貴、誠に久振りだつた、其の後は……三次、されば、委しいこ
とは幸次の宅でお話いたしませう幸次、ぢやア、お待ち申して居りま
すから、何うぞお入でなすつて下さいまするやう、と茲に於て幸次
は子分の者を召伴れまして、やがて宅へ引取りました、三次も此の
仁の兄貴といふのは、全体誰れであるかと思ひました、マア兎も角
も二階へ上つてお目に懸りませうと、そこでやがて觀音の丹次に幸
手の三次の兩人は二階へ上つて参りまして、丹次は此のことを小天
狗に話を致しますると、小次郎は姿を改め、小次、さてはお前さんが、
豫て噂に承はつて居りました幸手の三次の兄弟か、私ア當時觀音丹

次と兄弟分になりました、忍の行田に少時足を留めて居りました小
 天狗小次郎といふ者でございませぬ、以來はお見知り置かれまするや
 うと、是に幸手の三次と落合ひ申して、三人が酒宴をして居ります
 る所へ、「何うぞ御兩所をお伴ひ申して、早くお入來を願ひたい」と
 いつて、寒雀の方から、迎ひの子分が四五人、入れ代つて遣つて
 りました、是れに依つて小天狗、觀音の兩名は、遂に當古河屋の支
 拂ひ萬端を致しまして、されば幸手の三次の案内に依つて、先づ當
 所の侠客、寒雀の宅へ來ますると、やがて奥へ通しました、二人の
 者を正座に座し、幸次は遙か後へ退りまして、改めて初對面の挨拶
 を致しました、幸次「豫て三次の兄イから噂は聞いて居りましたが、先
 年上州の新町に於きまして、兄イが信州で捕縛になつて、さて唐丸
 で送られんと致したるとお助け下さいまして、還に私の方へ参りま
 さいませぬ、彼の後は柳のおせんと同道して、還に私の方へ参りま
 したから、兄貴の身体は一先私の方へ預かることに致しましたか、

何を云ふにも其の後兄貴は永々の病氣でございまして、漸う此の頃
 全快を致したやうなことでございませぬ、丹次「夫れは何より結構だ、し
 て三次兄イ、おせんさんは何うしたな、三次「何を秘しませう、彼りや
 ア幸手の驛へ歸つて居ります、私には些と餘熱の冷めるまで歸ること
 は出來ませんが、何を云ふにも幸手の驛には若い奴等も數多居りま
 すから、女ながら萬事私に成り代つて、おせんは唐丸破りの助勢
 をしたやうな顔もしないで、私の留守中は彼れが賭場を引受けて、
 今ちやア幸手の驛で、何うやら斯うやら賭場も盛んに遣つて居るや
 うな譯合でございませぬ、丹次「ハ、夫りやア結構だ、三次「併し兄貴達
 ア全体何ういふ譯で此方へ出て來なすつたんだ、そこで丹次は「彼
 の唐丸破りの其の際にはお前さん方御夫婦を落して置いて、一旦は
 大勢を引受けて少時は斬り結んで居りましたが、遂に其の處を逃げ
 出して、金毘羅参りに姿を偷し、漸う忍の行田へ出掛けて参り、小
 天狗の兄イの許で厄介になつて居ります、漸う忍の行田へ出掛けて参り、小

事起り、行田の家中の奴等を相手と致し、盆の踊の大喧嘩、それが
 爲に兩人共土地に居ることならず、でア斯うして逃げて来たやう
 な譯合でございまして、一度は日光へ出掛けて行つて、若し幸手の
 驛へお前さんが歸つて居るようなら、都合に依れば御厄介になら
 うと思つて来たんです、何分些し尋ねる者もありませんので、とこ
 丹次は、自分の義理の父の仇と致す穴熊の金助、尙又吾等の生
 親の素性も一向分らぬから、是れ等の所在も捜したいので、諸方を
 尋ね廻るのであるといふ、一伍一什の話を致しました、然う斯うす
 るうちに、追々ど子分の者は酒肴を運んで参りまして、先づ四人の
 親分衆が是に落ち合ひまして、其の夜は酒宴を催すといふことに相
 成りました、そこで兎も角も小次郎、丹次の兩名は幸次の許に足を
 留めることになりました、何分幸次にも數多の子分がありまするか
 ら、若し其の中に金助が這入つては居ないかと調べて見ましたが、
 一向心當りもございせん、さて此方は佐竹伊織の奥方お佐野様は

岡平を伴れて邸へお歸りになります、今日の次第を伊織殿へ向
 けて委しく物語りに及ばれましたこと、ございまして、之れを聞
 いて佐竹伊織は、兩人の者の氣前といひ腕前といひ、實に天晴なる
 者である、大いに感心を致されましたこと、ございまして、それ
 では捨て置く譯にもならぬ、遂に下郎の岡平を手許へ呼んで、非
 常に叱責になりました、此の後は決して左様な賭場などへ乗り込
 んで、不都合なことを致してはならない、二兩といふ金子は此方が
 遣るから、借りたものなら返して来い、以來は決して相成らぬぞと
 大いに戒められましたこと、ございまして、尙其の翌日になりました
 る、兎も角も兩人の俠客を邸へ呼んで来るが宜からうといふこと
 になりまして、そこで翌日岡平は古河屋へ遣つて参りました、昨日
 の兩人の客人は何うしたと聞いて見ると、全くは寒雀の親分と何う
 やら仲直りが出来まして、昨日寒雀親分の許へお引取りになりました
 てございませす、このこと、昨日寒雀親分の許へお引取りになりました、
 是れに依つて岡平は、一旦邸へ

歸つて主人に此の事を申しますと、何が何でも一應迎へて来るが
宜からうといふことでございませうから、先づ立派に土産物の菓子折
の用意を致しまして伊織の邸で用役を勤めて居りまする松本半十郎
といへる老人が態々寒雀の許へ出掛けることになり、されば岡平は
主人に願つて二兩の金子を借り受け、其金を懐中いたして、此の半
十郎に従つて遣つて参りました、さて案内を乞ひますと清吉、オ、岡
平、汝何しに來やアがつた岡平、ヤッ真に昨日は途中で以て済まぬこ
とを致しました、マア是れへ對して此の中お借り申した二兩の金子
を持つて來ましたから、何うぞお受取りなすつて清吉、ム、ウ、二兩
の金子を持つて來た、金子さへ持つて來やア兎や角うはない、此の
度のところは勘辨をして還る、又チャオイ、來るが宜い、寄せてや
るから岡平、減相な、最う乃公は是れで懲々して了つたんだ、併し一
寸宅の御用人さんが、改めて此方の親分さんにお目に懸りたいと云
つてお入でなすつたんだがね清吉、何だと、佐竹の用人が遣つて來た

さては拂ふものは拂つて置いて、何か文句を付けに來やアがつたの
だ、親分が會ふまでもね、三壺の清吉が一番其の文句を聞いて
還る岡平、オイ、冗談ぢやアね、何も文句を付けに來たんぢやアね
いや、一寸何うか親分に然う云つて呉んな、清吉は奥へ這入つて此
のこゝを申し入れますと、やがて幸次は其處へ出て参りました、
幸次「私ア寒雀だが、お前さんは半十、エ、貴方が當家の親分ですか、
私は佐竹伊織の邸で用人を勤めて居りまする松本半十郎と申す者で
ございませうが、昨日古河屋に泊つて居らつしやつた兩人のお客人は
お前さんの方へお引取りになつたといふことを聞きましたが、一寸
何うかお目通りが願ひたいので罷り出でました」そこで幸次は奥へ
参つて此のこゝを告げますと、「ぢやア、マア兎も角も會つて見よ
う」といふので、其の旨を松本に申しますと、半十郎は悦んで奥
へ來りました、岡平も後に従つてノコノコ上つて参りました半十私
は大岡兵庫頭の家の中に於きまして、佐竹伊織と申す邸の用人でござ

いませるが、昨日は是れなるところの下郎の間違ひから、奥方が非常に迷惑をなすつて在らつしやるどころを、貴下方のお骨折で、首尾能う危いところが助かりました、就きましては主人伊織は非常に悦びまして、何うか御兩所に御面會いたして、改めて御祝が申した

いどのことでもございませう、是れは粗末な品ではございませうが、道中お見舞の印まで呈上いたしたうございませうから、何うかお納めのはどを願ひます、就きましては御面倒ながら、何うか一應邸へお入來のはどを願ひたうございませう、小次郎これは何うもお使ひ痛み入りませう、ア私などは斯ういふ遊人のことでもございませう、當つて碎けるといつて、一時は貴方のお宅の奥方が下郎の爲に迷惑をして居らつしやつて、當家の若い奴等が飛んでもねむることをするのを見るに見兼ねて、ツイ横合から其の喧嘩を此方へ買つて了つたやうな譯でございませうが、さて解け合つて見りやア此様なものでけしてね、素より今喧嘩をして在るかと思ふと、直ぐに兄弟同様

になるのは、是りやア私等の社會の習慣でございませうが、定めて貴下方の目から御覽なさいましたら、何だか一向譯が分らぬやうに思召しませう、夫れでは折角の思召でございませうから、此の品は有難く頂戴を致します、お邸へは何うも出掛け兼ねますから、お歸りになりましたら、宜しく、何うかお断りを願ひます、半十「イヤ、其の仰せは御道理、御迷惑でもございませうが、是非何うか一應お入來下さいませう、やう」と段々どの半十郎の頼みでございませうから、小次郎夫れでは宜うございませう、如何にも参りませう、貴方は一足お前へお歸りなすつて、何れ後からお伺ひ申しますから」と先づ松本半十郎と岡平の兩人を歸して置いて、小次郎「三兄、何うしたものでらう、三次、然うさなア、折角向ふが彼様に云つて来たんだから、豈夫左様なことはあるまいが、丹次の兄の親の素性も、時節が来りやア分ることもあらず、アア、夫れに就いちやア成るだけ廣く交際をして置くが可いから、一行つて見ねば、併し小天狗だの観音なと、い

ふ名前を名乗つて行つちやア却て事が面倒だから、其邊は程好く田舎の堅氣の者のやうに云つて置くが可ら、そこで當家に於て衣服萬端のどころを取揃へて呉れましたから、着類なども着更へまして、先づ町人風体をいたして、やがて當家の三壺の清吉に案内をさせて、されば御家中の佐竹様のお邸へ遣つて参りました、玄關に掛つて案内を乞ひますと、「何うぞ此方へお通りを願ひます」とあつて、丁寧に案内を致して奥へ通しました、少時経つて佐竹伊織、奥方佐野の兩名は其處へお出ましになりまして、されば奥方は、昨日途中に於て難儀を救はれたることを様々と禮を述べましたることでございます、伊織は失禮ながら各々方は、伊織は先づ初對面の挨拶を致して、私には以前水戸の者でございまして、山邊小次郎と申し、常時は忍の行田に住居を致して居ります、又是れは私の弟同様の者でございまして、生れは上州高崎在り、今又是れは私の高橋丹左衛門といふ者の倅でございまして、今水澤といふ在所の高橋丹左衛門といふ者の倅でございまして、

人が日光へ参詣を仕ようと致しまして、圖らず當地を通行いたして彼の古河屋に泊つたのでございまして、些かの胸前を現はして、お助け申したやうな譯合でございまして、伊織「ハ、ア左様でござるか、併しお急ぎでなくんば、暫時當地に足を留めなすつては如何でございませう、何は無くとも御禮の印に一献差上げたい」と云つて内には、追々酒肴の用意を致し、持つて参りましたのは、年の頃は十九で銚子を持つて、耻かしさうに出で参りましたのは、年の頃は十九か二十歳とも見ゆる誠に上品な娘、後に續いて出て参りましたは是れは其の妹と見え、年頃十六七でもあらうといふ、何れも劣り優りのない縹緞美し、衣服の着付けも優美に、自然に備はる風、中振袖の小袖を纏ひ、頭髪は何れも文金の高島田、薄化粧を致し、髪は編み珍味は赤地錦の帯を背後に立結に致しまして、透かに返つて、兩手を支へました、小次郎、丹次は「ヨリと眺めました

が實に刺々なる標緻でございます。伊織、ア、實は小次郎殿とやら、何うぞお見知り置かれませう、是れは拙者の娘でございまして、此方は姉の澤野と申し、これは妹を静野と申しまして、誠に不來なるものであります。ア、何うかお見知り置かれませう。小次郎様でございますか、私は小次郎と申しませう。詰らぬ奴でございます。丹次、私は丹次と申しませう。初めてお目に懸ります。さは妾は佐竹伊織の娘澤野と申す者でございませう。昨日は阿母様が途中に於きまして、無頼漢の爲に甚う迷惑を致して居られました。お恥かしうございませう。け下さいまして、誠に有難うございませう。小次郎、イヤ何う仕りまして、要らぬところの腕立を致したやうなことで、お恥かしうございませう。と云ふ其の態は、俠客とは云ひながら、流石は以前は水戸家で食祿を取つた者、又丹次とても斯うやつて座つて見ると、武士の風に近寄つて居ります。其の内にも追々酒が酔んで参りました。伊織も

大いに酔ひました。素より斯うして二人の娘を有らませる。とでございますから、然るべき所より養子を迎へたいと思つて居ります。致して此の仁達に邸に足を留めさせ、遂には娘の婿にして、其の身の跡目をも相續させたいものであると思ひました。又娘達も其の氣があるものと自然と其の響應し振りが違ひます。又娘達も其の氣があるものと見なしまして、頻りに盃を侷めて居ります。其の内にも伊織、ア、方々お客様のお慰みに琴でも弾きたら何うだ。といふので、是れは伊織が自慢で聞せようといふのでございませう。ア、大概な者なれば現を脱して了ふ。三味線を取出して参りました。姉の三味線に合せて妹が琴を弾き鳴すといふことに相成りました。ア、丹次、丹次の兩名は根が大望を抱へたところでございます。小次郎、丹次の兩名は根が大望を抱へた身の上でございます。決して左様なことはございませせんが、伊折角の響應でございませう。迷惑ながら、熱と夫れを聞いて居

小 天 狗 小 次 郎

ります、其のうらに漸う一曲了りました、伊織は先程より頻りに首を振廻して聞き入つて居りました、伊織「ヤッ大きに御苦勞、定めしお客人、お聴き辛うございまして、小次郎「何ういたしまして、中々お見事なことでございまして、伊織「ア、父の口から新様なことを申しましては、變なことに思召しませうが、ア是れでも當家中に於ては、十人並でございませう、何うですな、貴下方御兄弟も丁度年頃も似合でございませうから、專そ此處に永く足をお留りなすつては、思ひがけなき一言に、小次郎「ヤッ思召は有難うございませうが、何を申しませうにも私共は、これから日光へお参りを致しまして、夫れから江戸の方へ出て見物をしようと思つて居りますのでございまして、伊織「ア、左様なことを云ふものぢやアござらぬ、當分拙者の許に居玉へ、ナア澤野、汝は小次郎殿は何うだ、さば「ア「ア「ア阿父さま御冗談を仰しやいませ、伊織「イヤ冗談ぢやない、靜野、高橋丹次と仰しやるお方は何と御上品なお方ではないか」と何うぞいたして、兩人

小 天 狗 小 次 郎

に足を留めさせやうと思ふところから、徐々く鼻に怪なことを勤める口調でございませうから、兩人の鼻は「ア」と顔を根らめしました、驚いたのは小次郎、丹次の兩人でございませう、此の老爺、飛んでもないことを云ひ出しやアがつた、困つて了ひました、父が新様に勤めますと、娘も最早年頃のことでもございませうから、父が新様に勤めますと、ろから、自然に其の氣が移つて参りましたもの見、耻かしさうにして扣へて居ります、丹次は小次郎に目加して、丹次「何うですな兄貴、餘り更けないうちにお暇申さうではないか、小次郎「ア夫れが宜からう、ア、佐竹様、十分頂戴いたしました、伊織「ア、宜しい、何うか然らう仰しやらず、陋苦しうはございませうが、今晚は一晚是非此方にお泊りを願ひたうございませう、小次郎「イヤ有難うはございませうが、幸次の宅でも是非歸ると申して置きませう、御迷惑でも一寸お茶なせうから、伊織「ア宜いぢやないか、コレ娘、御迷惑でも一寸お茶なりとも點れよ、これは兩人の娘が茶も出来るといふところを自慢で

見せようといふのでございませう、やがて夫れへ對してお茶を點て、
 持つて参りました。伊織「ア、服加減でございませう、何うぞ一服お召喚
 りを願ひまする」困つて了つたのは小天狗に觀音、厄介などころへ
 来たとは思つたが、豈夫斷るといふ譯にもなりませんから、迷惑な
 がら夫等を頂戴いたして居りますうちに、遂に夜は更けて参り、
 是非泊れぬのことでございませうから、そこで兩人は致し方なく、
 ア、今宵一夜は當家に厄介になつて、明日の朝歸らうといふこと
 に相成りました、愈々然う事が極りますと、非常に伊織は満足と
 致しまして伊織何うか彼方にお臥床が展べてございませうから、
 れでもございませう、お寢み下さいませうやう丹次「これは何うも有
 難うございませう、ぢやア兄貴行つて寢よう」といふので、さて小次
 郎が起ちますと、姉の澤野が案内を致します、丹次の後には妹
 の静野が從いて來るといふやうな次第で、さて此方へ來て見ると、
 寢床は別々になつてございませうしづ「ア、何うぞ是れにお寢衣がござ

いませうからお着更へ遊ばして丹次「ア、是れは何うも、エ、小次郎は
 何方へ参りましたしてございませうしづ「彼のお方は彼方のお座敷へ丹次「こ
 れは怪しからぬ、私も兄貴の傍へ参りませうしづ「イエ、左様に仰しや
 らずに、ア、宜いではございませうか、一豫て父が申し付けたのでご
 さいませうから、何うぞ貴方は此處にお寢み遊ばして下さいませうや
 う、親共が許して呉れましたのでございませうから、お邪魔ながら妾
 も……丹次「何と仰しやる、貴方が此處にしづ「ハイ」と云つて恥かし
 さうに差俯向さましてございませうから、益々大抵の者なら堪つたも
 のぢやアございませせんが、併し丹次は加島屋の娘に懸慕されて、怪
 り手を出したばかりに、遂に彼程の大騒動を惹起しましてござい
 ませうから、實に慎むべきは色情の道と、容姿を改めヒツリと其の所
 へ座りまして丹次「貴方は怪しからぬことを仰しやる、男女七歳にし
 て席を同じうせずといふこともありません、殊に深夜に及んで斯様な
 ところにお在で遊ばしては私は大いに迷惑を仕ります、ア、何

うぞ彼方へお行で下さいしつ左様ではございませうが、何うぞ暫時
 なりとも此處にお置きなすつてと傍へ寄り添はんと致しませうの
 を丹次はやがて之れを振り拂ひ、ツイツと其の處を起つて兄小次
 郎の居間を捜さんと致しませう折柄伊織「ヤア、不義者見付けた、
 其處動くな」と思ひがけなくも大音に次の室から呼ばりました、
 ハツと驚いて回首つて見ると、サツと取合の唐紙を開いて現はれ出
 てましたる佐竹伊織、後頭巻玉禪、袴の股立を高く取上げ、九尺柄
 の手槍を小脇に掻い込んで其の處へ飛び込んで参りました、これは
 怪しからぬことである、今回首つた丹次の胸板望んで「覺悟を仕
 る」と緑り出して参りました、丹次はハツと体を駈した、空を突い
 て「ヨロ、ッ」と踏み縮めて、又々「ユウ、ッ」と突き出し
 て参りました、其のうちに如何なるところの隙やあつたりけん「ヤア」
 と胸板望んで突いて來る奴を、ハツと体を駈して空を流させて置い

て、ヒョイツと槍の千段巻を引掴んだ「失策た」と伊織は引かうと
 致しませうが、中々其の引掴んだ手を放しません丹次「御老人、全体
 此の丹次を何となさる、不義者見付けたなせんの難題、お静まりな
 さい」と忽ち槍の中央を丁と打ちますと、籠手は痺れてボロりと
 槍を取落した、其の途端に取合の唐紙を開いた小次郎は「丹次、何
 うした……如何に佐竹氏、舍弟が何か無禮を働いて、夫れで斯ると
 こゝろの有様でございまするか、全体貴殿は當家に於て物頭の一つも
 勤めて在らつしやるお方にも似合はず、一時の戯れとは云へ先程の
 御一言といひ、其の上ならず我々に御姉妹を當てがつて、女子の口
 からあらうことか、淫なることを云はしめられるとは、全体何等が
 爲に斯様なお取計ひを致さるゝや」と非常の勢ひを現はしてハツタ
 とばかりに睨め付けました、伊織は宛ながら張子の虎のやうに首を
 左右に打振つて、伊織「ヤア、御兩所、何うも恐れ入りました、實は各々
 方の腕前なり器量のはどを試して見たやうなことでござるが、ア、

さを願ひたいと、何うやら新うやら兩人の娘にも得心をさせ、又の
 再會を約して、寒雀の許へ立歸るといふことに相成りました、どこ
 ろが此方は三壺の清吉でございます、清吉親分、夜前は酷い目に遭ひ
 ました、小次、何うした、清吉、頭中、部屋へ追込まれて、仕方がないか
 ら、岡平と一杯飲みました、どころが野郎、段々ど酔が廻るに従つて
 管を巻き始めました、お前達、四人もして、乃公を殺す氣か、僅か
 二兩の足を出したからと云つて、夫りやア餘り酷いぢやないか、何か
 んど、ワイ、嗚るものですから、寝ることも出来ず、又お前さん
 方も歸つて来ないものだから、到頭昨夜は夜明しをいたしましたやうな
 譯で、小次、ハ、ハ、汝も困つたか、知らんが乃公も困つた、ナ、丹次、
 丹次、眞個に兄貴、郎方といへば堅いやうでも却て柔かいものだなア
 何が何だか一向譯が分りやア仕ね、と話しながらやがて幸次の許
 へ立歸つて参りました、三次、幸次に此の次第を物語り、却て吾々
 が當所に在つては宜くないといふので、愈々當所を立つて江戸表へ

乗り込むといふお話でございます、一寸一息いたしまして次回
 に伺います。

第 九 回

さて兩人は當所を出立を致さんとする際、幸次は非常に別れを惜し
 みました、致し方なく、幸次、それでは一度江戸へ行らつしやるとあれ
 ば、豫て私が江戸に居りました節、世話になりました仁で、神田の三
 河町に上州屋嘉四郎といふ親分がございます、是れは當時江戸表
 で諸家方へ人入れ稼業を致しまして、中々巾を利かせて居ります
 から、是非是れへ對してお出で下さるやう、と萬事は寒雀が書面を
 附けて呉れましたから、是れを貰つて愈々當所を出立いたしました
 ることでございます、マア當處まで來つて居りますから、一應は
 日光へ参詣せんと思ひましたが、兎も角も一度江戸へ出て見よう
 といふので、日光行は止めて江戸表へ遣つて参りました、さて江

戸の市中へ這入つて見ると、流石は將軍のお膝下だけあつて、家屋の立派なことにいひ、人々の雑沓をするのを見て、素より丹次は初めてのことわざいいますから、非常に感心をして、彼方此方と尋ねながら、漸う神田三河町へ這つて参りました、見ると間口は七八間もあらうといふ、立派な宅でございませう、最う昏黄といふ頃はひ、小次郎は被つた笠を脱りまして、小次郎死なさいませ」と這入つて参りまして、店の室に居た大勢の子分の輩、「何方でございませう、小次郎、私は岩槻から参りました者でございませう、親分が宅でございませう、私に岩槻から参りました者でございませう、親分が宅でございませう、すりやアお目通りを願ひたうございませう、子分お名前は何と仰しやいませう、小次郎、ハイ、小次郎と申します、子分お名前は何と仰しやいませう、とやがて手紙を出して子分に渡ししました、そこで子分は其の手紙を持つて奥へ這入りましたが、程なく其處へ出て参りました、は、當家の主人嘉四郎と見えます、年輩は五十恰好、流石は立派な親分でございませう、やがて兩人の姿を見ますと嘉四、何うぞ此

方へお通りなすつて、大層御足が汚れて在らつしやると見ゆる、足を持つて来い」とありませうから、子分は其處へ洗足を持つて参りました、兩人は足を洗つて、さて奥へ通りませう、中々宅は立派なことで、彼の嘉四郎の居室と致して居ります、所へ来りませう、嘉四、ア、只今お手紙を頂きましたが、さては幸次の許からか入来になつたんでございませうか、お前さん方は小次郎、小次郎さん、又觀音の丹次さんと仰しやるお方ださうでございませうか、お名前は誰々承知を致して居ります、小次郎、これは申し晩れまして失禮を致しました、此の度當地へ参りましたのは少し尋ねる者がございまして、夫れでア、兩人斯うして参りましたのでございませうか、何うか御緩容御逗留話のほどを願ひます、嘉四、イヤ承知いたしました、何うか御緩容御逗留なさいませう、やうとありまして、流石は大勢の人を扱ふ者だけあつて、奥の離座敷を一室貸し與へましたることでございませう、そこで

子分の者にも吩咐けまして、萬事粗相のないやうにどありますから
 大變鄭重なる取扱ひを致して呉れますので、大いに兩人の者も安心
 いたして、されば其の翌日より彼方此方を見物いたして居りました
 ところ、此の三河町から程遠からぬ佐久間町といふ所に、神田長兵衛
 と云つて消防の一番組の頭を勤めまして、其の頃はひ隨分顔を利
 かせて居る者がございませう、豫て丹次も、江戸へ出たら、神田の長
 兵衛を訪ねよといふことを荒浪から云ひ付けられて居りますから
 圖らず夫れを想ひ出して、今日は一つ長兵衛を訪ねて見ようといふ
 ので、兄の小次郎にも其の話を致し、態々遣つて参りますと、幸
 ひ長兵衛は宅に居りました、上州高崎荒浪の身内といふことを申し
 入れますと、何うぞ此方へお通り下さいとありませうから、さて案
 内に伴はれて奥へ乗り込んで参りました互に初對面の挨拶を致し
 まして、觀音の丹次は、此度當地へ参りましたのは、兄小天狗と申し
 道いたして、些と江戸表に尋ねたい者があつて参りましたが、當時

ちやア上州屋嘉四郎の許に厄介に相成つて居ります、何うぞ御見
 知り置かれまして、此の後とて、何かのことに就けて宜しく御配
 慮に預かりたいと、丁寧な挨拶を致しますと、長兵衛は荒浪のお
 身内でございませうか、マア、宜しうございませう、些と私の方へ
 もお立寄り願ひます、そこでマア其の日は酒肴などを出だしま
 して、小天狗小次郎さんにも一度面會を致したいといふので、態々
 子分を以て上州屋の方へ迎ひに遣りました、依つて小天狗も早速参
 りまして、茲に一同落ち合ひ、其の日は色々の談話を致して、され
 ば非常に馳走になつて立歸りせしたることでございませう、夫れより
 後、雨人は、穴熊金助なり、且つ一旦小天狗の許に食客をして居て
 逐電いたしましたる水谷大膳が、若しや當地へ乗り込んで居るま
 いかと、夫等を尋ね旁々、相變らず、日々市中を見物いたして居り
 ますることとございませう、其の内にもモウ其の年も経ちまして、明
 ば文政の四年三月中旬と相成りました、何がさて何處とて、春季は

小 天 狗 小 次 郎

陽氣なものでございまして、上野、向島、或は淺草、吉原と追々ど
りましたから、やがて小次郎、丹次の兩人は遣つて参りますと、
長兵「お招き申したのは外ぢやアねむが、今日一度吉原へお供を仕
ようと思ふんです、此の節は夜櫻花が満開だといふことでございま
すが、何うですお出掛けなさいせんか」とあります、豫て聞き及
んで居ることでありますから、小次郎「丹次の兩名は、夫れではお
供を致しませうといふところから、當家の若い者の内、二人權六と
ある、喧嘩にかけは如才のない、三度の飯より喧嘩が好きだとい
ふ人間、是等の者を伴はして、さて夕景から吉原へ出掛けて参り
ました長兵「失禮ながら、兄貴は未だ初めてすかな小次「何うも恐れ
入りました、淺草の観音様までは度々お参詣をして存じて居ります
るが、観音様から向ふは一向知らないののでございませす長兵「ぢやア一

小 天 狗 小 次 郎

つ、今日は緩容遊びに行らつしやるが宜からう」とあつて、そこで
先づ追々参りますといふと、是れは土手八丁、次を日本堤と稱
へます、此處は見返り柳、衣紋坂、向ふへ参ると、此の通りは五十
軒、案内者同様に案内を致して、丁度燈火の点く頃はひ大門を這入
りました、仲の町の通りは數多の雪洞に燈火を点けまして、實に
櫻花は見頃でございませすから、數多の人が入り込みまして、其の雜
沓は鴻大もなれいこととございませす、是れへ對して兩人を案内を致しま
と云ふ引手茶屋がございませす、是れへ對して兩人を案内を致しま
した長兵「何うだい、内儀さん在宅か女將「オヤ神田の親分でございま
すか、サッ何うぞ御二階へお通りを」といふので、流石は長兵衛は
度々來つて居りますから、實に其の接待振は大したもののでござい
ます、お世辭「ア、五人の者を二階へ上げました長兵「何は無くとも
も一口……女將「畏まりました」と下りて行きました、やがて程な
く其處へ酒肴を運んで参りました、其のうちには、酒肴も聘せたものと

見初めまして、四五人といふもの其の處へ出まして、
 素より夜櫻は今を盛りと致しませう、是れが爲に酒も大層盛みました
 雜沓を致して居ります、此方は小次郎、丹次の兩名は、表二階の
 欄干に凭れて頻りに往來の櫻花を眺めて、流石に吉原の宵櫻は又格
 別なものである、大いに感心を致しながら、飲み上論へよで願
 で居りました、其のうちには、最う人の出盛りといふ頃はひでござい
 した、が、下の往來では、俄かに喧嘩だ、といひ、
 に奔走し始めました、小勇の權六は、何であらうかと、
 に憑りつて下の往來を眺め、向ふから大兵肥満の武士が十
 分酔酩いたして、今何處かの引手茶屋から女郎屋の方へ案内をされ
 ます、その見ゆまして、大きな聲で唄を論ひながら四五人連れで
 遣つて参りました、〇、何うです、且、吉原の夜櫻は別なものでござ
 いませう、武士然うだな、ア、立派な風景だ、併し今身共に突き當

つた曲者は何うした、〇、ナア、彼様な野郎は勘辨してお遣りな
 い、高の知れた無類漢なんぞせう、武士無禮な奴だ、身共に突き當つ
 て置きながら一言の詫言もしないとは不埒な奴だ、斬つて了、〇、
 マア、宜しい旦那、勘辨してお遣いなさい、と頻りに泥酔つて居
 る武士を宥めながら其處へ遣つて参つた者の姿を、ヒョイツと眺め
 た小勇は、「オイ、一寸來な兄弟、腕、何だ」と腕の權六は其處へ遣つ
 て参りました、小勇、アノ向ふから武士を宥めながら遣つて來た奴を知
 つてるか、腕、オヤッ、彼りやア芝の長兵衛ちやアね、か小勇、然うだ
 腕、さては芝の長兵衛が來やアがつたな、小勇、何處かの武士の供をし
 て來やアがつた、彼の野郎の面を見ると催怒いて仕様がね、の、だ、
 何うかして遣らうか、腕、ア止しね、親分が迷惑をするから小勇、
 馬鹿を云へ、餘り酒も美しくね、斯ういふ所で出逢つたのは幸だ
 マア、乃公に委せて置きね、と止せば宜いのに小勇の權六奴、其の
 頃芝に住居を致して、め組の消防の頭を勤めて居りました長兵衛と

いふ侠客がございました、此方は神田の長兵衛、彼方は芝の長兵衛、何時も火事場で些細なことから争論を致しまして、親分同士が摺れ合ふものですから、何うしても其の身内の者も仲が睦くないと見ゆましまして、今しも小勇の権六は、手にせる盃を取直し、長兵衛の頭上を望んで、上からボカリと投げ付けました、ところ長兵衛は中らすして、却て其の前へ進んで居りました、酔拂ひの武士の額口へカッチリと中りました、此方は酔拂つて居るから堪りません、アッといひてヒョイツと上を見るとき、二階の権六は密り内方へ引込みました、武士ア、痛い、待てッ長兵衛、何うなすつた、武士何うも斯うも勘辨ならなら、と其のまムロンと、猿屋の宅へ這入つて参りました、武士「ヤ、汝の宅の表の二階に居る奴は何處の奴だ、憎い奴だ、此處へ下せ、武士たる者が今下を通行いたさんとするに、盃を打付

けやアがつた、勘辨ならぬ女將「へエ、夫れは何うも飛んでもない間違を致しました、何うぞ貴方、御免難ぼして、武士「イヤ成らない、何處の奴かは知らないが、確かに吾々に對して喧嘩を吹掛けようとして来て居る者に相違ない、身共を全体何と心得る、奥州仙台伊達家の家臣だ、憎い奴だ、是れへ下せ」と頻りに嗷鳴つて居ります、後へ從いて這入た兩人の武士、松本「オイ櫻井、何うした櫻井「イヤ、松本、此の宅の二階の奴等が、身共の頭上へ盃を投げやアがつたんだから、勘辨ならぬ、何でもかんでも下へ下ろせと云つてゐるんだ、何しろ二階の輩は荒ばい喧嘩好きの人間であるといふことを知つて居りますから、家内の者も大抵なれば此の儘裁かうと思ひます、何うしても勘辨いたさぬとございます、依つて家内の者も致し方なく、先づ漸う夫れに止めておきまして、早速二階へ上つて参りませう、女將「親分、アア大變なことが出来ましたのでございます、長兵衛「何でございます、女將「實は今店頭を、仙台様のお武士ださうでござい

ますが、お通り掛りになりましたら、何ういふ間違ひかは知らない
 が、盃が頭上の中つたどか仰しやつて、何うしても勘辨ならぬと云
 つて、非常に怒つて居らつしやいますので長兵衛、ヤイ權六、何うかし
 たのか小勇「ナア親分、私が下へ下りて行きます、實ア今酔拂つた
 武士三人ばかりを、彼の芝の長兵衛の野郎が案内をして來やアがつ
 たので、餘り小癩に觸つたから、長兵衛の野郎へ向けて盃を投つて
 遣つたのです、ところが其いつが長兵衛には中らずして、酔拂つた
 武士に中つたんです、マア宜うございませ、私が遣つたんですから
 私「下へ行つて裁いて來ませ、長兵衛「ヤイ、ヤイ待て、何だつて
 此の野郎其様なことを仕やアがる、平素とは違つて、上州屋のお客
 さんが斯うしてお伴ひ申して居るんだ、何を汝ア詰らぬことを仕や
 アがつたんだ、決して汝違ア下へ下りることはならぬ、兄弟、一寸
 此處に待つて居て呉んな、小次郎「何が大變な間違ひが出来ましたか、何な
 ら私も行させませうか長兵衛「ナア宜うございませ、と他の者を待たせ

ておいて、やがて長兵衛は二階から下りて参りました長兵衛、是れ
 は旦那方でございませうか、何うやら只今若い者が盃を落したどか云
 ふことでございませうが、ほんの詰らぬ盃の献酬をして居りまして、
 何ういふものか手摺から屋根へ向けて盃を一つ取り落しましたやう
 な譯で、決して貴下方に中てようと思つて致しましたことでもござい
 ませんが、マア飛んでもない粗相を致しました、何うぞお立腹でも
 ございませうが、御勘辨なすつて下さいませうやう櫻井「成らぬ、武士
 たる者の頭上を望んで故意と打付けやアがつた、吾々を全体何と心
 得る、仙台伊達家の家臣櫻井金太夫といふ者だ、決して勘辨ならぬ
 夫れへ直れ、兩斷に致してやる長兵衛「イヤ、お腹も立ちませうが、何
 うか其處んどころを一つ、何分斯ういふ廊のことでございませうし
 殊に春季で若い者も氣が浮き立つて居りまして、ほんの粗相から起
 つたことで、素より貴下方に中てようとして遣つたのではないので
 ございませうから、何うか此の邊で御勘辨のはどを偏に願ひまする、

櫻井馬鹿なことを申せ、何うあつても勘辨ならぬ。何分言葉が鼻
 に掛つて、仙台訛が脱きませんのは、是れは此度國から初めて此の
 江戸へ来て逗留を致して居りまするうちに、圖らず今日芝の長兵衛
 が案内をして、晝間のうちから此の廓へ乗り込んで参つて、既に引
 手茶居で十分飲みまして、今女郎屋へ行かうといふ途中でございま
 す。前に進んだは櫻井金太夫といふ者で、頭上へ盃を中てたと云つ
 て、嗚つて居ります。一人は松本藤九郎、今一人は近藤新助と云つ
 て、何れも血氣の若武士でございます。先方が詫まれば尙も付け込
 んで、既に三名共一刀の柄に手を掛けまして、素破抜きをも致さん
 といふ勢ひでございます。此方は只管盛に手を支いて詫びて居りま
 す。野郎は神田の長兵衛だ、こいつア好い所で出逢はした」と
 此の野郎が豫て敵とし向ふへ廻して居ります。神田の長兵衛は「オ
 いますから、何思ひけん其處へ出でまして長兵衛、櫻井の旦那、

一寸待つてお呉んなさい。櫻井何だ長兵衛相手は高の知れた町奴、お歴
 々のお前さん方が手をお下しになるまでもございませぬ、何うぞ此
 奴ア私にお委せを願ひます。貴方に成り代つて、無禮を致した素町
 人、目に物見せて遣りますから櫻井、ぢやア汝に委せる、十分
 遣付ける。入れ代つた長兵衛は「オイ長兵衛、ぢやア、思ひがけない
 どころで逢つたなア神長「オヤツ、汝は組の……芝長「オ、然うだ
 汝も神田ぢやア威張つて居ようが、さて乃公に出逢つて見りやア面
 は上るまい、能くも汝は、乃公が供をして来た旦那に向つて投打ち
 を仕やアがつたな、サア旦那に成り代つて乃公が析檻をして遣るん
 だ、汝ア何う爲られても申分はないといふか神長「オイ、長兵衛、
 お前も同稼業の者だ、詰らないことを云はないで、仲裁をするのが
 道ぢやアないか芝長「馬鹿なことを云へ、乃公がお供を致した旦那に
 投打ちをされて、仲裁も何も云つたものぢやアない、汝ア然う云つて
 喧嘩を吹掛けようてんだな神長「然う云はないで、何うか其處んどこ

るを……芝長、籠棒奴、何を云やアがる、之れを吃へ」と云ふより早く、腰に差したる煙草入りより、銀の俵張りの煙管を抜き取り、今更に手を支いて頻りに詫びて居る長兵衛の眉間を甚かに打ち破りました。「アッ」と呼つて眉間へ手を遣つて、ロイヤットと眺めると其の手に血が付いて参りました。神長「オヤッ、長兵衛、汝ア乃公の眉間を破りやアがつたな芝長、オ、破つたら何うした、悪いか、申分があるなら何でも仕るい」神田長兵衛も「此の野郎、巫山戯た真似を仕やアがる」とは思ひましたもの、何分今日は平素とは違ひまして、自分から小次郎、丹次を招待いたして、仲うて参つて居りますのでありまして、今此處で以て命の遺取などを致して見ると、自然小次郎、丹次に迷惑の掛る道理、依つて此の所は一先無事に鎮めておいて、後で十分仕返しをして遣らうと思ひ返しまして、眉間を押へながら神長「誠に且那方、濟まぬことを致しました、斯くの通り眉間を打たれましたも、一言の申分はございませぬ、何うか御勘辨なすつ

て下さいまし」芝の長衛兵も此の様を見て宛も心持快げに芝長「何うです且那、此の奴の奴頭を打ち破つて遣りました、大抵なれば此邊でお免しなすつて……櫻井、長兵衛、能く破つた、ヤイ奴、腹が立つなら何時でも仕返しに來い、身共は是れから三浦屋治郎左衛門の許へ行つて、今宵は十分愉快を盡すんだ、云分があるか神長「ヤッ何う致しまして、云分はございませぬ、何うかマア御勘辨下さいまして櫻井「態ア見る、可訝な真似を仕やアがつて、武士たる者に向つて無禮なことを爲すど何時も此の通りである、餘程汝は意氣地のない奴だ、マア是れで些どは得心が行つた、長兵衛「行かう」と一行は早速當家を出で去つて了ひました、女將は其處へ飛んで出でました、女將「何うも親分、濟みません、飛んでもないことが出来ました、長兵衛「ナア、大したこともないよ、マア、此所で喧嘩をすれば、汝の方の迷惑になると思つたから助けて置いて遣つたのだ」そこで手拭を取出して血汐を拭ひ、二階へ上つて参りました小勇「親分、何う

小 天 狗 小 次 郎

でしたな……オヤッ、盾間を何うかなすつたので、長兵イヤ、別に何う
 も仕ない、今二階へ上らうとして、鳴居へ頭を打付けたのだ小勇、イ
 ヤ、飛んでもね、粗相を致しましたと、二人の権六の顔色は變りま
 した、小勇、親分、お前さんは子分に成り代つて御挨拶をして下さいま
 したのには有難うございませうが、さては此様な傷をお受けなすつたか
 長兵、馬鹿ア云へ、乃公が勝手に付けたんだよ、ア、宜い、緩容
 飲むが宜しいと、漸うのことに其の夜亥刻過まで皆々に飲ませまし
 たることでもございまして、さて二人を自分から招待したのでござい
 ますから、豫て俵屋の家内に申し付けまして、さて當家から彦太郎
 尾張へ對して案内をさせましたることでございませう、皆々彦へ送ら
 れましたのは、最う子刻時分でもあらうかといふ頃は、ひでございま
 した、そこで皆々女郎を見立てまして、愈々部屋へ通るといふこと
 になりまして、さて一同は一寢入りました、中々以て長兵衛
 は残念で寢られませせん、最う大抵大引にもならうといふ頃、密と自

小 天 狗 小 次 郎

分の部屋を出でまして、小天狗、觀音の兩人が能く寢込んで居ると
 ころを見済まし、やがて下へ下りて参りました、若者、親分、お便所で
 ございませうか、長兵、イヤ、ア、何うかお客人がお起きなすつたら
 乃公は一足先に引取つたから、夜が明けたら緩容お歸りなすつたと
 云つて置いて呉れるやうと、そこで其の身は若い者に表戸を開けま
 せまして、ドン、と歸つて参りましたのは、彼の向ふ七軒の俵屋
 最う大引過ぎで行燈は引けて了つて寢を致して居ります、ドン、
 と表戸を叩きまして、長兵、オイ、一寸開けて呉んね、若者、何方で
 ございませうか、長兵、乃公だ、若者、神田の親分でございませうか、長兵、オ
 、然うだ、若者、オヤ、今頃何うなすつたんだ、長兵、ア、何でも宜い、
 開けて呉んね、若い者は目を擦りながら漸う表戸を開けなすつと、
 長兵、尙だ乃公の件来て来た客人や若い者は先方で寢て居るんだが、
 乃公、少し宅に用事があるから一杯飲ませて歸るから、夜が明けて汝の
 方へ歸つて来たなら、何うか一杯飲ませて歸して呉れるやう、若者、親分

小 天 狗 小 次 郎

は……長兵乃公ア夜明に宅に在らなくつちやならない用事があるか
ら、是れから歸るんだ若者然うでございませうか、ちやア一ツ駕籠で
も呼つて來ませうか長兵、サア、夫れにやア及ばない、乃公の腰の
物を出して呉んな、そこで宵の内に預けておいた胴輪の一ツ刀を受取
つて腰に打込み、遂に當所を後になして大門を出で、五十軒より吉
原土手へ掛つて參りました、何うせ彼奴は出入をして居る仙台武士
を伴れて來やアがつたから、此の所を通りかゝつたら、汝長兵衛の野郎、
此の所の極印を打ちかゝつたら、汝長兵衛の野郎、能くも男の面体は是れ
だけの極印を打ちかゝつたら、今に何うするか見やアがれど、一
刀の目釘を濕し、下結を外つて棒十字に操り、手拭を以て向鉢巻を
緊乎と締め、土手の片傍に潜んで待つて居ります、其の内に屋敷
率公の方々は、御門開けを待つて屋敷へ這入らんだいふので、此所
に一組彼所に二組と、惣氣雜りの談話を仕ながら歸つて行きます、
するど最う東天が白ひといふ頃は、は、芝長、オ、危うございませう、

小 天 狗 小 次 郎

足許に氣を付けなさいませ、櫻井宜い、大丈夫だ、ア、何うも餘
程酒が過ぎたな、併し長兵衛、汝の盡力は誠に有難かつた、何うも
實に此様な愉快なことはない、ナア近藤、お前の方は何うであつた
ナ、近藤、イヤ何うもハヤ厚遇た、櫻井、松本、貴公は厚遇たか、松本、マ
ア、共再會はせんければならぬ、櫻井、當然だ、一兩日のうちにやア又行
かう、長兵衛、汝も行くが宜い、長兵、ヤツ、有難うございませう、と惚
氣混りの談話を仕ながら、今土手の中央へ遣つて參りますと、メイッ
と其處へ現はれ出でた神田の長兵衛は、「オイ、長兵衛待つた、野郎
待てッ、芝長、何だ、長兵衛、待てと止りやアがつたのは誰れだ、神長、誰
れでもね、神田の長兵衛が用事があるんだ、待ちやアがれ、芝長、何
だ、神田の長兵衛が用向がある、野郎可訝なことを吐しやアがる
な、さては乃公が旦那に成り代つて、汝の眉間を破つたのを遺恨の
やうに思つて居やアがるのだな、神長、汝ア能くも乃公の眉間を破つた

な、キッ兒戲的の喧嘩は仕ねね、此處で命の遣り取りをするんだ、
 抜けッ芝長、生意氣なことを吐きやアがるな櫻井、ヤイ長兵衛、何だ是
 れは芝長、實ア旦那方、是りやア神田の長兵衛といふ奴で、先刻か前
 さんに猪口を打付けやアがつた奴です、其の節眉間を破つたのを根
 葉に思やアがつて、生意氣にも野郎此様なところを待ち伏せをして
 居やアがつたんです、一番の組の腕前を御覽を願ひます櫻井、こりや
 ア面白いな、ヤイ下郎、背のくちは勘辨いたして遣つたが、キッ新
 うなつたら最う勘辨ならぬ、吾々が助太刀をして汝の息の根を止め
 てやるから然う思へ、神長、巫山、戯たことを吐すなぬ、廓の内でも
 慮はすれ、素より此處へ喧嘩に來たんだ、幾何十人掛らうとも、恐
 怖るやうな跡田の長兵衛だと思ふか、卒さ來い奴と遣に一刀を引
 抜きました、お話替つて此方は彦太郎、尾張に於きまして、小次郎小
 次郎、觀音丹次の兩人は、早くも起き出で、さて長兵衛親方は何う
 したと、彼れが歌姫の部屋へ來て見ますると、今し方歸つたどのこ

とでございませ、様子には知らねど何とやら、此りやアことに依つた
 ら、智の口の一件で、出入を付けに行つたんであるまいかと、兩
 人は其のまゝ身支度も忽々に致して、彼の引手茶屋の儀屋へ立歸つ
 て様子を知りて見ると、只今願輪の一刀を打込んで、一寸宅に用が
 あるからといつてお歸りになりませしたとございませ、益々合点行か
 ずと二人の兄弟は、路を急いで今吉原の日本堤の中央まで遣つて參
 りますると、一念ひがけなくも長兵衛同士が果合を致して居りませ
 加之以先方へは櫻井、松本、近藤の三名が助太刀を致さうといふ願
 きでございませ、之れを眺めたり、丹次に小次郎、何かは以て猶豫がな
 りませうや若し長兵衛に怪我があつては取返しがないと思ひませ
 か、急々其の中へ飛び込んで行つては神田長兵衛に助太刀を致し、吉
 原土手に於ての大喧嘩の一條より、是に江戶表に於て觀音丹次、小
 天狗の一段に關はるといふ大難
 先年の恩に報いんと、是に觀音、小次郎の一段に關はるといふ大難

を救ひ出すといふ仙太郎の奇談、且は多年の苦心空しからずして、丹次が付け狙つて居りました穴熊の金助、毒婦ありうを見付け出して、美父の仇を報じ、まつたこの丹次郎といへる者は何者の胤であつたかといふことが相分つて、立派に親子の名乗りを致すといふ、一途には観音丹次、小天狗小次郎、幸手の三次の各侠客が兄弟の約を結んで、其の家が繁昌いたさうといふ、奇々妙々、至極面白いか話と相成るのでございませうが、何を云ふにも紙數に制限がございませうから、本編は是を以ちまして一先お預かりと致しまして、引續いて次編を「柳お仙」と表題を下しまして、愈々本講談の大團結を告げますることとございませうから、其の發行の日を待つて前編并に本編とお引合せの上御愛讀あらんことを、こゝに伯龍偏に希ひ置きます。

客俠 小 天 狗 小 次 郎 (終)

明治三十六年九月八日印刷
明治三十六年九月十二日發行

發行者 中川清次郎
大阪市東區備後町四丁目卅八番邸

印刷者 井下幸三郎
大阪市南區末吉橋通四丁目十六番地

賣捌所 田中宋榮堂
大阪市南區心齋橋安堂寺町南入



【附與郎次小 天 狗 小】

發賣所

中川玉成堂

大阪東區備後町心齋橋筋西へ入

神田伯能 丸山平次郎 正徳廿五 因果山小僧	神田伯能 丸山平次郎 正徳廿五 雲霧仁左衛門	神田伯能 丸山平次郎 正徳廿五 牛若若太郎	神田伯能 丸山平次郎 正徳廿五 神道徳次郎	神田伯能 丸山平次郎 正徳廿五 稻葉小僧	神田伯能 丸山平次郎 正徳廿五 關良三助	神田伯能 丸山平次郎 正徳廿五 伊達三三	神田伯能 丸山平次郎 正徳廿五 相馬太作	神田伯能 丸山平次郎 正徳廿五 廣島天仇討	神田伯能 丸山平次郎 正徳廿五 田宮小金吾	神田伯能 丸山平次郎 正徳廿五 川紋彌	神田伯能 丸山平次郎 正徳廿五 戸田新八郎	石川一口 丸山平次郎 正徳廿五 幡隨院長兵衛	石川一口 丸山平次郎 正徳廿五 新天神記	石川一口 丸山平次郎 正徳廿五 筑紫市兵衛	石川一口 丸山平次郎 正徳廿五 羽衣お松	石川一口 丸山平次郎 正徳廿五 河内山宗俊	石川一口 丸山平次郎 正徳廿五 遊女九重	石川一口 丸山平次郎 正徳廿五 松平慶承	石川一口 丸山平次郎 正徳廿五 毛刺九右衛門	石川一口 丸山平次郎 正徳廿五 清水次郎長	石川一口 丸山平次郎 正徳廿五 黒駒勝藏	石川一口 丸山平次郎 正徳廿五 高田又兵衛	石川一口 丸山平次郎 正徳廿五 槍の權三郎
--------------------------------	---------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	------------------------------	--------------------------------	---------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	-------------------------------	---------------------------------	--------------------------------	-------------------------------	--------------------------------	--------------------------------

終

中川玉成堂

發行

行